
俺、ツインテールになります。3
水沢夢 [イラスト]春日歩
GAGAGA

小学館ｅＢｏｏｋｓ

俺、ツインテールになります。３

水沢夢

イラスト　春日歩


俺、ツインテールになります。3
水沢夢 [イラスト]春日歩

CONTENTS

デザイン／新井隼也＋ベイブリッジ・スタジオ


津辺愛香
観束総二
神堂慧理那
トゥアール



目次

俺、ツインテールになります。3

水沢夢 [イラスト]春日歩

人物紹介

観束総二（みつかそうじ）
主人公。
ツインテールを愛する高校一年生。
テイルレッドに変身。

津辺愛香（つべあいか）
総二の幼馴染。
テイルブルーに変身。

トゥアール
異世界から来た美少女。

神堂慧理那（しんどうえりな）
総二たちの通う高校の生徒会長。
テイルイエローに変身。

桜川 尊（さくらがわみこと）
神堂家のメイド兼
ボディーガード。

ダークグラスパー
眼鏡を愛する
アルティメギル首領直属戦士。

プロローグ　ツインテールとわらわ。

ふわふわ　さらさら　ぱつんぱつん。

ツインテールってふしぎ。

こちょこちょして、くすぐったい。

へんなきもちに　なってきちゃう。

おっぱいがふたつあることと、かんけいがあるのかな？

めがねのレンズも、たまにおっぱいにみえちゃう。

だからわたしは、あの人がすき。

ツインテールがきれいだし、おっぱいもおおきいの。

たたかうすがたが、とってもきれい。

ようじょにはあはあする目も、きらきらしてる。

だからわたしは、追いかけちゃう。

あなたのツインテールがみちしるべ。

ながあい　ながあい　みちしるべ。

どこまでもつづく、二本のせんろ。

かくえきていしゃなんて、しないんだから。

とっきゅう　かいそく　らぴっどらぴっど。

ちえんもせずに　追いかけちゃう。

でもね、やっぱりおっぱいも好き。

ツインテールも好きだし　おっぱいも好き。

だから両方　追いかけちゃう。

世界のはてまで追いかけちゃう。

宇宙のはてまで追いかけちゃう。

ちがう世界でも　追いかけちゃう。

「――ああ……」
　自分の頰ほおを伝うものが涙だと気づいた時、オウルギルディは手にしたノートを無意識に抱きしめていた。
　梟ふくろうのような面おもてにはうっすらと皺しわが刻まれており、それは老いではなく、彼の生への諦てい観かんの産物だった。
　自分の生きる意味に惑い、己が殉ずる属性の儚はかなさを嘆き、一度は戦いを放棄した。
　強引に招集を受け、やってきたこの世界でも、ただ抜け殻がらのように過ごす日々。
　そんな彼にとって、基地の廊下で偶然拾ったこのノートは、大い

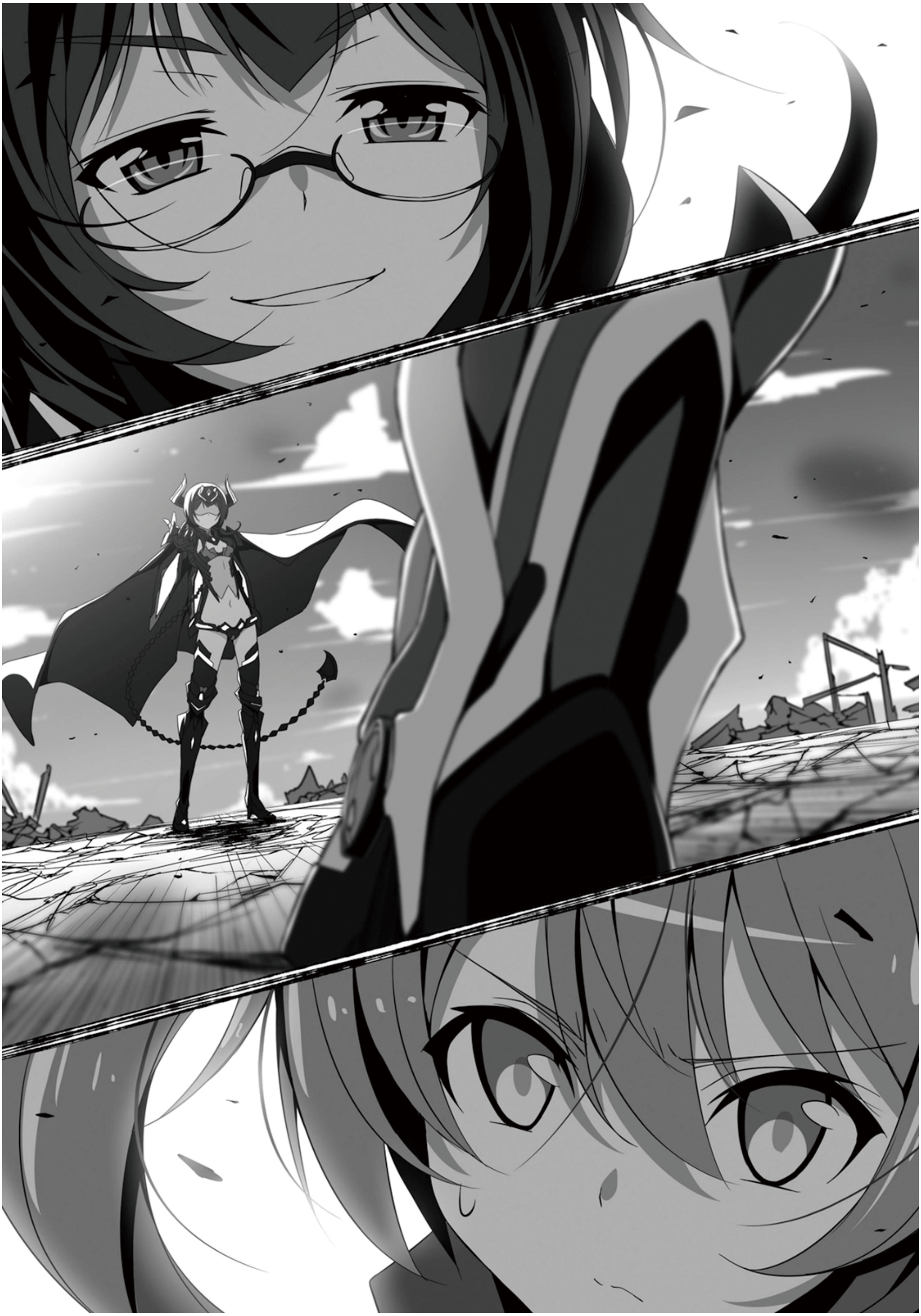
なる福音となった。
　優れた刀剣は、刃やいばの輝きを見ただけでその持ち主の遍歴を雄弁に語る。文学属性ブックを持ち、聡そう明めいな女性をこよなく愛する彼にとって、この一遍の詩は両の目で見るより遥はるかに雄弁に、綴つづった女性の品性を物語っていた。
　目に浮かぶのは、広大な楽園。
　色とりどりの花が咲き誇り、穏やかな日差しに包まれた、閑寂な避暑地に佇たたずむ小さな家。
　そのテラスで、小鳥の囀さえずりに優しい微笑を浮かべながら、純白のワンピースに身を包んだ清廉な少女が溢あふれる想おもいを詠うたったのだろう。
　この神詩ポエムが産声を上げるその光景が、まざまざと浮かぶ。
「身体からだ中を、熱き血が駆け巡ってゆく……。忘れていた若き日の情熱が、音を立てて蘇よみがえってゆく!!」
　肩の大砲の砲口がギラリと輝き、しなびた翼が雄々しく広がり天を衝つく。
　今、知と武を兼ね備えた静かなる勇兵と謳うたわれた、オウルギルディが復活したのだ。
「これほどの神詩ポエムを綴れる者を育はぐくんだ世界ならば、文学属性ブックも大いに輝いていることであろう!!」
　オウルギルディは決意も新たに、ノートを手に廊下を歩いて行った。

　よもやそれが──清廉とはほど遠い、女の情念が凝縮された怨えん嗟さの結晶であり。
　花ではなくエロゲーが咲き誇る楽園に居を構える、純白と対極な処刑人が綴った血みどろの悲文だとは……終ついぞ気づかずに。

第一章　ツインテールな敵。

「貴女あなたを迎えに来たのじゃ、トゥアール。わらわと共に、戦って欲しい」

　クラーケギルディとリヴァイアギルディ──二体の幹部エレメリアンとの激闘の余韻燻くすぶる戦場に突如現れた、謎なぞめいた黒衣の少女。
　彼女の言葉は、にわかには理解できない衝撃的なものだった。
　──アルティメギルの、首領直属の戦士──
　紛れもなく人間であるこの少女は、確かにそう名乗ったのだ。
　そして何より不可解なのは、少女がトゥアールと呼んだのは、この俺自身だったことだ。
　仮面ツインテール──〝本当のトゥアール〟を背に庇かばい、俺は前に出る。
　遥はるか後方では、それぞれの戦いに死力を尽くしたテイルブルーとテイルイエローが、意識を失い倒れている。
　何者かは知らないが、正体がはっきりとするまで、これ以上みんなに近づけるわけにはいかない。



「君は一体……何者なんだ」
　狼ろう狽ばいする俺を余よ所そに、少女は真意の見えない薄い微笑ほほえみを崩さない。
　まじろぎもせず俺の目を見ながら、少女は続ける。
「やはり、わらわがあまりにも美しく成長し過ぎて、記憶と重ならぬか。喜ぶべきじゃろうが……寂しいものよ」
　案の定この子は、俺のことをトゥアールと勘違いしている。
　背丈も見た目も、似ても似つかない俺たちだ。考えられる理由は、この子が俺のまとっているテイルギアのコア……トゥアールのツインテール属性を感じ取って、トゥアール本人と誤解している━━それ以外あり得ない。
　だが、どうしてだ。
　エレメリアンならまだしも、人間であるこの子が何な故ぜ、属性力エレメーラで人を認識する？
　それとも……見た目が人間なだけで、この子はエレメリアンなのか!?
　トゥアールの昔の知り合いなのは、どうやら間違いないようだが。
『総そう二じ様……総二様』
　テイルギアの通信機能を介して、トゥアールの声が聞こえる。
『ここは、私に任せて下さい……悪いようにはしません。そっと、後ろにお手を……』
　言われるまま後ろ手に差し出した俺の右手に、上う手まく少女に見えないようトゥアルフォンが渡された。
「イースナ……何故、この世界に!?」
　背中から自分の声が聞こえ、驚いて思わずトゥアルフォンを落としそうになる。

「おお……やはり思い出してくれたか！　嬉うれしいぞ！　そうじゃ、貴女あなたの一番の信奉者ファンであった、イースナじゃ!!」

　仮面ツインテールのマスクから、トゥアルフォンに音声を繋つないでいるんだ。

　そういえば、トゥアルフォンには変声機能もあると言っていたな。テイルレッドになりきって話を合わせ、少女から情報を引き出すつもりなんだろう。

　しかしこの機能、俺の与あずかり知らぬところで勝手に俺の声を使うことができるということだよな。かなり危険に感じてしまうが……。

　ひとまずこの場は、トゥアールに任せるしかない。

　幸い、トゥアルフォンの外部スピーカーからの音質は、肉声と比べても遜そん色しょくのないクリアーさだ。よほど間近でない限りは、見抜かれることもないだろう。

　俺は念のため、さも深刻に悩んでいるように口くち許もとを片手で覆い隠し、唇くちびるの動きを悟られないよう努めた。

「以前と随分性格が変わったようですが……それも、そのグラスギアとやらの影響ですか？」

　イースナという少女は、誇らしげに頷うなずいた。

「そうじゃ。グラスギアをまとい、ダークグラスパーとなった時、わらわは本当の自分になれる。貴女あなたの隣にいても恥をかかせぬ、一流の戦士となれたつもりじゃ」

「あなたの属性力エレメーラが失われず健在ということは──私たちの世界の侵略が完了する前に……人々から属性力エレメーラが奪われ尽くされるその前に、アルティメギルの仲間になっていたんですね」

　イースナは、初めてばつが悪そうに頷いた。

「でも、何な故ぜです。テイルギアのシステムは、私のオリジナル。

アルティメギルがデータを所有しているはずがありません」
　そう問われるや、一転して誇らしげに、イースナは眼鏡めがねのフレームに指を添えた。
「わらわの心の力じゃろう。トゥアールをずっと、ずっとずっと、ずっとずっとずっとずっと見続けるうち、わらわの眼鏡に不思議な力が宿っておったのじゃ。あとは、テイルギアの記憶を元にこの眼鏡を変身ツールへと改良した。わらわはこれを神眼鏡ゴッドめがねと呼んでいる」
　なんだその絶妙に微妙なネーミングセンスは……すげーもやもやする……。
　しかし、さすがに誘導が上う手まい。
　傍聴者でしかない俺にも、二人の関係が少しずつ見えてきた。
「わらわにも教えてくれぬか。何なに故ゆえ、貴女はそんな子供のような姿になってしまったのじゃ？　確かに、貴女が幼な子ばかり愛する戦士であることは、全世界の人間の知るところであったが」
　そんな不名誉な情報を人々に共有されてなお、誇り高く戦い続けたという悲劇の英雄は、相変わらずタイムラグ無しにポンポンと出任せを言い始めた。
「初めは贖しょく罪ざいのつもりでした。自分の身体からだを捨て、私が愛した幼な子たちの姿にあえて変身し、他この世界を守ることで……罪滅ぼしをしようと。ですが、小さな身体に変わることを、私の身体は全く拒絶しなかった。むしろ、悦よろこんでさえいたのです」
　確かに、好きなものに変わるんじゃ、罰にはならないよなあ。ちょっと喜んでしまうのも、無理はない。……いや、自己弁護してるんじゃなくてな。
「やがてこの身体を完全に受け入れてしまったその時、私は元の姿に戻れなくなっていました……。あなたの知るトゥアールという存

在は、もはや世界から消えたのです」
　それはまずい。好きなものに変身できても、ずっとは駄目だ。メリハリはつけよう。
　……いや、自己弁護してるんじゃなくてな。
　イースナは眼鏡の奥の目を見開き、わなわなと震え始めた。
「なんと……変身の一時的な身体変化ではないというのか!?　では、おっぱいは！　トゥアールのあのそびえ立つおっぱいはどうしてしまったのじゃ!!」
「身体に拒絶されたのは、おっぱいの方です。私のおっぱいは、次元の彼方（かなた）に消え去りました。どことも知れぬ亜空間で、今も寂しく二つそびえ立っていることでしょう」
「何じゃとおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお!?」
　止めた方がいい気がする。
　突拍子もないこととはいえ、一応辻褄は合っていると思うが、俺はこのトゥアールの嘘（うそ）を受け入れ、納得してはいけない気がするのだ。
「幻滅してしまったでしょう？　もう、私のことは忘れて……新しい恋を探してください」
「何の！」
　イースナは胸の前で拳（こぶし）を握り締め、並々ならぬ意志を漲（みなぎ）らせた。
「貴女（あなた）のおっぱいは必ず取り戻してみせるのじゃ！　何ならわらわの膨（ふく）らみかけのおっぱいをやる!!」
「私は膨らんでいないおっぱいが好きだと、あなたも知っているでしょう」
「ぬぬ……！」

俺はつい後方で倒れているブルーを振り返ってしまったのだが、それがいけなかった。

イースナも注意を向けてしまったのだ。

「ところで、後ろで倒れているあの女は何な故ぜ、トゥアールのお下がりを着ておるのじゃ。あまりに平らなので、アイロン台の上にテイルギアが載せてあるのかと思っておったが、よく見れば人間の胸ではないか」

「その辺にいた貧乳にテイルギアをくれてやることで、かつての自分の身体からだへの未練を断ち切ったのです。太陽とピンポン球ほどの差を胸に見れば、二度とセンチな気持ちになどならないでしょう」

「むうう、なんという気け高だかい決意じゃ……」

…………今、後ろで倒れてるその辺の貧乳さんが、怒った猫の毛のようにツインテールを逆立てたように感じたが、気絶……してるよな……？

「とにかく、もう私のことは諦めてください。そんなに可愛かわいくなったのなら、どの世界でも引く手数多あまたですよ」

「いいや」

ダークグラスパーは、どこからともなく携帯電話を取り出した。

形は普通のスマートフォンだが、擦すれ跡や色のくすみから、かなり長い年月使い込んだものであることが分かる。

「この携帯電話に登録されたたった一つのアドレス……貴女は世界を離れた時、それを捨ててしまったのじゃな。しかしわらわのアドレスは変わらず、あの時のままじゃ。トゥアールよ、どうかもう一度、わらわにアドレスを教えてくれぬか」

――――沈黙。

自分を捜しにいくつもの世界を超えてやってきた少女の願いを、

トゥアールは長い沈黙で受け入れ……

「――――――――――ワタシ、イマ　ケイタイ　モッテマセン」

　この重大な局面で、まさかの安易な逃げ口上。

　後ろ手に隠しているものが、ずしりと重たく感じる。

「そんな馬ば鹿かな!?　あれほどいつも携帯を持ち歩いておったのにか!?　幼い女の子たちにメールアドレスを配って、写メを送るようお願いしておったではないか……皆トゥアールに気に入られようと必死になり、エスカレートした挙げ句……」

「んんんんはああああああぁぁおあああああああんんっふ!!」

　喉のどが塞ふさがるぐらいの痰たんが絡からんだのかというほど、猛烈な勢いで咳せき払いをするトゥアール。

「違います、それはほら、怪物に襲われた子たちがトラウマにならないように、アフターケアをしていただけです！　お姉ちゃんはいつでも側そばにいるからね、と!!」

　トゥアールはまるでイースナではなく俺に言い訳するかのように、必死に弁明する。

「今は……ただ、戦うだけの日々……。誰だれかの心のケアなど、おこがましいことはできません……」

　そしてすぐにまた、演技モードに軌道修正した。

　何なんだこの緊迫した心理戦は。俺視点での話だが。

「遠慮はしないで欲しいのじゃ！　二四時間いかなる時にメールをもらおうと、三分以内に返信することを約束する!!　今度はわらわに、貴女あなたの心をケアさせてくれぬか!!」

　本気の目だった。たとえ熟睡していても起きるという凄すごみがあった。

　何となく、トゥアールがこの子との関わり合いを避けようとして

いる理由が、見えてきたぞ……。

「わたしの心は変わりません、イースナ。きっと今のあなたに、アルティメギルなどやめてください、と説得しても無駄なように……」

「うっ……くっ……！」

　目め端はしに涙をたたえながら、イースナはマントを翻ひるがえした。

「トゥアール……。そこまで固い決意ならば仕方ない。今日のところは引き上げる……だが、諦めぬぞ！　幾多の世界を超え、ようやく巡り逢ったのじゃ……決して、諦めはせぬ！」

　極彩色の膜が、イースナの後ろに出現した。

　俺たちがいつも出撃に使っているゲートと、よく似ている。

「……それと、これだけは覚えておいて欲しい。わらわは、人間に仇あだなす存在としてアルティメギルの軍門に降くだったわけではない。わらわは、わらわの守るもののため、戦いを選んだのじゃ！」

「……！」

　俺が一番聞きたかったことを語り出したが、もう遅かった。

「わらわのアドレスは、あれから一度も変更しておらぬからなっ!!」

　悲しい捨て台詞ぜりふを残し、イースナは光こう膜まくに包まれ消えていった。

「……ふぅ……」

　仮面ツインテールのマスクを外し、髪を軽く振って整え、トゥアールは空を見上げた。

　最後には恐怖さえ感じ始めていた俺も、ようやく緊張感から解放され、説明を求める。

「……トゥアール、お前が元いた世界の知り合いなのはわかったけ

ど、どうも普通に話してるだけで齟齬（そご）があるというか、めちゃくちゃ距離感を感じたというか……何だ？」

「今の総二（そうじ）様ならわかってくださるはずです。大勢のファンを持つことのリスクを……。多少お行儀の悪い程度のファンならともかく、彼女は別格でした。凶悪なストーカーだったんです」

　やっぱりそうだよな。

　しかも世界まで超えてくるんだから、最凶最悪のストーカーと言っても過言じゃないだろう。

「にしたって、リスク管理はできるだろ……。お前、ヒーローやってた時にファンにアドレス教えてたのかよ」

　俺も変身してる時は、戦闘後によく女の子にアドレス書いた紙握らされたりするけど、自分から教えたりはさすがにしないぞ。

「あの頃（ころ）イースナは小さくてとても幼な（かわい）かったので、つい贔屓（ひいき）をしてしまって……。でもご心配なく、今はもうストライクゾーンから外れました。何か……あの年頃の女の子って、ちょっと見ないうちにいきなり成長しやがりますね」

　いや、幼い女の子には無差別にアドレス配ってたって暴露してたじゃないか……。

「……イースナはひどい時には一時間で六〇通それぞれ文面の違う長文メールを送ってくる、人間メールサーバーと化してしまいました」

「エレメリアンより怖（こえ）えーよ」

「受信拒否にするのもカドが立つと思ったので、受信時メール振り分けで通販のダイレクトメールと同じフォルダにブチ込んでいましたが……」

　まがりなりにも知り合いからのメールを、受信拒否にもできず、迷惑メール扱いにもできず、罪悪感を抱かずに済むギリギリのライ

ンを選択したのが伺える対処法だ。
「とにかくあの調子なら、しばらくは来ないでしょう。その間に、ゆっくり対策を立てるとしましょう。総二様にだけ、詳しくお教えします。愛あい香かさんには内緒で、後で私の部屋に来てください。すぐに鍵かぎを閉めますが、機密保持のためですからお気になさらず」
　トゥアールの肩が、後ろからわっしと掴つかまれた。
「…………困ったファンもいたもんねえ、悪いトコばっか真ま似ねして……」
「ひいいいいいいいいいいいいいいアイロン台が喋しゃべった!!」
　いつの間にか起き上がり、トゥアールの真後ろに立っていた愛香の投げ技で、トゥアールがカーリングのように地面を滑っていく。
　戦闘でズタズタになったアスファルトの摩擦抵抗とは思えない、滑らかなランディングだ。どこまでもどこまでも滑っていく。
　悲しいかな、カーリングは飛距離を競うスポーツではない。トゥアールは失格だろう。勝負に勝って、試合に負けたのだ。

　愛あい香かは腰に手を当て、むすっとしながら言った。
「……あたしたち全員に、ちゃんと話してもらうわよ。あの女の子のこと」

◇

　地下秘密基地に帰投した俺たちは、すぐにコンソールルームに集合した。
　コスプレ状態の母さんがお疲れ様、と出迎え、俺も最初は普通にああ、と答えてしまった。

　──ちょっと待て、とすぐに違和感に気づいて振り向いた時には後の祭り。
「まあ、素敵なお召し物ですわ未み春はるさん！」
「でっしょー？」
　会長がすでに目撃してしまっており、俺は両目と鼻と口から怪光線を出す勢いで絶句した。
　最後の砦とりでだった会長に……悪の女幹部コスプレの母親を……見られた……。
　言っときゃよかった……会長がいるときはその格好やめてくれって……。
　くしゃみでもしたら魂と肉体との繋つながりが切れそうな程限りなく幽体離脱しかけながら、俺は席に着いた。

「あらためて、よろしくお願いしますわ」
　会長は照れくさそうにはにかんで、皆の前で深々とお辞儀をした。
　今日、八はち面めん六ろっ臂ぴの活躍を遂げた会長のツインテールも、今は戦いの重責から解放され、美しくそよいでいる。
「いや～慧え理り那なちゃんすごかったわねえ。おばさんの言った通り、銃で正解だったでしょ？」
「ええ、感謝しますわ！　必殺技も思い描いていた通りのものが完成しましたし！」
　慧理那に後方支援の火力型を勧めたのは、そう言えば母さんだった。
　前線にガンガン突っ込む上、せっかくの武装をどんどん脱いでいく後方支援者だが。
「……あと、愛香ちゃんは……別の意味ですごかったわね……」

　母さんすら軽く引かせるほど、暴走した愛香はすさまじかったようだ。

　愛香は拳こぶしをさすりながら答えた。

「うーん、よく憶おぼえてないんですよ。いつつ、手がすっごい痛い」

　そりゃあなあ。

　俺たちが剣やら銃やら使ってようやく倒した敵を、素手で血祭りに上げておいて……それでもケロっとしてたら、怖すぎるだろ。

「でも大丈夫？　慧え理り那なちゃん、ちょーっと露出度高くなっちゃってたけど」

「恥ずかしくないと言えば、嘘うそになりますわ。きっと、これからもはしたないところを何度もお見せしてしまうかも知れませんが……」

　会長は、ちらりと俺の方に視線を送ってきた。

「気にすることないよ。すっごいかっこよかったぜ、会長」

「は、はい、ありがとうございます、観み束つか君！」

　特に、ツインテールが地面に刺さったのは心底しびれたぜ。

　トゥアールも、愛あい香かの方を向いてわざとらしくフフンと鼻を鳴らしながら言った。

「そうですよ慧理那さん、ちょっとした脱ぎ癖を差し引いても、慧理那さんの戦闘スタイルはヒーローのそれです。どこかの、毛皮と棍こん棒ぼうが似合いそうな原始人と違って」

「そーじ、この部屋寒くない？　あ、毛皮があったわ。羽はー織おろっと」

「毛皮じゃなくて私の皮ですあだあああああああああああ!!」

　人骨という名の展示人形マネキンにかけられた毛皮を、強引に剥はぎ取って羽織ろうとする愛香。

　まさに、ビーストハンティング……原始の日常だ。
　会長も、二人のやりとりにすっかり慣れたようで、微笑ほほえましそうに見守っている。
　いいのかなあ……これで。
「でもね会長、そーじは女に変身するっていっても一応男なんだから、あんまり脱ぐとこ見せない方がいいわよ？」
　愛香が意地悪く注意してくる。優先順位としては、今繰り広げられているトゥアールへの凶行こそ、視聴制限レイティングをかけるべきだと思うが……別に俺だって、見ないようにはするさ。
　しかし、返ってきた会長の答えは、意外なものだった。
「わたくしは構いませんわ」
「…………………………え？」
　愛香が掴つかんでいたトゥアールを思わず床に落とす。
「観束君は、わたくしの全てを見て、その上で仲間として励ましてくださったんですもの。観束君になら……見られても恥ずかしくないですわ」
　会長は頬ほおを赤らめながら、俺を見つめてくる。
　う……何だろう。
　仲間として信頼されているんだろうけど、妙に気恥ずかしいぞ……。
「ふぉっふうー！　これは……これはアレだわー！　やっぱりもう失敗続きの幹部と取り替えっこじゃないかしらー!!」
「お待ち下さい未み春はる将軍！　私にはまだ策があります！　どうかお待ちをー!!」
　やたらくねくねしながら踊り出した母さんに、トゥアールが縋すがり付く。
　何をやってるんだ、あの二人は……。

　再び会長と目が合う。俺は妙に照れくさくなり、黙り込んでしまった。
「お客様ーテーブル拭ふき終わるまで少々お待ち下さいー」
　差し向かいで座る俺と会長の間を、愛あい香かがテーブルの上に膝ひざ立ちで上って拭き掃除し始めた。
　母さんに何か直談判していたトゥアールが捕まり、布ふ巾きんにされてしまっている。
　客がテーブルに着いてから拭き始めるのは駄目だぞ、と、喫茶店のオーナーの息子むすことしてのツッコミが先に浮かんでしまうほど、二人のやりとりが日常と化してしまっているようだ。
「さートゥアール！　さっきの女のこと話してもらうわよー!!　洗いざらいねっ!!」
「……そうだな。俺もわからないことだらけだし……言いたくないこと以外は、全部教えてくれないか？」
　トゥアールは思いきり机を叩たたき、特に愛香に言い含めるように念を押した。
「話す前に断っておきますが、私は清い身です！　あの子とはなーんにもありません!!」
　何な故ぜか対抗するように愛香も机を叩き、反論する。
「女のこと説明すんのに、何でそんな前口上が必要なのよ！」
　がばっと立ち上がると、その豊かな自分の胸に不自然なほど手を沈ませ、トゥアールは言った。
「愛香さんなら、今さらどんなスキャンダルがあろうと痛くも痒かゆくもないでしょう！　チンパンジーがゴリラになるぐらいの扱いです！　ああ、握力がちょっと倍になるぐらいですね、よかったね、で済みますが、私はそうはいきません！　清純派ヒロインにとって、ほんの些さ細さいな疑惑、誤解さえも命取りなんです！　ここは

はっきりさせておかないといけません!!」
「今さらあんたにどんな誤解しろってのよ不純派女の極みがッッ!!」
「ゴリリャ――――――――――――ッ!!」
　一説には五〇〇キロとも言われるゴリラの握力目指し、今日も愛香の両拳こぶしが唸うなる。
　ドン引きしてるだろうな、と思って慧え理り那なを見ると、軽く指を咥くわえて樹上生物の蛮ばん行こうをじっと見ていた。そして物欲しそうに、ちらっ、と俺に流し目をしてくる。
　……………………………………んん？
　命の危険を感じたのか、愛香から一番遠い席に移り、トゥアールは咳せき払いをした。
「そうですね、何から話せばいいでしょう……。正直、私も混乱しているので……」
　虚無の思考時間シークタイム＝ゼロを誇るトゥアールが、沈黙を細かく挟み、それでもまだ言い淀よどむ。
　慎重に言葉を選んでいるのがわかる。
「彼女の名前はイースナ……私が元いた世界の幼女じゅうにんでした」
　トゥアールが心に浮かべた言葉と、台詞せりふとして発したルビが一致していない。毎度、俺だけがそれを感じ取れてしまうのは、彼女のツインテール属性を受け継いだからなのだろうか。
「一度、エレメリアンに狙ねらわれているところを助けたことがあって、その時知り合ったんですが……」
　会長は不思議そうにトゥアールを見つめた。
「？　ええと、その話ですと、トゥアールさんもツインテイルズなんですの？」
　会長の視線の先……トゥアールの右腕に、ブレスはない。

　トゥアールは苦笑交じりに返答した。
「私、別の世界でテイルギアを装着して戦っていたんです。今は引退して、この世界の総そう二じ様たちに力を託しましたが……」
「何な故ぜ、引退を？」
　質問を重ねる会長。……無邪気さ故ゆえの質問だろうが、あまり続けば、トゥアールを傷付けてしまう。いい機会だ、会長にも話しておくべきだろう。
「……トゥアール。今の会長なら大丈夫だ。全て話そう」
「わかりました。でも……話し終えるまで、握っていてくれませんか」
　不安なのだろう。トゥアールは俺にそっと、手……ではなく胸を突き出してきた。
「そのくらいおやすい御用よ」
「ひいっ⁉」
　樹上生物が同じ部屋にいるのに握ってくれとは迂う闊かつな発言だった。おやすく御用になりそうな力でトゥアールの胸を握り締め、愛あい香かが代わりにトゥアールの世界の顛てん末まつを会長に説明した。
　悲鳴がＢＧＭとＳＥとして場を彩っているせいか、必要以上に哀切極まる語りになってしまった。
　全てを聞き終えると、ツインテールを揺らし、深く頷うなずく会長。
「つまり、トゥアールさんは次世代に意志を託してくれた、前世代のヒーローだったんですわね！　引き継ぎイベント、しかと承りましたわ‼」
　ちょっとずれてる気がするけど、俺たちがトゥアールの意志を引き継いだのは確かだし、世界を守れなかったという結果をちゃんと

受け止めてくれたのなら、いいか。
　ちゃんと分かった上で、あえてトゥアールを気遣ってくれているのかもしれないしな。
「……慧理那さん……私の魂を受け継いで下さったのなら、無力な私に代わって戦っていただけませんか……超絶貧乳だから胸がどれだけ痛いか分かってないんですこのゴリラ……」

　トゥアールの世界の顛末を踏まえた上で、イースナについての説明が再開された。
「総二様のテイルギアには、私のツインテール属性が組み込まれています。イースナは私のツインテール属性の反応を頼りに、この世界にやって来たのでしょう。……アルティメギルと共に。そのせいで、テイルレッドを私と勘違いしているようです」
「……つまり、アルティメギルに取り入ったってこと？」
　愛香が腕組みをしながら聞き返す。
　過去云々よりも、今の彼女の立場、それが重要なのだと言わんばかりに、顔に険を寄せて。
「確かなのは、あの子は捕まって洗脳されたり、騙されて利用されているわけではなく、自らの意志でアルティメギルに与している……ということです」
　……自分の、意志で……。
　俺たちは、一様に押し黙り、その意味するところを噛みしめた。
「どうして、敵がテイルギアを持っているわけ？」
「イースナは、妙な能力の眼鏡で私のテイルギアを解析したようです。完全には複製できなかったでしょうが……テイルギアの規格自体は私のオリジナルでも、もともと属性力の変換技

術はアルティメギルのものです。調整は容易だったでしょう。問題は……」

「人間が仲間として受け入れられている、ということですわね」

　会長の言葉に、俺も続ける。

「ああ。あいつらが、人間に敬意を払うことはあっても共存は絶対にできないってことは、俺も戦いの中で聞いている。強力な属性力エレメーラを持つ人間をそばに置いておく理由は、何だ？」

　ともすれば、戦闘力を買って登用されたのだとしても、洗脳したり騙しているわけではない相手を、奴やつらは信用できるのか？

「事実、あの子は俺や、気絶してる愛あい香かたちのツインテール属性を奪いもせずに退却した。アルティメギルの利になる行動を積極的に取っているとは、考えにくくないか」

　トゥアールのことを慮おもんぱかったのだとしても、何の手土産も持たずに退却するだろうか。

　そんな彼女が、首領直属というポジションに置かれている。不自然だ。

「何にせよ、トゥアールの元恋人なんでしょ？　トゥアールがテキトーに色気振りまけば、また戻ってくるんじゃない？」

「滅多なこと言わないでください！　私はまっさらの新品なのに、総そう二じ様が不安に思ったらどうするんです!!　イースナとは本当になにもありませんでした!!」

　いつも通り明るく振る舞っているトゥアールと愛香を見て、逆に俺は不安になった。

　これから先……人間と、命いのち懸がけの戦いをしなくちゃいけないかもしれない。

　相手が怪物だから、容赦無く命を奪う、というわけじゃない。

　けど、同じ人間を相手に戦うなんて、想像もしたくない。

　それは……俺たちが人間だから、当たり前じゃないのか。
　きっと、愛香たちも同じはずだ──。
　突然会長が、夢見る乙女のように手を組んで立ち上がった。
「燃えますわ‼」
「え？」
「同じ力を持った敵幹部の出現！　しかも、かつてトゥアールさんを慕っていた少女……避けられぬ運命の戦い！　燃えるシチュエーションですわー‼」
　悩むどころか、森でカブトムシを見つけた子供のように目を輝かせている。
「かっ……会長！　そんな気楽な問題じゃないよ、人間と戦わなくちゃいけないんだぞ⁉」
「？　どんなヒーローだって、中盤で人間同士で争うのは避けられないエピソードですわ！」
　あとで仲間になることを前提に軽く小競り合いする、そんな子供向け特撮番組の展開と一緒くたにされても……。
　俺は、助けを求めるように愛(あい)香(か)を見た。
　しかし、待ち受けていたのは如(い)何(か)なる迷いとも無縁の、普段通りの顔だった。
「まあ、エレメリアンと違って爆散させるわけにもいかないけどさ、別に何てことないじゃん。トゥアールにするよりちょっと強めにブン殴ればいいんでしょ？」
　わーい頼もしいー。
　愛香は誰(だれ)彼構わず見境なく暴力を振るうようなことはしない。家族や友達思いだ。
　しかし、敵対する者に対して、恐ろしい勢いで牙(きば)を剥(む)くのは周知の通りだ。

本当に迷わずブン殴るだろう。

………………あれ、愛香の生態って、限りなく野生の獣のそれじゃないのか？

「ありがとうございます、愛香さん、慧ぇ理り那なさん……。きっとイースナも、心のどこかで自分を倒して欲しいと願っているはずです。手加減せず、余計なことを口走る前に全力ではっ倒して足腰立たなくしてやって下さい。そうそう愛香さん、あの子おっぱいあげると言ってましたから、戦利品としておっぱいゲットすればいいと思います」

「嫌いやよ、何で敵の施ほどこしなんか受けないといけないのよ」

「私のおっぱいは千ち切ぎろうとしてたのに⁉　何ですか、その胸と同じで薄っぺらいプライド⁉」

敵は駄目でトゥアールがいいというのは、好意的に考えれば信頼しているからだろうか。千切られる当人はたまったものじゃないだろうが。

「あとさ、今日回収したやつ。リヴァイアギルディの巨乳属性ラージバストとクラーケギルディの貧乳属性スモールバストも、捨てましょうよ。汚らわしい」

巨乳の化身を撲殺した狂戦士の言葉に、会長は即座に反論した。

「ええっ⁉　幹部の属性玉エレメーラオーブなら強力な力になるのでしょう⁉　もったいないですわっ」

「そうです、愛香さんなら貧乳属性スモールバストを地球で一番使いこなせるはずですよ‼」

「絶対嫌――――――ッ‼」

しかし、強敵が現れた以上、そうも言ってはいられないと思うが……。

さっきから大人しいと思って母さんの方を見ると、口くち許もとに手を当てて身を震ふるわせていた。

「敵の女幹部の出現……あれ、これってもしかして……」

「どうしたんだ、母さん？」

俺は、目を血走らせた母さんにガシっと肩を掴つかまれた。

「頑張るのよ、総そうちゃん！　父さんや母さんの果たせなかった夢を叶かなえてね！」

「はあ⁉」

「その子、トゥアールちゃんにぞっこんみたいだから難しいだろうけど、そこは総ちゃんの腕の見せ所よ‼」

い、一体何を言ってるんだ……⁉

はいはい、と軽くあしらおうにも、いやに母親チックな目で見つめてくる！

俺は一体、何を託されようとしているんだ……⁉

◇

隊長のドラグギルディに続き、増援の長おさリヴァイアギルディ、クラーケギルディまでもがツインテイルズの前に敗北した。

それから数日──無力感に苛さいなまれるこの部隊の戦士たちの中、一人精力的に会議中のホールを走るエレメリアンの姿があった。

文学属性ブックを持つ戦士、オウルギルディ。彼は、廊下で拾ったノートをコピーして製本し、同胞たちへと熱心に布教していた。

「いいから騙だまされたと思って読んでみよ！　心の中にエデンが広がろうぞ‼」

「オウルギルディ殿、申し訳ないが、私のエデンは耳たぶにこそあるのだ」

　受け取りを拒否したのは、巨大なワニのような風ふう貌ぼうの、一際屈強なエレメリアン──アリゲギルディだった。作戦会議とは名ばかりの恒例のテイルレッド鑑賞会で、進行役を務めている。耳たぶという、また図ずう体たいに似合わぬピンポイントな属性なのが恐ろしい。

「くっ……この神詩ポエムを読めば、ツインテイルズ打倒の英気を養えるというのに……!!」

　オウルギルディだけが、皆が失った戦意を取り戻しているものの、虚むなしく空回りしている。

「ひとまずテイルレッドの映像を見て英気を養おうではないか、オウルギルディ殿」

　アリゲギルディが、スクリーンをそのごつい指で指し示した。

　ツインテールを靡なびかせているテイルレッドが、大写しになる。

　ホールでだれていた面々の視線が一斉に向き、おおおおおお……、と野太い歓声が上がる。

「やはり美しい……」

「彼女のツインテールを形容するのに、美という言葉では陳腐すぎる!!」

「もはや守護者ガーディアンの枠には収まらぬ……女神ゴッデスであるな」

　屈強な戦士たちを、歯しし牙がにもかけず蹴け散ちらす姿。

　そして、ギャラリーの女性たちにもみくちゃにされ、半泣きになっている姿まで。

　プレゼン映像にも実に力が入っており、これがツインテールのオークション会場なら、会場にいる全員が次々と手を上げていたところだろう。

　特に作戦を考えるでもなく、二時間ほど延々とテイルレッドを鑑賞するだけの時間が過ぎていった。

「次にテイルブルーだが」
　アリゲギルディが、一同に確認を取る。
「早回しで構わぬな」
「異存はない」
　エレメリアン・ハンターとでもいうべき冷徹なキリングマシーン、ある意味でもっとも警戒すべきテイルブルーを、戦士たちは満場一致で十倍速再生にて遇した。
　静寂という明快な評価の中、ツインテールはいいのにな、という感想だけが漏もれ聞こえる。
「そして、クラーケギルディ様に勝利した新戦士・テイルイエロー。これがまた曲くせ者ものよ」
　雨あられと機銃光弾を発射するテイルイエローは、武装を脱衣パージしていく瞬間もきちんと撮影されていた。
「馬ば鹿かな、何な故ぜ脱ぐのだ!!」
「わからぬ。これほど神に祝福されたツインテールを持ちながら、この戦士は進んでそれを泥沼に捨てておる。そしてその行為に、忸じく怩じたる思いなど微み塵じんも感じぬが……」
　情緒なき色気に揺れる彼らではない。
　むしろ、不可解さに戦せん慄りつさえしている。
「おそらく、あえて自みずからに辱はずかしめを課すことで、潜在能力を底上げしているのだろう。覚悟深き、侮あなどれぬ新戦士よ」
「アルティメギルの五大修練に代表される苦行を、戦闘中に自ら賦ふしているというのか!?」
　堅物の戦士たちは、よもやドＭが戦闘中に好き好んで脱いでいるという超次元の真実には、一生到達できそうになかった。
「ブルーとイエローについては充分研究ができた。やはり、最強のツインテイルズであるテイルレッドに十二分に時間をかけねばなる

まい」

　そして、再びテイルレッド鑑賞会が始まる。

　幾多の世界を滅ぼした戦闘集団の作戦会議の光景としては、あまりにも不ふ憫びんだった。

　数時間に及ぶ上映が終わり、最後に会議参加者への配給品を配る時間となった。

「よし、これより人数分、テイルレッドのフィギュアを配る！　各自、戦いに備えよ!!」

　完全に、子供向け映画の入場者特典のようなことになっている。

　スケールにしてのフィギュアが一体どう戦いの予習に使えるのか、彼らにしかわからないミステリーではあったが、皆、とてもいい顔をしている。

　だが、残念なことにクオリティにバラつきがあるようだった。

「待たれい！　見よ、我われに配られしこのフィギュア！　ツインテールの毛先の塗装が不完全ではないか!!」

「我慢せよ！　俺のものなど、瞳の位置がずれておるぞ!!」

「ここだ！　鎧よろいの縁ふちに墨すみを入れて立体感を出さぬなど、手抜きもいい所よ!!」

「ええい、筆を貸すがよい！　自みずから塗装しなおしてくれるわ!!」

　屈強な男たちがちっちゃなフィギュアを手に乱闘騒ぎを始める。

　ホールにはオウルギルディ以外にも、その騒乱に交じらず、悲嘆にくれる者がいる。参謀役のスパロウギルディだ。

　戦意を失い、かなり末期の状態に部隊が陥ったことを嘆き、ただ隅で肩を落とすばかりだった。

　今までは、同じ幼女を見て熱狂するにしても、眼めの輝きが違った。必ずやあの幼女を、あのツインテールを手に入れる、という大いなる決意があった。

今はもはや、勝てぬとわかって体裁を繕つくろうためだけに作戦を練っている状態だ。
将来を有望される新星・スワンギルディの姿も……ホールにはない。
（……ここまで、かもしれんな……）
力無く、目を閉じるスパロウギルディ。

「一同、控えよ！」

この場の濁った空気を吹き飛ばすような、凜り々りしい女性の声が響く。
「ぬう、何なに奴やっ!?」
エレメリアンたちが一斉に振り返ると、ホール後方の入り口には見慣れぬ姿の戦士が仁王立ちしていた。
俯ふ瞰かんして比べるとその異質さが際立つ。
これまで総そう二じたちが戦ってきたのは須すべからく、属性力エレメーラが動物や神話の獣の姿を得て固着した存在━活性体シルエットとして具現化したエレメリアンだった。
だが、その戦士は違う。
色鮮やかな左右二対・計四枚の羽に、体表の細やかな模様。
顔面の半分を占める巨大な複眼と、鋭い棘とげのような口くち吻ばし。
蝶ちょう━彼は、昆虫の姿を持つエレメリアンだった。
「ま、まさか彼は……」
困惑する戦士たちの中、事態を察したのか、一人わなわなと震ふるえるスパロウギルディ。
その狼ろう狽ばいに気づいたアリゲギルディが、おそるおそる声をかける。

「し、知っておられるのですか、スパロウギルディ殿!?」
「――アルティメギル四頂軍の一つ、美の四心ビー・テイフル・ハート……！　あの方の直轄の部隊!!」
「あの方!?」
　蝶ちょうのエレメリアンの後ろには、同じくカマキリのように全身鋭利な棘とげと刃物で武装された戦士、蟻ありのように堅牢な外殻で覆われた巨漢の戦士が控えていた。
　その戦士たちが傅かしづき、ホールに迎え入れたのは―彼らの異質さえも他愛たわいなくなるほどの、決定的な懸隔であった。もはや、姿形モチーフなどの話ではない。
　―人間だ。
　黒いマントをなびかせながら、ダークグラスパーがゆっくりとホール内に進み入る。
「ツ、ツインテイルズ!?　しかも新たな戦士だと!?　この基地まで乗り込んできたというのか!?」
　何も知らぬ者たちがそう誤解するのも無理はない。
　グラスギアは、カラーリングが禍まが々まがしい黒であることを除けば、限りなくテイルギアに似通っているのだ。
「違う。わらわはダークグラスパー。首領様の御意志を伝える者じゃ」
「何!?」
　ざわめきが大きくなる。
「今よりわらわは首領補佐として、この部隊を指揮する！　これは首領様の意志じゃ！　反論は許さぬ!!」
　当然、歓声や拍手などで迎えられるはずもない。
「ダ、ダークグラスパー様だと……馬ば鹿かな！　信じられるか、こんな小娘が、誰だれもが畏おそれるアルティメギル最強の戦士であるな

ど!!」
「そうよ！　ツインテールが見事なのは認めよう！　だが、いくら不勝を重ねてきた我(われ)らとて、人間に手(た)綱(づな)を握られるほど落ちぶれてはおらぬ!!」
　ダークグラスパーは目ざとくスパロウギルディの姿を見つけると、旧知の友にするように、気軽に声をかけた。
「そこのツバメ。見た顔じゃな。貴様がこの隊の現在の指揮官か？」
「お久しゅうございます。私は、ドラグギルディ殿の参謀を務めておりました故(ゆえ)……ですが、よもやあなた様が御(おん)自(みずか)ら指揮を取られるとは……」
「理由は言わずとも知れたことよ。もっとも、歩(ふ)だけ並べて王を倒(と)れというのも、難儀な話じゃがの」
　少女の挑発的な言葉で、ホールは瞬く間に一触即発の雰囲気となる。
「……気に喰(く)わぬか。ならば、誰でもよい。今この場でわらわの属性力(エレメーラ)、奪ってみせよ」
　無防備に前進し、テイルレッドが一時停止のまま映されたスクリーンへと近付いていくダークグラスパー。
　護衛であるはずの昆虫型のエレメリアンたちは、依然として入り口に立ったまま、何の手出しもしようとしない。
「う、うう……」
「ぬうう」
　まるで隙(すき)だらけなその背中に、打ち込める者は誰(だれ)もいなかった。
　達人と、まだ門を叩(たた)いて間もない茶坊主に等しい実力の開き。
　圧倒的な力の差を感じ取ることができただけ、彼らはまだ見込み

があると言える。
「ふん、いよいよもって使えぬ持ち駒ごまじゃ。前に進むだけが取り柄の歩ふが、動くことさえ出来ぬとは」
　大写しのテイルレッドを背に振り返るダークグラスパー。
　しかし、彼らも意地がある。精神を総動員し、その圧力に抗あらがった。
「たとえ歩であろうと誇りがある！　盤面を埋め尽くせばやがて王にも届こう！」
「そうだ！　そもそも、名だけの知れた処刑人が突如指揮を執るなど、我われ々われが将棋の歩ならばチェスのクイーンが勝手に割り込んでくるようなものではないか‼」
　幼女のフィギュアを十字架ロザリオのように握り締めて、女神の名の下に決起する戦士たち。
「ほう」
　ダークグラスパーは初めて、侮ぶ蔑べつではない微笑を浮かべた。
「行き場のない敗兵どもと侮あなどっておったが、覇気は失っておらんようじゃな。金きんに成る気概があるというのなら、歩でも構わぬ」
　一同をぐるりと見回し笑うと、マントの裏から携帯電話を取り出すダークグラスパー。
「気に入ったぞ。どうれ、褒ほう美びにわらわのアドレスをくれてやる。各々、携帯電話を出すがよいのじゃ‼」
　皆、先程までの怒気はどこへやら、呆あっ気けに取られたように立ち尽くしている。
「どうした、わらわのアドレスを欲する荒武者はおらぬのか‼」
　無言。皆、無言だった。
「まさか、貴様らの携帯は、赤外線通信機能すらなき骨董品か⁉

それとも、よもや携帯電話を持ってすらおらぬとは言うまいな!?」
　全く見当違いの罵ば声せいを浴びせられても、誰一人として携帯電話を出そうとしなかった。
「古式ゆかしき奴やっらよ……ええい、パソコンぐらいは皆持っておろう！　エロゲーすら嗜たしなまぬ小僧っ子はよもやおるまいて!!　この際、パソコンのアドレスでも構わぬが!?」
　やはり無言。
　目に見えて機嫌が悪くなっていくダークグラスパーを前に、先程どれだけ凄すごまれても臆おくさなかった強こわ面もての戦士たちが、だらだらと汗を流し始めた。
　力とは違う、彼女の全身から立ち昇る異質な危険さを、ようやく理解し始めたのだ。
「……そこのワニ。本当は持っていよう？　出すのじゃ」
「ワニ!?」
　カツアゲのように指名されたのは、アリゲギルディだった。
「わ、私は戦い一筋の無骨者ゆえ、携帯電話などというものは持ち合わせておらず……」
　だが、不運とは重なるものである。突然の指名を待っていたかのように、アリゲギルディの腰元から着信ボイスが無情に響いた。
『おにーちゃん、メールがきたよ！　おにーちゃん、メールがきたよ！』
「ぬぐ、何といういたずらっこよ!!」
　焦りのあまり両手でバウンドさせながら携帯を取り出し、強こわ面もてを引きつらせて電源を切る。
　額ひたいの汗を拭ぬぐい、ふう、と一息。
　そして、ダークグラスパーと目が合う。
「……」

「…………」
　アリゲギルディは、ダークグラスパーの一撃で吹き飛ばされ、頭から壁に突っ込んだ。
「ふん、腰抜けどもめ!!　もうよい、とにかくこの部隊の指揮官はわらわじゃ！　反論があるならば、いつでもこの首取りに来るがよい！　アドレスをくれてやるわ!!」
　難解な捨て台詞ぜりふを残し、待っていた昆虫型のエレメリアンたちを引き連れると、ダークグラスパーはホールを後にした。
　お守りのようにテイルレッドのフィギュアを握り締めていたエレメリアンたちは、プレッシャーから解放され、次々に膝ひざをついていった。

◇

　肩を怒らせて歩いていたダークグラスパーは、基地の最奥まで来ると、眼鏡めがねのブリッジを指で押し上げた。
　瞬間、身にまとっていたグラスギアが粒子となって消え、厚ぼったいジャージを着た、地味な眼鏡少女の姿となる。
　イースナ──暗黒の鎧よろいから解放された、彼女の本来の姿だ。
　通路の突き当たりの壁に手を触れると、光のゲートが出現し、空間を隔へだてた自分の部屋へと足を踏み入れる。
　かつて、図らずも謀反を企てたフェンリルギルディが、ふんどしの波に呑のまれ果てていった場所。四方八方を大量のエロゲーに包まれた、闇やみの聖域だ。
「ど、どいつもこいつも……変態のくせに、プライドばっかり高くて……許せない……」
　屈強な怪物たちを前に微み塵じんも怯ひるむことなく荒肝を見せた指

揮官の顔はすっかりと消え失せ、喉のどに溜たまるような小声でぶつぶつと恨み言を呟つぶやいている。

　女め々めしく親指の爪つめを噛かみ、猫背で、目も一点を見ず忙せわしなく彷徨さまよっている。

　あっという間に、挙動不審のエキスパートへと様変わりしていた。

　荘厳な黒の玉ぎょく座ざに腰を下ろしても、威厳の欠片かけらもなく、場違いでしかない。

　その時──鉄を石に打ち付けたような硬質な音が、室内に響いた。それは続けざまにこだましながら、部屋全体に音叉のように反響していく。

　足音と呼ぶには自己主張に過ぎる怪音を響かせ、イースナの背後に人影が立った。薄うす闇やみに浮かぶその全身は、足音に輪をかけて異質を強調する。

　エレメリアンではない。もちろん、人間でもない。

　しかし、まずそのどちらかの可能性を考慮するほどには、そのシルエットは十分に人間のフォルムを描いていた。

　角張った屈強な体たい躯く。そこから伸びる豪腕。

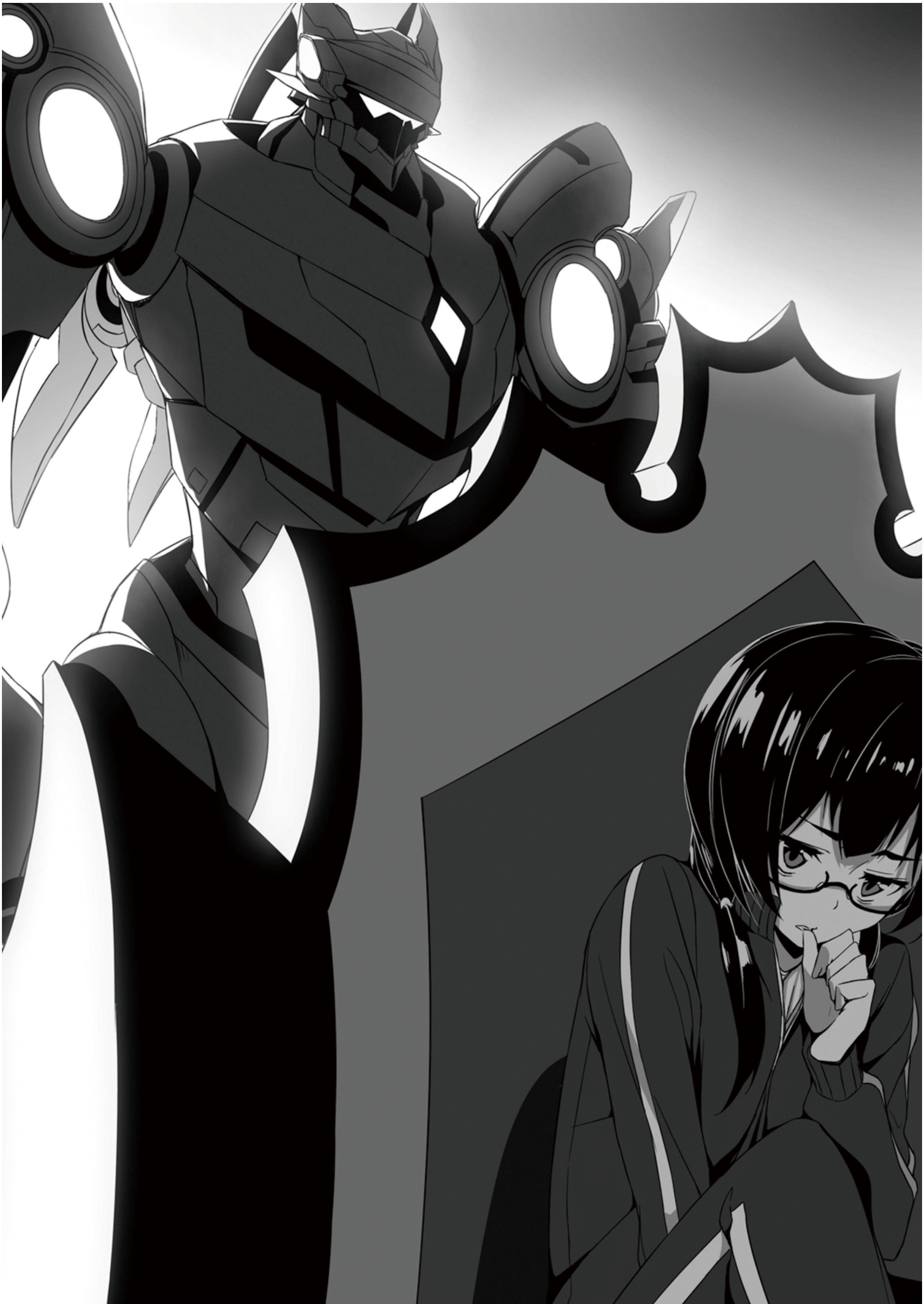
　生物の構造に反し、太ふと股ももより脹ふくら脛はぎの方が太い脚部。

　Ｖ字を描く頭部には、鋭角な眼鏡めがねのような双そう眸ぼうが不気味に光る。

　背には天界を追放された天使のように小さな片翼が広がり、代わりに天を舞う者の誇りとでもいうべき鋭いツインテールが、巨躯を厳かに御していた。

　これほど人間離れした外見をしていながら決定的にエレメリアンと違う点、それは、全身のほぼ全てが銀色の金属で覆われていることだった。

　鎧よろいではない。何から何まで、金属特有の無機質な輝きを宿しているのだ。



　ロボット──それ以外に、ふさわしい呼称はないだろう。

「ほんま、イースナちゃんは友達作るの下へ手たやなぁ……」

　屈強なエレメリアンたちと見まごう巨きょ躯くからは、予想に反して、キャラを作りすぎたアイドル声優のように甲高い声が聞こえてきた。それに輪をかけて異様なのは、キャラ作りのためにと頑張って使っているような関西弁だ。

「あ、あいつらがいけないんだもん……わ、私がアドレス教えてあげるって言ってるのに、小さな女の子のフィギュアなんか握り締めて……」

「イースナちゃんかて、この間まで小っちゃかったやないか……。ていうか、なんでうち、いつまでもこの部屋にこもったままなん？　あのチョウチョらみたいにみんなに紹介してくれへんの？」

　ロボットが動くたびに、ガッションガッションと細かく足音が響く。

「あ、あいつらが私を上官だって認めるまで、あなたの存在は明かせない……。我慢して」

「うちはすぐみんなと仲良ぉなるから大丈夫やで？」

　曇った目をぎょろつかせ、イースナはロボットを恨めしそうに見た。

「そ、それがヤなの……。あいつらは、生身の女に興味ない、もん。だから……人間じゃないあなたの方に、親近感がわくだけ。いやな奴やっら……」

　明るい声のロボットと、薄暗く鬱うっ屈くっとした声の人間。象徴的な対称に、一いち抹まっの哀情を覚える。

「そーやって、イースナちゃんから距離を取るからアカンねんで。

仲良ぉなりたかったら、自分から歩み寄らへんと。な？」
「私は、歩み寄ってる……。あいつらの方が……」
　堂々巡りだった。
「まーったく、イースナちゃんはホンマしょうがないなぁ」
　ロボットは右の腰をポン、と叩たたくと、腹部から引き出しのように箱がせり出してきた。
　全て四角柱で構成されているようなごつい指で、中から何かを取り出す。
「ネプネプシークレットアイテムその54！　ＱＲコードや!!」
　その甲高い声をフル活用し、高らかな宣言と共に取り出したものを掲げる。
「………………何、それ」
「イースナちゃんのメールアドレスをな、ＱＲコードにしてプリントしたシールや。ただアドレス渡しても、エレメリアンのみんなみたいに女の子に免疫がない子らは、あげるゆーてもがっついてアドレス登録なんかできひんて。せやから、ちょいと一手間かけてこういう形で渡せば、身構えへんで済むからなー、さらっと登録してくれると思うで」
　大小様々な大きさのシールを、イースナに手渡すロボット。
　免疫がないから受け取らないわけではないのだが、それを指摘できる者はいない。
「さ、さすがメガ・ネ、頼りになる……モテ女」
「その略し方やめてっていつも言うてるやろ……。メガ・ネプチューン＝Ｍｋ．IIってかっこええ正式名称なまえがあるんやから」
「……長い……」
「イースナちゃんが名付けたんやろ!?　何で一号機なのにＭｋ．IIなんや、ってツッコミもせんと受け入れてんのやで!?」

　メガ・ネプチューンという名のそのロボットは、昂たかぶったことで一層部屋に音を響かせる。
「とにかく、あとはこれをみんなの好きな物と一緒にプレゼントすれば、効果も倍増や」
「みんなの……好きなもの……」
　ちらりと後ろを振り向くイースナ。
　暗くら闇やみに覆われた部屋の壁面には、無数のエロゲーの箱が埋まっている。
「わ、わかった……」
　答えを得て屈託なく笑う……のではなく、コミュニケーションが苦手な者特有の、卑ひ屈くつな笑いを浮かべる。
「ええ加減、変身せんでもちゃあんと笑顔になれるようにならんとな。この世界でも、みんなのアイドルになるんやろ？」
「い、いいの……。いつか、あの人の前で、本当の私が笑えればいいから……」
「…………」
　表情のないはずのメガ・ネプチューン。しかしその眼鏡めがねが、僅わずかに光を弱めたように見えた。
「い、一緒に頑張ろう、メガ・ネ……。私は、支配者グラスパー……。この世界の人間の心も、すべて、支配してみせるから……。私の、この眼鏡で……」
「……そやな」

　今。少女の眼鏡が、世界を揺るがそうとしていた。

　　◇

『トゥアールのおっぱい』

「ぎゃあああああああああああああああああああああああああ!!」
　枕元から聞こえるおぞましい声に全身を貫かれ、一瞬のまどろみさえなく跳ね起きる。
　……俺の声だ。
　トゥアールに盗撮……もとい盗とう録ろくされた、俺の声だ。いつの間にか着ボイスにされている。
　ただでさえ、自分の声なんて自分で聞いて気分のいいものじゃないってのに、不意を切り取られた気け怠だるい呟つぶやきは、冷や水よりももっと強烈な刺激を耳に浴びせかけた。
　トゥアルフォンの画面を見れば、まだ朝の五時ジャスト。
　その下に表示されている番号は、未登録の携帯番号だった。
「誰だれからだ……!?」
　トゥアルフォンには電話番号もメールアドレスも、全て変更なく元の携帯電話からデータを移行したはずだ。
『トゥアールのおっぱい　トゥアールのおっぱい　揉もみたい』
「わかった、わかったよ!!」
　ただでさえ、知らない番号からかかってくるのは緊張する。それがこんな朝早くともなれば、なおのことだ。しかし、これ以上この着ボイスを聞いていたら渦うず巻き管が直線になりそうなので、通話アイコンをタップした。
　……今一瞬、聞き逃のがしてはいけない改かい竄ざんを聞いた気がしたが、まだ寝ぼけているのだろうか。

『お、おはようございます観み束つか君……慧え理り那なですわ』

　躊躇ためらいがちな、しかしよく通る清涼感のある声が聞こえてきて、ほっと胸を撫なで下ろす。
「会長……おはよう」
『すみません、こんな朝早くに……まだ寝てましたでしょう？』
「いや、別に。気にしなくていいよ」
　幸か不幸か、必殺の威力を誇る着ボイスのおかげで、頭はすっかり覚かく醒せいしきっていた。
　そういえば会長、夜の九時には寝るんだっけ。それならこのぐらいに起きてても不思議はないか。
「でも会長、俺の番号知ってたっけ？」
『尊みことが、観束君の携帯番号を知っていると言うものですから……教えてもらいましたの』
「今何て？」
　俺が桜さくら川がわ先生のツインテールに見とれている隙すきに、まんまとやられたのか。いつだ。
　……心当たりが多すぎて、特定できない……。
「ま、まあそれはともかく……どうしたんだ？　急ぎの用でもあった？」
　言ってから、失言に気づいた。
　わざわざ念押ししたら、会長の性格なら気を遣ってしまうだろう。本当に急ぎでも、そうは言えないはずだ。
　俺が慌てて取り繕つくろおうとすると……
『ふ、二人きりで……お話がしたかったのですわっ』
「え？」
『津つ辺べさんや、トゥアールさんがいない時に……どうしても……ご相談したくて』

　尻すぼみな声でそうつぶやくと、会長は押し黙ってしまった。

　沈黙。

　気まずさとは違う、奇妙な焦燥感に駆られ、俺はとりあえず話題を振った。

「も、もしかして、ツインテールのこと？」

『ふぇ!?』

「いや、何か、ツインテールが不安そうにしてるから」

『で、電話越しでも、ツインテールのことがわかりますの……？』

「何となくね。こうして離れていても、ツインテールの感情は、少しわかるんだ」

　見えないからこそ、かも知れない。

　姿が見えないからこそ感じる、ツインテールの息吹いぶき。息遣い。

　視覚も嗅きゅう覚かくも頼れない環境で、聴覚だけが昇華され、ツインテールを感じ取ろうとする。

　俺はそれほど、会長のツインテールに魅了されたんだろう。

「だから会長が俺に相談なんて、ツインテールのことぐらいしかないかなって思ってさ」

『合っているようで、違いますわ……。それより！　か、会長って……！　わたくしのこと、また会長って呼んでいますわ！　戻ってますわ!!』

「あ、そういえば……」

『……津辺さんやトゥアールさんのことは名前で呼んでいるのに、わたくしだけ〝会長〟なんて……他人行儀ですわ』

　確かにそうだな。会長は特別扱いのない〝仲間〟を望んだからこそ、本心と向き合い、ツインテールの潜在能力を引き出せたんだ。

　今さら、俺が恥ずかしがっていたら、会長のツインテールに申し

訳が立たない。
「じゃ、じゃあ──」
　俺は意を決して、再び会長を呼び捨てで呼んだ。
「え、慧え理り那な」
『……はい。観み束つか君』
　深呼吸をするように言葉を噛かみしめた後、感慨深く慧理那は返してきた。
　でもそれじゃあ、不公平ってもんだ。
「それなら、俺のことも総そう二じって呼んでよ」
『ええ、ご主人様って呼びますわ…………え？』
「え？」
　今、会話が噛み合わなかったような……。
『え、ええ、ええ！　そうですわそうですわ、そうですわそうじですわ!!』
　ラップのように韻いんを踏んで呼ぶ必要があるかはわからないが、とりあえず、慧え理り那なにも名前で呼んでもらえた。
『す、すごく嬉うれしいですわ。何でしょう、胸があったかくて──』
　慧理那の言葉に、俺も温かな気持ちになった。
『それで……相談なのですけれど。わたくしのお母様が、昨日……』

「ずおりゃ──────────ッ!!」

　俺の部屋の壁を突き破って、折り重なった二人の少女が転がりながら強行突入してきた。
　舞い上がった粉ふん塵じんを頭にかぶりながら、直しても直しても部

屋が破壊される喪失感で胸の温かさが上書きされてしまった。

　いっそもう原っぱにでも住めばいいのか、この虚むなしさから解放されるには。

「離してください愛あい香かさん！　この部屋から他の女の匂いがするんです！　危険です、争っている場合じゃありません！」

「他の女の匂いなら、目の前でプンプンしてるわよ!!」

　俺は咄とっ嗟さに、トゥアルフォンを背中に隠した。

　数々のオーバーテクノロジーが搭載されたハイテク端末だが、遠く離れた通話相手の匂いまで電波に乗せて運ばれては、便利を通り越してもはや恐怖しか感じない。

　つい一分前の自分の言動を鑑かんがみればものすごいブーメランな気もするが、とりあえず俺は恐れ戦おののいた。

「危険なのはあんたでしょーが！　何よその格好！　所々透けて悪趣味な下着ね!!」

　トゥアールは布面積が少なく透過度が高い下着姿だった。寝る時どんな格好しようと俺が文句を言う筋合いじゃないだろうけど、部屋に来る時ぐらい、何か羽は織おって欲しい……。

「殿方の部屋にだってドレスコードはあります！　殿方の就寝中というパーティー会場にレディが参加するのなら、妖よう艶えんさと脱がしやすさを兼ね備えたアダルティな下着で赴おもむくのは最低限のマナー！　当然の嗜たしなみです!!」

「そんな異次元のドレスコードをそーじの部屋で適用してんじゃないわよ!!」

「いいえ、全次元共通です！　人が、生殖生物である限り!!」

　愛香とトゥアールはどんどんヒートアップしていく。

　二人折り重なり、お掃除ロボのように部屋を縦横無尽に転がっては跳ね返り、転がっては跳ね返りしている。

「ククク、いいんですか愛香さん!?　これ以上もみ合っていれば、総そう二じ様の前で下着が脱げてしまうのは必至！　それこそ、私の思惑通りというもの!!」
「なら、一撃で沈めてやるわ!!」
　愛あい香かはトゥアールを解放し飛び起きると、拳こぶしを腰に構えた。まさしく一撃必倒の構えだ。
　……今、朝五時です。
「距離を取りましたね……勝機!!」
　トゥアールは胸の谷間から小さなスプレーを取り出すと、素早く愛香に吹きかけた。
「ふん、催さい涙るいスプレー？　甘いわよ！」
　両腕を顔面の前ですかさず交差し、スプレーを防ぐ愛香。
　暴漢に護身用の催涙スプレーを吹きかけたら「甘いぜ」とか余裕で対処されることを思えば凄すさまじい恐怖だが、とにかくこのぐらいの反撃に反応できない愛香ではない。
　が、今回ばかりはトゥアールが一枚上うわ手てだった。
　ガードのために交差した愛香の腕を、見る見るうちに粘性の液体が覆っていく。
　スプレーの成分は空気に触れると、爆発的に体積を増すようだった。
「ぐっ……な、何よこれ!?」
　水みず飴あめのようなもので塗り固められた自分の両拳を見て、困惑する愛香。
　その隙すきにトゥアールは、愛香の両足にもさらに吹きかけ、追い打ちをかけた。
　そっちも同じように膨ふくらみ、愛香はバランスを崩してたたらを踏む。

あの弾力からして、スポンジのように柔らかい素材になるようだ。

「アンチアイカシステム３号！　アイカカタメールです!!　両拳と両足を封じられた以上、愛香さんに勝ち目はありません!!」

まるでゆるいマスコットキャラクターのように、両手両足をボール型にされてしまった愛香。

確かに、あんなバレーボール大のものが手だけでなく足まで覆っていたら、腰が入らず、拳も蹴けりも満足には繰り出せないだろう。

だが、愛香はその逆境にも屈さなかった。

「だったら……こうしてやるわよ!!」

足の弾力を利用して一足飛びでトゥアールに組み付くと、コアラのように両手両足を巻き付け、渾こん身しんの力を込める愛香。あの体勢で力を込められるってすごいな、と思ったところで、樹上生物だったことを思い出した。

「ホネ────────────ッ!!」

部屋に木こ霊だまする、声帯と骨の悲鳴の二重奏。

何な故ぜ、お日様が爽やかにおはようと告げる朝も早よから、人間の骨が軋きしむ音を聞かなければならないのか。

「これはひどい！　愛香さんに抱きしめられる屈辱と肉体的苦痛の二段構え!!」

「抱きしっ……!?」

途端、するりとトゥアールを解放する愛香。

「……めてないわよ、別に……」

「な、何一丁前に赤面してるんですか、こっちまで意識して恥ずかしくなってきたじゃないですか!!」

抱きしめたんじゃないんだからね、背骨を折ろうと思っただけな

んだからね（マジで）、という世にも嫌いやすぎるツンデレを発揮した愛あい香かだったが、珍しく二人で照れ合っていた。

「……はっ⁉」

　いつもの光景すぎて、すっかり順応していた。

　慧え理り那なと電話をしてる途中だったのを忘れていた！

　二人に聞こえないように布ふ団とんをかぶり、電話越しに謝る。

「ご、ごめん、騒がしくて……！」

『あの……トゥアールさんが地下の基地に住んでいるのは伺っていましたが……どうして津つ辺べさんが総そう二じの部屋にいるんですの？』

　幸いすぐ反応してくれたが、心なしか、声こわ音ねが冷たい。

　そりゃそうだよな、こんなに放置していたんだ、切らずに待っていてくれただけ優しいよ。

「愛香、家が隣なんだよ。幼おさな馴染なじみだから。それで、朝よく部屋に来るんだ」

『幼馴染……お家が、隣……』

　あれ、何か、声がどんどん冷たく……。

「え、ええっと、そういえば相談って……」

『早朝に失礼いたしましたわ。それでは、学校で。観束君』

　俺が何か言う前に、慧理那は電話を切ってしまった。

　呼び方も、他人行儀に戻ってしまっている。

　やはり、待たせすぎて怒らせてしまったようだ……。

「あとでちゃんと謝らないとな……」

　溜ため息いきをついてベッドから起き上がると、二人は背を向け合って俯うつむき、もじもじしていた。

何か、ものすごくレアな絵面だな。

◇

相談があってわざわざ電話してきてくれた慧理那に、悪いことをしてしまった。
罪悪感で落ち込み、結局あの後二度寝もできず悶々としていた。
登校時間も迫り、重い足取りで自室から一階へと階段を降りる。
「何だ、二人とももう準備できてたのか」
リビングが静かなので、愛香とトゥアールが揃っているとは思わなかった。
「総そうちゃん総ちゃん見て、すごいことになってるわよ」
二人の隣に座っている母さんが手招きしてくる。
「ん～……？」
どうせまたニュースでテイルレッドを弄いじり倒してるんだろう、と思って見てみると、ワイドショー画面にでかでかとテロップが踊っていた。

〝ツインテイルズをハリウッドが映画化〟

「な、何ィ!?」
思わず二度見してしまう、現実離れしたトピック。
俺はテレビに掴つかみかかる勢いで詰め寄った。
「母さん幸せだわ～、まさかこんなにも早く総ちゃんがスクリーンデビューするなんて！」
いや、俺じゃないだろオファーなんて来てないし！
「ちょ、ちょっと待て、テイルレッド役は!?　キャスティングはも

う決定済みなのかっ⁉」
　ＣＧでたいがいのことは出来てしまう時代だが、フルＣＧ作品でもない限り、アクション映画では生身の人間が身体からだを張るものだ。
　だが、テイルレッドは見た目小学校低学年。あれほどアクションのできる子役がいるはずがない。
　もしや、テイルレッドだけＣＧで間に合わせられる……ってことはないよな。
　テレビ画面に注視すると、まさに今、キャスティングの発表が行われているところだった。

　フラッシュを浴びせられながら壇上に現れたのは、過去幾度となくアカデミー賞作品に出演した、世界的大女優だった。
　テロップに、〝テイルレッド役〟と書かれている。
「…………妙齢のオスカー女優がツインテールにしてる……」
　愛あい香かが、何とも言えない複雑な表情でその女優を見つめていた。

『確かに私はテイルレッドより背が大きいし、年も上ね。その差が気になる人が多いだろうって、わかっているわ。でも、そんな見た目をカバーするのが、私の仕事よ。カメラを向けられた瞬間、私はテイルレッドなの』

　誰だれもが思っているであろう疑問の答えが、声優さんの吹き替えで代弁される。
「この翻訳で本当に合ってんだろうな……めちゃめちゃ苦虫嚙かみ潰つぶしたような表情でインタビュー受けてるけど……」

何か国語かを余裕でマスターしているであろうトゥアールに視線をやると、やるせないほどに目も口も直線になっていた。

やっぱり違うのか……。

「あんた、年齢でツインテールを区別しないんじゃなかったの？」

ツインテールを前に俺のテンションが低いせいか、愛あい香かが脇わき腹ばらを肘ひじで突っついてきた。

「だってあの女優さん、明らかに仕事で嫌いや々いやツインテールにしてんだぞ。見てるこっちも微妙な気持ちになるさ」

慧え理り那なと真逆だ。嫌悪感がツインテールに如実に顕あらわれている。

いくら俺でも、望まずに生まれ落ちたツインテールを見ても喜べない。

「でも、制作が決まっただけでこんな風に全世界に発信するんですもの、世間の期待も大きいってことでしょ！」

母さんは息子むすこが銀幕デビューするとはしゃいでいるが、監修していないどころか盗み撮りレベルの情報しか世間に提供されていない状況で自分の映画が作られる立場としては、不安しかない。

「期待もあるだろうけど、牽けん制せいの意味もあるんじゃないですか？　ほら、映画って旬のネタがよくかぶるじゃないですか。先に発表したもの勝ちですよ」

トゥアールの予想に納得する。

けど、ツインテイルズのことを映画化するなら、イエローはともかく、ほぼ同時期に現れたブルーも描かれるはずだが……やはり、キャリアのある女優さんが演じるんだろうか。

そう思ってしばらく見ていると、インタビュアーは女優の横にいる筋骨隆々で角刈りの俳優にマイクを向けた。

この人も、俺でさえ知っている、世界的知名度のベテランアク

ション俳優だ。
　四角いテロップが現れ、役を紹介する。
「…………………………………テイル……ブルー役……」
　一瞬テロップの不備を疑ったが、直後、再びの吹き替えコメントは残酷な真実を突きつけた。

『僕は、監督からのラブコールでこの役を受けたんだけど、自分でも是(ぜ)非(ひ)やりたいと思っていたよ。確かに、僕はテイルブルーに比べたらちょっと筋肉がモリモリだけど、あとはさほど差がないと思っているからね』

　ニカッと笑って白い歯を覗(のぞ)かせ、報道陣に力こぶを見せつけるアクション俳優さん。
　やべえ、こっちはノリノリだ。
　スタジオに映像が戻って、女子アナが「テイルブルーには、カツラではなく自分の髪を伸ばして役に入りきる、と力強いコメントを残しています！」と笑顔で読み上げ、締め括(くく)られた。
　マジで？　あの短髪角刈りから、腰まで髪伸ばすのか？
　役者のプロ根性ってすげえな。ちょっと見たいって思ってしまった……。
　世界に様々伝えられる役者の役作りの逸話に、また一つ、強烈なエピソードが加えられることだろう。
　ぼちぼち衣替えの時期だというのに、肌が粟(あわ)立(だ)つような寒気を感じ振り返ると、愛(あい)香(か)が雪女のような冷たい微笑(ほほえ)みをたたえてテレビを凝視していた。
「…………………………そーじ。あの映画、そのうちお蔵入りになったって報道されるかも知れないけど、気にしないでね」

俺は、青い爆撃機によって世界的に有名な「山の上のＨＯＬＬＹＷＯＯＤサイン」が吹き飛ばされないことを、そっと心の中で祈った。
　幸い、公おおやけに姿を現していない仮面ツインテール……トゥアールは当然ながらキャスティングの憂うき目を逃のがれている。
　そのせいか、トゥアールはテンション高く愛香の背中をバシバシ叩たたいていた。対岸の火事だ。
「何でですか、完成するまで待ちましょうよ！　スクリーンの中で荒ぶるテイルブルーを見たら、みんなお腹がよじれるくらい笑えて世界が平和になりますよ!!」
「何だ、そんなの映画の完成を待つまでもないわよ？」
「ひい、やめ、腸がでぎゃああああああああああああああああああああああ!!」
　人力でお腹をよじられるというスペクタクルを横目に、俺はちょうど焼き上がったトーストを手に取り、一口かじった。
　そして、確信する。
　制作費を何百億ドルかけたところで、一流の俳優さんがどれだけ役作りに心血を注いだところで、愛香を再現するのは不可能だろう、と。

『続いては、デビュー間もないのにブレイクの予感！　新人アイドルの紹介です！』

　衝撃の制作発表の次は、新人アイドルを毎週一人紹介しているコーナーだった。登校時間とタイミングが合うので、毎週目にしている。
「おおっ！」

今日の子は一際目を引くツインテールだった。

決して野暮ったさを感じさせない、ハイソな黒くろ縁ぶち眼鏡めがね。下品でない程度に露出の多いフリフリの衣装に身を包み、おさげのように胸元に垂らしたツインテールが実に似合っている。

「よく磨き込まれた、いいツインテールだな。この子はブレイクする気がするぜ」

「何をまた、わけのわかんないこと言ってんのよ」

画面に釘くぎ付づけになっている俺を、うんざりしたように窘たしなめる愛香。

だが、嬉うれしさだけではない。心が警鐘を鳴らすような不安も同時に感じていた。

『眼鏡めがねがチャーミングですね～。でも、コンタクトにしたらもっと可愛かわいいいんじゃないですか？　私も今コンタクトなんですよ～』

『えっ、コンタクトなんですか？　死ねばいいのに♪』

女子アナの軽いフリに、強烈な毒舌。会場がどっと沸いている。

どこまで台本かはわからないが、確実なのは、あの子のツインテールが本気だということ。キャラ作りじゃない。そこに乗る感情も、ツインテールそのものも。全力のツインテールだ。

見ればわかる。テイルレッドの後追いか、話題作りに無理にツインテールにするアイドルが増える昨今、彼女はきちんと自分のツインテールを持っている珍しい正統派だ。

『それでは歌っていただきましょう、〝眼鏡プラネット〟です！』

『めがーねめがーね、太陽は眼鏡～♪、海王星も眼鏡～　なんかもう全部眼鏡～♫』

それなのに……何な故ぜだろう。

　彼女のツインテールから目が離せないことを、少し怖いと思ってしまう。
　後ろめたささえ、感じてしまうのは何故だろう……。

キャラクター名鑑 010

イースナ

ACENA



DATA

- 性別：女
- 年齢：12歳
- 誕生日：非公開
- 身長：150㎝
- 体重：43㎏
- B71・W53・H74

トゥアールと同郷の異世界人。幼女の頃、危ないところをトゥアールに助けられて以来、彼女の大ファンに。以降、ストーカー気質に開眼。彼女に相応しい女になろうともりもり成長したことで、逆にストライクゾーンから外れてしまった。類稀な眼鏡(グラス)属性の持ち主で、トゥアールへの執念が彼女の眼鏡を、全てを見通す神眼鏡(ゴッドめがね)へと進化させる。その力が、彼女を更なる暗黒に導いてしまった。

第二章　はじめてのおつかいですわ。

優しく燃える暖炉の前で、緩やかに揺れるロッキングチェアに座り、穏やかに編み物をしている者がいた。
　時の流れを感じさせない柔らかな光景は、見る者の心さえも温かくする。
　それが――エレメリアンであることを除けば。
「ようし……なかなかの出来だ」
　編み棒を置き、顔の前で出来上がったばかりのセーターを広げた。
　ツインテール模様を波状にして胸回りに編み込んである。
　素人が見ても高難易度を実感できるセーターを見つめる顔は……三つあった。
　地獄の番犬を思わせる、三つ首の怪物。
　鋭く、禍々(まがまが)しい風貌(ふうぼう)とは裏腹、邪気のない穏やかな表情だった。

「ケルベロスギルディよ」
　名前を呼ばれ、首の一つが後ろを振り向く。
　部屋の入り口に、グラスギアを見せつけるようにマントを翻(ひるがえ)したダークグラスパーが立っていた。
「……もう、会うことはないと申し上げたはずだが」
　これまで、その名を聞いた誰(だれ)もが畏(おそ)れたダークグラスパーを前にしても、ケルベロスギルディと呼ばれたそのエレメリアンは、座したまま態度を変えなかった。
　自(みずか)らの力に頼みを置いている……というよりは、世捨て人の

ように空疎な雰囲気を漂わせている。
「そうもゆかぬ……今回は大仕事じゃ。……早速、洗礼を受けたところでな。これまでと違い、ブレイクがひどく遅い」
「送られてきた映像は見せてもらった。これまでの焼き直しではないか。アイドルとは生なま物もの……成功例の模倣だけでは活いきぬ」
「さすがだな。すでに問題点を看破しておったか」
　慣れた手つきでセーターを畳み、サイドテーブルにそっと置くケルベロスギルディ。
「この世界のツインテールの戦士、一部隊の侵攻を完全に退けるほど、強力だそうだな」
「その通り。敵の立場ではあるが、わらわも敬意を表する最強の戦士じゃ」
「それほど強大な偶像を前に、同じツインテールで闇やみ雲くもに対抗しても、徒いたずらに時を浪費するだろう。短期決戦を挑むのなら、あえて別のアプローチを仕掛ける勇気が必要だ」
「ふむ。して貴様ならば、何を以もってツインテールに挑む？」
「……三つ編みだ」
　何の迷いもなく、ケルベロスギルディは断じた。
「アドバイスはした。もう帰ってもらおう」
「貴様の眼力、いささかも衰えておらぬではないか。なにゆえ腐らせようとするか？」
「首領様のお許しはいただいた。私はもう戦いに疲れたのだ」
　何処いずことも知れぬ異空間に、寂しく浮かぶ個人挺。
　部隊を運ぶ大型艦ではない、ここにはケルベロスギルディしかいない。
　その理由は、今ケルベロスギルディ自身が語った通りだった。
　エレメリアンが戦いを放棄する……それは即ち、属性力エレメーラを

奪うことを放棄し、生を放棄するということだ。

　補給自体はさほど頻(ひん)度(ど)が必要なわけではない。

　だが、緩やかに歩み寄る死を受け入れているのも、また事実だった。

「我(わ)が属性の未来のため、今まであなたと共に戦った。しかし、もはや我が属性は何(なん)人(ぴと)もその滅びを止めることはできない。皮肉にも、あなた自身がそれを証明してしまったではないか」

「言うたであろう。ここが正念場じゃ。最後にもう一度だけ、力を貸すのじゃ」

　説得から、命令へ。語調が強くなったことに当然気づいていながら、ケルベロスギルディの態度は依然として変わらない。

「くどい」

　それどころか、ケルベロスギルディもまた、静かに闘気をみなぎらせ始めた。

「矛(む)盾(じゅん)よな。戦いを捨てる自由のため、戦いも辞さぬか。少々荒療治になるが、致し方あるまい」

　グラスギアの背中から、尻尾(しっぽ)のように垂れ下がっているパーツを引き抜くダークグラスパー。

　刃(やいば)が鎖(くさり)のように連結した禍(まが)々(まが)しいその暗黒の鞭(むち)を振るい、床を打ち叩(たた)く。

「む？」

　だが、先に声を上げたのはダークグラスパーだった。

　ダークグラスパーの腕を、後ろから伸びてきた何者かの手が掴(つか)んだ。

　次の瞬間、ロッキングチェアから跳ね飛んだケルベロスギルディは、ダークグラスパーに噛(か)みかかる。その頭部は、何(な)故(ぜ)か三から二つになっていた。

「眼鏡めがねツッ!!」
　ほとばしる叫びと共に、ダークグラスパーの眼鏡から光線が放たれ、ケルベロスギルディの巨体を地に打ちつけた。
「ぐおっ……！」
「フッ……番犬風情が地ゃ獄みの支配者に噛かみつけると思うてか」
　鞭むちを放り捨て、三つ首の番犬を見下ろすその眼鏡めがね越しの瞳には、余裕さえ通り越した「当然」がみなぎっていた。
「力比べで劣っては、ならず者どもを束ねることなど出来ぬのじゃ」
「ぐうう……ひ、ひと思いにやれ……!!」
　観念したように大の字に倒れるケルベロスギルディにとどめを刺さず、ダークグラスパーは自分のツインテールをいじり始めた。
「もうよい。地に伏したまま見ておれ。三つ編みじゃったな……逆転の秘策は」
　ツインテールをおおざっぱに編み、三つ編みに仕立てていく。もともとおさげのように垂らしているので、応用は容易たやすい。
　しかしお世辞にも揃っているとはいえず、初めて人形を手にした幼児でさえ、もう少しは見栄えよく編めるのではないかというほど、編み目の乱雑なひどい三つ編みだった。
　ケルベロスギルディはそれを見るや、起き上がりこぼしのように矢庭に立ち上がった。
「んもうっ！　見てられないわっ!!」
　口調も態度も突如として豹ひょう変へんし、くねくねと妖あやしく全身をうねらせてダークグラスパーににじり寄る。
「雑だわ！　手抜きだわ！　ド素人だわっ！　素材はいいのにどーしていつまで経っても自分じゃからっきしなのかしらこのコは!!」
　軽く埃ほこりを払うように無造作な動きであっという間に雑な編み

をほどくと、手が何本にも分身して見えるほどの高速でダークグラスパーのツインテールを編み込んでいった。

　壁のような巨きょ躯くがくねくねと動く様は、数十秒見つめているだけで眼めを回しそうな魔性を秘めていた。

「お手入れもなってないじゃない！　また引きこもってばっかなのね！　キューティクルが壊れちゃってるわ！　スプレー、んシュッシュッ!!」

　トリートメントスプレーをまぶしつつケアも織り交ぜ。

　あっという間に、完かん璧ぺきな三つ編みができあがる。

「――――はっ……」

　我われに返ったように後ずさり、わなわなと震ふるえて自分の手を見つめるケルベロスギルディ。

「腕は落ちておらぬな。女のように繊せん細さいな手て捌さばき、男の振るう大胆さ。それらを兼ね備えた貴様の技、まこと見事である」

　編まれた黒髪を手でもてあそびながら、ダークグラスパーは賞賛の言葉を贈った。

「――これが最後だ……。ただし、私のことは、部隊の皆には黙っておいてもらおう。この呪のろわれた本性が知れたら、士気に関わるだろうからな」

「これで七回目の『最後』じゃが……あるいは本当にそうなるやもしれぬ。存分にプロデュースの手腕を振るってもらうぞ！　アルティメギルー の演出家、ケルベロスギルディよ!!」

「ならばすぐにでも始めるぞ。今、素敵な三つ編みインスピレーションがおりてきたからな」

　ケルベロスギルディの言葉に、ダークグラスパーは素直に頷うなずいた。信頼関係が伺える。

「よし。わらわも全眼鏡めがね全霊を以もって、この世界を掌握する。

貴様の言う通り、すでにツインテールが充分に根付きつつある世界じゃ。別の属性力拡散アプローチなくして、本丸は奪えぬからな」
　作戦の抜本的な改革を立案し、ダークグラスパーは不敵な笑みを浮かべた。
「その間、ツインテイルズの実力を計る役目は、奴やつに任せるとしよう」

　　　◇

　久しぶりにアルティメギルが海外に現れた。
　視界一面に蒼あおい海が広がる、常夏の楽園。
　水着美女たちが、サンセットビーチに似合わない無数の戦闘員アルティロイドに追いかけられ、笑い声のような悲鳴を上げていた。ちょっとしたアトラクション感覚だな。
　俺たちは放課後、三人揃って出撃したのだが、とにかく慧え理り那ながうずうずしている。
　電話の件も怒っていないようだし、とりあえず俺は安心したのだが……。
「あ～、あなたたちが噂うわさのツインテイルズですかぁ……」
「何だ、あいつは⁉」
　砂浜に踵かかとをつけず僅わずかに浮かんでいる一体のエレメリアンに違和感を感じたのは、俺だけではないだろう。
　あいつ……多分、蝶ちょうだ。昆虫のエレメリアン……⁉
　これまで俺たちが戦ったのは、伝説上の生物を含めても動物型のエレメリアンばかりだった。昆虫型は明らかに一線を画している。
　イースナが来て間もなく、これだ。偶然……じゃないだろうな。

「あ、どーもこれ……私、パピヨンギルディと申します……。ダークグラスパー様直轄部隊にして、アルティメギル四頂軍の一角、美の四心ビー・テイフル・ハートの先せん鋒ぽうでして、ええ、あと唇属性リップのために戦っております～、ハイ」
　しかも、何か腰の低いサラリーマンのような印象だ。やはり今までの奴らとは違う。
　その腰の低さと反比例して大層な肩書きを矢継ぎ早に告げられ、俺は頭を抱えた。
「アルティメギル四頂軍の一角……美の四心ビー・テイフル・ハートの先鋒、パピヨンギルディ！　いよいよ敵も、強力な増援を仕掛けてきたのですわね……!!」
　情報量に苦く悶もんしていた俺と違い、慧理那の記憶力は凄すさまじい。テイルギアの各部名称も一回で丸暗記してたからな。
「今までの奴やっらとは違うみたいだ。気を引き締めろよ、みんな！」
　俺たち三人は、武装を出現させ、構えた。
「あのですね～、テイルレッドさん」
　パピヨンギルディは、差し針のように尖とがった口を撫なでながら、俺を見つめてきた。
「……何だよ」

「あなたのですね、はは、唇くちびるが欲しいのですが～」

　言い終わるが早いか、パピヨンギルディの顔面に、ブルーの拳こぶしがめり込んだ。
　砂浜の足場の悪さをものともしない、瞬く間の高速拳けん。今日も絶好調のようだが、何な故ぜかブルーは顔を真っ赤にしている。

　しかし、パピヨンギルディは吹っ飛ぶどころか身動ぎもせず、ブルーの手を軽く払った。
「いや～これ手厳しい……」
「ブルーの殺人パンチが効いてない……!?」
　驚きょう愕がくする俺を余よ所そに、パピヨンギルディはダンスに誘うように軽やかな一礼を見せた。
「っざけんじゃないわよ！　誰だれがあんたなんかに渡すもんですか！　……どーりで外国に現れたわけだわ、日本と違って挨あい拶さつ代わりだものね!!」
　敵の強さに焦ることなく、ブルーはむしろさらに怒りを滾たぎらせている。
『愛あい香かさんの所有物のように言うのは気に入りませんが、その通りです！　身の程知らずに思い知らせてやってください!!』
「女性の唇を何だと思っていますの！」
　トゥアールも怒り心頭、イエローも機嫌が悪くなっている。
　もしかしてみんな、また勘違いしてるんじゃ……。唇を奪うって、直じかにチューするとかじゃないだろ、こいつらなら。
　パピヨンギルディは羽を羽ばたかせ、銅色に輝く鱗りん粉ぷんを周囲に放出し始める。
「あれは……!?」
　鱗粉が凝縮され、ノートサイズの銅版へと固まっていく。
「さ～どーぞ、行ってください～」
　完成した銅版が、合図と共に俺へと殺到した。
「危ないですわっ！」
　胸アーマーからホーミングミサイルを発射し、迫る銅板をカウンターで吹き飛ばすイエロー。ジャストタイミングだ。
　左右二発撃ったところで、勢いよく脱衣パージし、解放された胸が

たゆんと揺れる。
　ここで、早速先輩の強烈な駄目出しが入った。
「何で真っ先に胸アーマー飛ばすのよ！　それは一番最後に取っておいて！　どうしてもどうしようもない時だけ、断腸の思いで脱ぐのよ！」
　多分に私怨のこもったアドバイスだが……。
「で、でもフォトンアブソーバーという光膜が全身を覆っているから、装甲はさほど重要視しなくてもよいと……」
　おろおろしながら反論するイエロー。
　ほんとによく説明覚えてるな。この辺はヒーロー好きがもたらす、設定特化の暗記力だろう。ゲームのキャラなら何百だろうと暗記する子供に似ている。
「ヒーローになりたいならむやみやたらと胸を晒しちゃ駄目でしょ！　そんな布みたいなアンダーウェアでこれ見よがしね!!」
「わ、わかりましたわ……」
　まあ、私怨は私怨だが、脱がない方がいいというのは一応筋は通っているのか。
「いや、でもいいツインテールだぜ、イエロー!!」
　俺には細かい戦いのアドバイスはできない。でも、ツインテールを讃えることはできる。
　讃えていたのだが……。
「あ、あ、あ、ありがとうございますわっご主人さまぁん」
　またもやとろけた声を出すイエロー。鞭の次は飴をと思って言ったのだが、いらぬ世話だっただろうか。



「いや～、恐るべき破壊力です。あなどれませんこれ、脱ぐツインテイルズさん」
　とうとうイエローが敵から、飲むヨーグルト的な謎なぞの呼称を受けるに至ってしまった……。
「銅そ版れは撃墜しなくても～。危なくないですよ、別に痛くありませんから、ハイ」
　パピヨンギルディがパチン、と指を鳴らすと、何十もの銅版が奴やつの後ろに整列して出現した。
　攻撃に備えて身構える俺たちは、その銅版全てに何かが刻印されていることに気づいた。
「…………まさかあんた、唇くちびるが欲しいって……」
　ブルーがわなわなと震ふるえながら、銅版を指差す。
「はい～そうです。型を取ってね、コレクションしたいんですー。直接触れなくても、近くまで寄れば走査スキャンしてくれますから。何とかいただけませんでしょうかー、テイルレッドさん」
　銅版には、魚拓のようにキスマークが刻印されていたのだ。
「……うぅわぁ……」
　正直俺は、見た目が全然違ってもエレメリアンである以上、根本的な生態は変わらないだろう、無む闇やみに身体からだに触れはしないだろう、と楽観視していた。
　でも生態が信頼できても、変態に天井はないんだよな、こいつら……。久しぶりに、かなり精神的にきつい。
　無数の唇が空中に浮いているという絵面はもう完全に怪談、ホラーなのだが、こいつはこれで満足なのだろうか。
「やっぱりですね、少女の唇はいいと思うのです、ちっちゃいとね、いいですよね」
「よし、殺しましょう」

もはや問答は無用とばかりに、ブルーがランスを構える。
パピヨンギルディを守るように戦闘員アルティロイドがわらわらと現れた。お前ら忠義を尽くすだけ無駄だから、自分の命を大事にしろ。
「ご、ごめんなさい……」
はあはあと息を荒らげたイエローが、全武装の発射態勢を取っていく。
な、何でこの状況で完全脱衣形態フルブラストモードに……!?
「もう我慢できませんわ────────────────────ッ!!」
「何やっておわ─────────っ!!」
「ちょっと冗談でしょロックもしないでそこら中にぎゃ
─────っ!!」
見境のない全力発射に、俺やブルーまで吹き飛ばされていく。
「ご主人様に誉められてから、わたくし、わたくし、脱がなくてはという衝動に打ち勝てませんわっ!!」
しかも砂浜でツインテールのアンカーがきかないため、イエローも撃ちながら転げ、ドラゴン花火を転がしたような悲惨な状態になっていた。
そして脱いでいく。どんどん装甲を脱いでいく。笑いながら脱いでいく。
やべえこっちの絵面の方が遥はるかにホラーだ。
「ブルーッ！　胸部分だけ脱ぐなとかそんな些さ細さいなことじゃなく、今のイエローに必要な実のあるアドバイスをしてくれーっ!!」
「属性玉エレメーラオーブ────学校水着属性スクールスイム!!」
学校水着属性スクールスイムを属性玉変換機構エレメリーションし、砂の中をまるで海のように泳いで弾幕を回避するブルー。
地面でも、水のように泳げる能力か！　たまたま初めて使ったのが海の近くだったけど、街中での戦闘には使えそうだ。

　で、──つまり、逃げた、と……。
　俺は仲間の薄情さに涙しながら、爆圧でポンポンと打ち上げられていった。
「あはははははははは何かいい感じですわ──────っ!!」
　ついに全脱ぎし、ユナイトウェポンを作り上げるイエロー。
「いや～、はは、涎よだれのにじんだ唇くちびるもいいですね～、でも痛いですね～」
　大らかな性格が災いしたのか、それとも余裕をかましているのか、無抵抗で爆撃されていたパピヨンギルディは、あっさりとオーラピラーで拘束されてしまった。
「ヴォルティックジャッジメント──────────────ッ!!」
「あ、そういえば戦力の把握が目的でした～、いや～ダークグラスパー様に怒られちゃいますね～」
　呑のん気きな遺言を遺のこして、ヴォルティックジャッジメントで跡形もなく消し飛んだパピヨンギルディ。
　結構な肩書きを背負った強敵っぽい奴やつだったのに、決着はあっさりだった。
　戦場は地元のテレビ局らしきスタッフが遠巻きに撮影し、中継ヘリまで飛んできている。
　イエローは満足げに胸を張った。
「今日は、はぁ、んはぁ、しっかりとヒーロー、できましたわ……！　これで、テイルイエローのマイナスイメージも払ふっ拭しょくされ、汚名返上ですわね……はぁふん」
「いやそもそもだな、バトルスタイル自体が……」
　慧え理り那なの憧あこがれる子供向けヒーローとは、だいぶ乖かい離りしてしまっているんだよなあ。
　俺たちと違って、イエローの超火力攻撃はギャラリーにまで被害

が及びかねない。
　慎重さが求められるというのに……。
　トリガーハッピーの気があるのだろうか。
「うふふっ、明日のニュースが、楽しみですわ……！」
　軽く小躍りしながら帰還するイエロー。
　その素肌面積の多くなった背中と楽しげに舞うツインテールを見つめながら、俺は悲しい確信に肩を重くしていた。

　明日のニュースも、見ない方がいい。

◇

「いい加減校内での暴力は控えてください！　すっかり有名人になって、私がめり込んだ壁をＤＩＹ研究会の方々がすぐさま現れて修繕していくぐらい、みんな慣れちゃってるじゃないですか！」
「あたしだって、学校でくらいおとなしくしてたいわよ！」
　ツインテール部の部室内。その日の放課後も、愛あい香かとトゥアールの二人はいつも通り言い争っていた。
　日常のやりとりをＢＧＭに、俺は未いまだに引き摺ずるダークグラスパーのことを考えていた。
　昨日のエレメリアン。のほほんとした性格じゃなければ、もっと苦戦を強いられたはずだ。戦力は確実に増強されている……。
　不意に、トゥアールが俺のズボンを指差した。
「あっ、総そう二じ様、ズボンのチャック開いちゃってますよ？」
　見下ろすと、確かにチャックが開いていた。
「……え？　うわ、ホントだ！　悪い、今上げるから……」
　いつ閉め忘れたのか……慌ててチャックを上げようとすると、そ

の手にトゥアールが手を重ねてきた。
「ん大丈夫ですよぉ、私がこー、唇(くちびる)でチャックを啄(ついば)んで……」
　何(な)故(ぜ)手ではなく顔面が近づいてくるんだ……と思う暇(ひま)もなく、今度は愛香がトゥアールの頭をボールのように鷲(わし)掴(づか)みにする。
「あんた今、何したのよ！　見てたわよ、そーじのチャックが勝手に下りたの!!」
　トゥアールが、指と指の間に挟んだ黒い石を愛香に見せつけた。
「総二様の制服のズボンのチャックには、私の持つこの特殊な磁石にのみ反応する磁力塗料を塗ってあるんです……ククク、これで私はいつでも総二様のチャックを下ろせるというわけですよ！　あとは転んだフリして私の顔面をナイスボギーすればぶぉあ!!」
　愛香の腕(アイアン)による快打で飛ばされたトゥアールは、部室の隅のゴミ箱に見事脳天からホールイン・ワンした。
　どうも最近、喧(けん)嘩(か)に慣れすぎてスポーツじみたアーティスティックさも兼ね備えるようになってきたな、この二人。
「むぐっ……ぱっ、私の操作(トリック)にすぐ気づいたってことは、愛香さんだって総二様の股(こ)間(かん)に常日(ひ)頃(ごろ)から視線が行ってるってことじゃないですか！　やらしいですね!!」
「あたしが常日(ひ)頃(ごろ)から見張ってるのは、あんたの変態行為よ！　あんたはいつもいつもいつもおかしな発明ばっかりして……その労力をもう少し世の中のために使いなさいよ!!」
「使ってますよ！　発明特許だって元いた世界で三桁(けた)以上持ってます！　基地とか武装の材料費は全部私の特許料から出してるんですよ!!」
　あ、地味に謎(なぞ)だった資金元が、さりげない日常会話の中で判明

した。
　……深く考えないようにしてたけど、あの基地作るのにこの世界の日本円でどのぐらいかかるんだろう。

「うむ、揃ってるな」
　ノックも無しに部室に入り込んでくる、メイド服の女性。
　体育教師として赴任してきた、慧え理り那なのお付きのメイド、桜さくら川がわ尊みこと先生だ。
　ちなみに体育の授業中もメイド服のままがポリシーらしい。
　今日の授業の野球でも、ヘルメットの上にカチューシャを載せてかぶるという前衛的な出いで立ちでバッターボックスに立っていた。自みずから参加もポリシーらしい。
「今日はな、お前のクラス担任の樽たる井い先生から許可をもらってきたぞ。感謝しろ」
「許可って……何の」
「部活動といえば、顧問だろう。観み束つか、私がこのツインテール部の顧問になってやるぞ」
「「「えぇ!?」」」
　珍しく三人でハモり、桜川先生を一斉に見る。
「桜川先生、慧理那の護衛でしょう!?　今生徒会室にいなくていいんですか!?」
　桜川先生は、崩れ落ちるように床に膝ひざをついた。
「……頼む……仲間に入れてくれ……。一番の仕事が護衛なのに、お嬢様の方が私より強くなってしまったから、今まで以上に居場所がないんだ……」
「そういうこと言ってちゃ駄目でしょう!?　強いのは変身した時だけで、普段の慧理那は普通の女の子なんですから！　桜川先生が

守ってあげなくてどうするんですか!!」
　武術をかじった俺だって、変身していない時に刃物を持った男に襲われたとしたら、咄とっ嗟さに迎撃できる自信なんてない。アイカカタメールへの瞬間対処を見る限り、愛あい香かは何とも言えないが……とにかく、ましてや慧理那が普段からの危険を自力で対処できるはずがないんだ。
「環境が目まぐるしく変化して、弱気になってるかも知れませんけど……桜川先生が必要じゃなくなるなんて、あり得ないでしょう。しっかりしてください」
　手を差し出すと、桜川先生は弱々しく震ふるえる手をそっと載せてきた。
「……優しいな、観束………………嬉うれしうおおおおおおおおお!!」
　態度を豹ひょう変へんさせた桜川先生が、俺の腕を掴つかみ、隠し持っていた朱肉に親指を押しつけた。
「げっ!?」
　そのまま、メイド服のエプロンの隙すき間まから取り出した婚こん姻いん届とどけに、無む理り矢や理り拇ぼ印いんを押させようと手を捻ひねってくる。
　拇印がパピヨンギルディの銅版レリーフを連想させ、俺は恐怖で身体からだが竦すくんでしまった。
「そんなことだろうと思ったわよ!!」
　しかし、婚姻届に俺の指が届く寸前で、愛あい香かが桜さくら川がわ先生の腕を引っ掴つかんだ。
「何いっ、津つ辺べ……読んでいたのか!!」
「そーじ！　ダークグラスパーのことなんてどうでもいいから、もっとこういう日常に潜む危険に注意を払いなさい!!　あんたは騙だ

(ま)されやすいんだから!!」
　やっぱり、愛香の心配性はどっか偏ってる気がするんだよなあ……。
　いや、今のは助かったけど。
「くそっ、観(み)束(つか)が私の求婚を断るのは、私が完(かん)璧(ぺき)な大人の女性であることに引け目を感じてしまうからだろうと思って弱さを見せてみたが、駄目だったか」
　ねえ、今の一連の流れって求婚(プロポーズ)ってロマンチックなカテゴリに入れていいの？
　普通に犯罪(バイオレンス)カテゴリじゃないの？
　赤インクにまみれた手を床に投げ出し、俺は乾いた笑いを浮かべた。
「黙ってればなに気安く求婚しようとしてるんですか！　部室出禁にしますよ!!」
「このぐらい許せ！　お前たちは、若さという私にはない最強のアドバンテージを持っているんだぞ！　一〇代の女は二〇代の女に優しくする義務があるんだ!!」
　開き直った桜川先生の反論に、何(な)故(ぜ)か固まるトゥアール。
「どうした、トゥアール。顔色が悪いようだが」
　覗(のぞ)き込むように顔を近づける桜川先生に、トゥアールは尻(しり)餅(もち)をつくほど後(あと)退(ずさ)って言い返した。
「美白なだけです！　最強の一〇代、シミひとつないすべっすべですよ!!　ほっぺたもつるつるしていて、何かしら液体がつくと映えると思いますよ総(そう)二(じ)様!!」
「そ、そうか……」
　よく分からないが、インクが乾く前にティッシュで指を拭(ふ)いた。

そのティッシュを見て、トゥアールがニヤリと笑っているのが気になるが……。

「とりあえず、顧問になったのは本当だ。よろしくな」

腕組みをし、からっと笑う桜川先生。

結婚にうるさくなければ、さっぱりとしていて頼れるいい人なんだよなあ。

「いりません！　……と言いたいところですが、まあ、いいでしょう。顧問がいないっていうのは、割りと切実な問題でしたから」

トゥアールの言葉に、俺も頷うなずいて肯定する。

慧え理り那なに上う手まく誤ご魔ま化かしてもらおうと思っていたが、顧問不在はちょっとした問題だった。

部活・同好会の数が膨大な陽よう月げつ学園だ。顧問が名前だけ貸して掛け持ちが当たり前だが、それでも一般人がこのツインテール部に関わるのはまずい。

桜さくら川がわ先生なら、事情を知っている関係者だし、うってつけだ。

ちなみにうちの担任の樽たる井い先生は、どういう逃げ方をしているのか、一つも顧問を引き受けずバックれているらしい。

一方、愛あい香かは一〇代二〇代論争に交ざらず、部室のテレビで午後のニュースを眺めていた。

ちょうどツインテイルズのトピックが映った画面を見て、桜川先生は大きな溜ため息いきをついた。

「早速顧問として、活動報告を求めたいのだがな。お嬢様の戦い方……あれは何とかならんのか。昨日もニュースで放送されているのを見て、だいぶ落ち込んでいらっしゃったが」

案の定、海外のニュースで昨日の戦いは大々的に報じられてい

た。
　しかしお国柄だろうか、脱ぐテイルイエローについてはさほど言及されず、その後ろで憎しみに満ちた目で仁王立ちしているテイルブルーの方が悪魔的な扱いだったのが泣ける。
　ニューヨークでは、テイルブルーはデビルツインテールという二つ名で畏い怖ふと憧どう憬けいを集めており、ツインテール型に象かたどったライトでビルを照らせば駆けつけてくれるという都市伝説まであるらしい。
「尊みことさん、言いづらいですけど、あの戦い方はテイルギアに強制されているのではなく、本人の潜在意識に起因していることですので。慧え理り那なさんが脱ぎたくて脱いでいるだけですので」
　トゥアールに全く言いづらさを感じさせないないドストレートな説明をされて、先生は肩を落とした。
「……反動か。今まで厳しく自分を律してこられたからな。のびのびとできる場ができたことは、私も嬉うれしいのだが……」
『のー！　のーせんきゅー!!』
　必死に訴えかける幼い声が聞こえる…………って、昨日の俺だ。戦闘後、金髪のお姉さんに囲まれてツインテールを触らせられているテイルレッドの映像が画面にでかでかと映る。
「あんた……何、パツキンのツインテール触ってんのよ！　やらしいわね!!」
　くわっ、と目を見開いて不当な言いがかりをつけてくる愛香。
「い、いやそれは……その……触って欲しいって言うから……わざわざ日本語で……」
「はあ!?　あんた、女が触やれって言ったら誰だれでも触やるわけ!?」
「何か言い方おかしくないか!?」
　先日のハリウッド映画化の発表のせいか、海外でもツインテール

にする女性が増えてきているそうだ。嬉しいことなのだが、テイルレッドにツインテールを触られると願い事が叶かなうという例の眉まゆ唾つば物の噂うわさも、ワールドワイドで拡散しているらしい。
「そもそも無む理り矢や理り触らせられるなんて、あとで何請求されるかわかったもんじゃないわよ！　コンビニでコーラ買う感覚で裁判吹っかける国なんだからね!?」
　また妙なベクトルの心配性が……。その間違った知識はどこから来ているんだ。
「ちょっと待て、テイルレッドの時俺は女なんだぞ？　しかも年端もいかない小さな女の子だ。いくら何でも詐さ欺ぎ目的なんてありえないじゃないか」
　愛あい香かは自分のツインテールの毛先を摘つまみ、そっぽを向いて呟つぶやいた。
「あ、あたしのだけで充分でしょ……！」
「へ？」
「な、な、な何でもないっ……消すわよ!!」
　愛香は顔を真っ赤にしてテレビの前までずかずか歩いて行くと、手刀を画面に突き刺した。
「何してんだお前はあああああああああ!?」
　はっとして手を引き抜く愛香だが、時既に遅し。備品のテレビは早くもご臨終してしまった。
　いかな愛香とて、ブラウン管時代ではその手は無事では済まなかったはずだ。
　技術の進歩は、利便性だけでなく確かな安全性を人々に与え給うのだ。テレビは、慌てて素手で消そうとするうっかりユーザーの危険性を考慮し、薄型へと進化していったのだろう。
　誇り高き日本の技術者たちに、俺は今日もこうして感謝を忘れな

い。

　ノートパソコンで作業中のトゥアールは、ひらひらと手を振って愛香に難癖をつけていた。

「まあ、いいじゃないですか愛香さん。ファンは大事にしないと。私も現役時代はそれはもう引っ張りだこでしたよ。幼女に。アンチしかいない愛香さんには、我われ々われが眩まぶしすぎるかもしれませんがプププーププ」

「……そういえば、あのイースナって女、あんたのファンだったのよね？　そんなに印象に残るやつだったの？」

　ギリギリでトゥアールにツッコむのをこらえつつ、愛香は話題をつなげた。

「印象に残る残らないにかかわらず、幼女のファンはほぼ全部記憶しています。まあ、その中でも相当困った部類でしたが……」

「裏を返せば憶おぼえているのは幼女だけか。困ったやつだ、お嬢様に手を出すんじゃないぞ」

　桜さくら川がわ先生の警告にも、トゥアールは無言の笑顔で返すだけだった。……何な故ぜ領うなずかない。

「で、そのお嬢様のことで、今日はちょっと君たちに相談があるんだ」

「相談？」

　椅い子すに腰掛け、憂ゆう鬱うつな溜ため息いきをつく桜川先生。

「うむ。実はここのところ、神しん堂どう家では慧え理り那なお嬢様の生活態度が問題になっていてな。奥様がお怒りになられているのだ」

「奥様……って、神堂会長のお母さん？　うちの学校の理事長ですよね？」

　愛香の質問に首肯し、桜川先生は続ける。

「ツインテイルズの活動は公にはできんだろう。だから、空白の時

間が増えていく」
　無断外出が増えた、って思われてるわけか……。門限が厳しいって言ってたもんな。
「それに、遅くまで無理に起きているようになった。朝は頑張って起きていらっしゃるが……。とどめは、生徒会の仕事にひどく身が入らなくなってしまわれてな。慧ぇ理ゥ那な様は決して手抜きなどしていないだろうが、やはり、頭の中はツインテイルズのことでいっぱいのようなのだ」
　それって、つまり……。
「ツインテイルズになったせいで、生活サイクルが乱れてしまってると……？」
「そうなのだ……」
　しかし、意外にもあっさりとそれを否定したのは、愛あい香かだった。
「桜さくら川がわ先生。あたしも、ツインテイルズになってからだいぶ生活乱れてますけど、なんとか慣れてきますよ？　神しん堂どう会長も、まだ日が浅いからきついでしょうけど、これから……」
「いや」
　申し訳なさそうに、桜川先生は愛香の言葉を遮さえぎった。
「相談というのは、そこではないのだ。この先は神堂家の問題だ、他言無用だぞ。すまんが観み束つか、念のためにこの機密保持の誓約書にサインをしてくれないか」
　差し出された誓約書には何な故ぜか、婚こん姻いん届とどけという最近ひどく見慣れた文字が見えた。
　日常にトラップが多すぎて、神経を研ぎ澄ます訓練をしている気分になる。
　もちろん俺は、自分への信頼を担保に、誓約へのサインをお断り

した。

「実は神堂家は代々、一八歳で必ず結婚する掟おきてがあるんだ」

「「ええええええええええええええええ!?」」

　桜川先生の言葉に、俺も当然ビックリしたが、さすが女子二人の反応は段違いだった。

　愛香とトゥアールはハモって身を乗り出す。

「ちょ、ちょっと待って、それじゃあ会長、卒業する前に結婚するってこと!?」

「しかも、本来であれば、一六歳になると同時に結婚相手を探し、一七歳までには見つけ、結婚まで共に過ごす。というのが慣例だ」

「何よそれ、何でそんな細かくスケジュール決められてるのよ……二十一世紀の世の中よ!?」

「由緒正しき家には往々にして、こういったしきたりがあるものだ」

　俺ははっとして、桜川先生の方を見た。

「神堂家のメイドさんにも、その掟が!?」

「いやお前私もう二八歳だぞ、わざと言ってるのか、結婚して謝れ」

　早とちりだった。

　桜川先生は、溜ため息いき交じりに続ける。

「実は慧理那様は、学業、そして生徒会長を頑張るという条件で、一六歳からの婿むこ探しを引き延ばしてもらっていた経緯がある。津つ辺べの言う通り、今の世の中ではナンセンスだ。奥様も、自分の経験を踏まえて、無理に掟に縛る必要もないと考えられてな。そこで、通われていたお嬢様学校からこの陽よう月げつ学園に高等部から転入させたのだ」

　なるほど。

　お嬢様学校とかだと、周囲も何かしらそういう家の風習に縛られた人が多いだろうし、環境そのものを一変させたってことか。
「そんな娘さん思いの理事長が怒った、ってことは……」
「うむ。奥様が……この数日、次々に見合いの話を取り付けている」
「あー……」
　俺たち三人は、言葉を失った。
「な、何か普段、あんな現実離れした怪物と戦ってるのに変だけど……あまりにも世界の違う出来事すぎて、ちょっと混乱してる……」
「俺もだ」
　妙な話だが、振り切った非現実よりも、こういった僅わずかに浮き世離れした現実の方が、今の俺たちにとっては実感が薄い。
「まあ、その見合い話の中の一つでも私に回してくれれば、とは思うが……皆、いいとこの坊ちゃんだからな、一介のメイドに紹介などできまい」
　おっと、それはどうでもいいが、と、全くどうでもよくなさそうな顔で打ち切ると、
「とにかく私たちメイドは中立の立場だが、慧え理り那な様の悲しむ顔は見たくないのでな。裏でいろいろ立ち回っている。君たちにもなにかと協力して欲しいのだ」
「わかりました。俺たちのせいでもありますしね」
　相談を受けながら、俺は、先日の慧理那の電話を思い出していた。
　そうか、あの時の相談も、もしかしたら──。

◇

　ダークグラスパーの強権発動で、基地にいる全ての戦士が、ホールへ呼び出しを受けた。
　怠慢を咎(とが)められるのか、それとも先日楯(たて)突いたことを今罰せられるのか。
　いずれにしても無事ではいられまいと、皆沈(ちん)鬱(うつ)な面(おも)持(も)ちでホールへと入っていった。
　整然と並べられたテーブルには結婚式場のようにネームプレートが置かれ、合わせて色とりどりの箱が置かれている。
　面々が顔を見合わせざわめき始めたところで、ダークグラスパーが満を持して入室した。
「皆、わらわの着任、思うところもあろう。ゆえに今日は腹を割り、結団式でもと思うてな」
「何と、そのような恩(おん)寵(ちょう)を我(われ)らに!?」
　闇(やみ)の処刑人とは思えない、思い切った催しだと知り、徐々に場の緊張が解け始める。
　置かれた箱は全て、エロゲーだ。ダークグラスパーの所蔵するエロゲーの数々。そのごく一部ではあるが、一人につき、一個ずつ振る舞われたのだ。
　ピンポイントで、個々が好むシチュエーションに特化したゲームが選ばれている。
　一体どこからそんな情報を手に入れたのかはわからないが、首領直属の戦士という雲の上の存在がそれほどに、末端の自分たちを気にかけてくれているという事実が嬉(うれ)しいのだろう。彼らから不信感はすっかりと消え失せていた。
　きっとこの司令官の下でなら、再び身(しん)命(めい)を賭(と)して戦えるであろう。そんな決意が溢(あふ)れていた。個々のテーブルから一斉に

ノートパソコンが迫せり上がってくる、その時までは……。

「さあ、人数分のＰＣも用意した。遠慮はいらぬ、わらわの奢おごりじゃ。存分に飲やれい」

　出陣前の宴うたげで戦意を鼓舞するために杯を掲げるがごとく、自みずからもお気に入りのエロゲーの箱を掲げるダークグラスパー。

　ホール内の空気が凍りついたのにも気づかず、目の前に座るエレメリアンに声をかけた。

「おいそこのクマ。わらわの目の前に座っておるのじゃ、先陣を切ってみせい」

「い、今ここでやるのでございますかあああああああああああああああ!?」

　恰かっ幅ぷくのいい、熊くまのような容姿のエレメリアン。ちょうど、三日月のエンブレムがあしらわれた兜かぶとをかぶっており、武士の宴を形容するにはうってつけの人材だ。

　もちろん、今繰り広げられようとしている、魔界の宴には似つかわしいはずなどないが。

「フッ、わかっておる。わらわの眼鏡めがねは、全てを見通すからの。うぬの好むは、結ばれるその瞬間まで一切媚こびぬ、病的に加虐志向なヒロインであろう。そのゲームにて、しっかりと網羅しておるわ。多少キャラデザインの彫りが深いが、噛かめば噛むほど味の出る佳作よ」

「わ、我わがフェイバリットシチュエーションのご唱和、恐悦至極ッッ!!」

　少女の前で嬉き々きとしてエロゲーを嗜たしなむには、彼はまだ、未熟すぎた。

　同志たちの見守る中、インストール作業を強要されるベアギルディ。
　プログレスバーの遅々とした進行が、滅びへのカウントダウンを思わせた。
　プレイし始めるも、またこれが、濃いキャラデザインと裏腹にバリバリの萌えゲーム。ニヤリとする台詞せりふが多い。
『棒高跳びの目測を誤って、あんたにダイブしちゃっただけよ。ちょっと顔面が胸に埋まったからって、にやけないでくれる？　気持ち悪いわね。この棒で刺すわよ』
「はあ、はあ……がはあ!!」
　もちろんベアギルディにとっても、それを見守る仲間にとっても、爪つま先さきから徐々にドリルで削られていくような苦行でしかない。たまらずｃｔｒｌキーを押してスキップをしようとするベアギルディへ、鞭むちが振り下ろされる。
「たわけ、日常シーンを疎おろそかにし結果を急ぐなど、畜生の所業ぞ!!」
「も、申し訳ありませぬ!!」
　お叱りを受けた畜く生まは泣く泣く進め、実に一時間ほど、針の筵むしろのような時間が流れた。
　そしてついに、最初のご褒ほう美びシーンが訪れる。
　ＣＧではヒロインが眉まゆを吊つり上げ、不機嫌そうにしながらも服を脱いでいく。
　しかし次の瞬間、メッセージウィンドウに表示されたのは、再生されているボイスとかけ離れた、アルファベットの羅列だった。
「おっと、誤字かと思えば。不思議よのう、こんな所にわらわのアドレスが表示されておるのじゃ。まあこれも何かの縁。しかと登録するがよい」

盛り上がったシーンで、痛恨の誤バ字グ。

これが普通に日本で売られているエロゲーならば、ミサイルに括くくり付けてメーカーに発射返品するほどの度し難きバグだが、わざわざプログラムを書き換えたダークグラスパーは一切合切の罪悪感もなく、ベアギルディの肩を叩たたいた。

「ここのこのモザイクがＱＲコードになっていよう。それを読み取れば、わらわのアドレスが登録されるぞ」

しかも、ヒロインの股こ間かんのモザイクをＱＲコードに仕立てるという、チャーミングの極みとでも言うべきサプライズ。

垢あか抜ぬけぬ田舎娘が見れば、都会のトレンドと誤解する危険性のある最先端ファッション。警察の手の及ばぬ存在であることが、実に遺憾だ。

進退極まったベアギルディは、震ふるえる手で自みずからの携帯電話を取り出すと──

「おぶうっ!!」

くしゃみのように吐血し、携帯電話のカラーリングをプレミアムブラックからブラッディーレッドへとチェンジした。

「も、申し訳ありませぬ……せっかくの首領補佐様のご厚意を……！　未熟ながら、防水機能なき携帯に吐血の失態！　こ、これでは登録できませぬ!!」

ダークグラスパーのアッパーで、パソコンごと天井に吹き飛ばされるベアギルディ。

ちょうど、熊くまが渓流でシャケを釣つり上げる光景を思わせる。

「もうよいわ！　各自、自室にこもって勝手にやっておれ!!」

ダークグラスパーは、ぷりぷりと怒りながらまたしても部屋を後にするのだった。

「くそう、図ずう体たいばかり育って、肝っ玉の小さき奴やっらよ！　女のアドレス一つ満足に登録できぬとは!!」
　メガ・ネプチューンにもらったＱＲコードのシールをわざわざデータにして仕込む手間までかけて、この有様だ。
　怒り心頭で廊下を歩くダークグラスパーの前に姿を現したのは、ついにホールに姿を現さなかったスワンギルディだった。
「それならば、不肖このスワンギルディが首領補佐様のアドレスをご拝領頂きたく」
　顔つきが僅わずかに精せい悍かんになってきている。
　身体からだには傷きず痕あとが増え始め、心の師への憧どう憬けいが浮き出ているように見えた。
「……ほう、いい目をしておる。そこな有象無象どもとは、覚悟が違うようじゃの。わらわの呼びかけに応じず、鍛錬に勤いそしんでおるだけはあるようじゃ」
「いいえ。部隊を侮辱されては、亡き隊長に合わせる顔がないだけのこと。首領補佐様のご期待に見合うよう鍛練を積んでいる最中ゆえ、単独行動には目を瞑つぶって頂きたく」
「よかろう」
　ダークグラスパーは、差し出されたスワンギルディの携帯電話を、振り払うような大おお雑ざっ把ぱな動作で引ったくった。
「貸せい。わらわ自みずから打ち込む栄誉を与える」
　スワンギルディは、タッチパネルの上を踊る神速の指に瞠どう目もくした。
（は、速い――――!!）
　機器の反応速度の限界を見極めるどころか、己が情念をぶつけ、処理速度の限界を超えさせるほどの高速。
　アルティメギル戦士たちの持つ携帯電話のキャリアドメイン、

「@ult.mg.el」……その前に綴つづられた文字列だけでもかなりの長さなのが見えたが、こともあろうにダークグラスパーは、頼まれてもいないのにその下の個人情報も次々と打ち込んでいった。
「フッ、ＯＳが古いようじゃ。どれ、アドレス帳の入力項目を増やせるよう、わらわが改造しておいてやろう。好物や趣味なども伝達出来なくては、アドレス交換とは呼べぬ!!」
「いえ、あの……！」
　仲間内の赤外線通信ですら、誕生日まででギリギリ、それ以上の情報などもらっても「う、うーん」という感じなのに、望まぬ個人情報を次々に与えられるのは、恐怖でさえあった。
　おろおろと作業を覗のぞくスワンギルディは、一瞬見えた単語に戦せん慄りっした。
「スッ……！」
　スリーサイズまで入力している。
　重い。重すぎる。しかも、年相応の、別に際立った数値でもない標準的なローティーンの女の子のそれなのが、余計罪悪感をもたらす。
「ＳＮＳのＩＤも全て入力しておく。存分に声をかけよ、踏み逃げは許さぬ」
「しゅ、首領補佐様ああああ!!」
　廊下に響くスワンギルディの悲鳴。
　ようやく入力し終わったと思ったら、間髪容れずに携帯そのものをビーズアートでデコレーションまでし始めた。密集したフジツボのような、比類なきイマドキ女子のセンスで……。

　些さ細さいな蛮ばん勇ゆうが、身を滅ぼす。
　スワンギルディのこの一件は、アルティメギルの戦士たちに、

ダークグラスパーという闇やみの処刑人の真価を、いやというほどに知らしめるところとなったのだった。

◇

　今日は生徒会の仕事が早く終わったということで、慧え理り那なはツインテールの部室にいつもより早めにやって来ていた。桜さくら川がわ先生に相談されていることもあり、少し心配だ。

　トゥアールは熱心に、ノートパソコンのキーを叩たたいている。

　アルティメギルの新部隊の増援を見て、トゥアールも対策に乗り出したのかも知れない。

　しかし不気味なのは、その新部隊の先せん鋒ぽうが顔見せをして以降、エレメリアンが一向に現れないことだ。

「ここのところ、アルティメギルが現れませんわね……」

　窓の外を見つめながら、慧理那がぼそりと呟つぶやく。

「いいことじゃない」

　愛あい香かの返答に対して、慧理那の歯切れは悪い。

「そ、それはそうなのですが……」

　せっかく変身できるようになったのに、なかなか機会が訪れないことか。

　それとも、テイルブルーと並んですっかりネガティブなイメージを植え付けられてしまった世間に対して、挽回したいのか。

　どちらだとしても気持ちはわからなくはないけど、一般人が危険に晒さらされないのが一番だし、慧理那もそれは自分でわかっているだろう。

　トゥアール以外、俺たち三人は特にやることもなく、新調したばかりのテレビで夕方のバラエティーを見ていた。

「あ、またこの子出てる。最近よく見るわね」

　愛香が注目した画面の先に映るのは、眼鏡めがねが売りの新人アイドル、善いい沙すな闇あん子こ。

　ずいぶんとプッシュされているらしく、最近バラエティーや歌番組で見ない日はない。

「…………」

　俺は最初、違和感を感じていたのだが……いや、今も感じてはいるのだが、それよりも残念に感じているのは、この子がツインテールを三つ編みにしてしまったことだ。

　俺はこのアイドルに、溢あふれんばかりのツインテールの才能を感じていたのだが……皮肉なことに、この子は路線変更して三つ編みにして以降、急激にその人気を伸ばしていった。

　おそらく、トレードマークの眼鏡が三つ編みと完全に調和したからだろう。

　ダンスに合わせて揺れる三つ編み。振り付けのほとんどが、眼鏡を強調するよう構成されている。

　新人アイドルだというのに、かなりの凄すご腕うでだ。

「うーん、いいプロデューサーでもついたんでしょうか、確かに垢あか抜ぬけましたよねー、その子」

　さすが、タッチタイプで作業を続けながらも、視線だけテレビに移すトゥアール。

　なるほど、路線変更はプロデューサーの意向か。

「ねえ、そーじ」

　愛あい香かがツインテールの毛先を摘つまみながら、ちらりと俺の方を見てきた。

「やっぱり……ツインテールの子がツインテールやめたら、嫌いや？」

難しい質問をするなあ。
「そりゃあ、かっこつけずに言えば、似合う子にはずっとツインテールでいて欲しいけど……でもやっぱり、その子のしたいようにするのが一番だと思うよ。最近、嫌々ツインテールにしてるような人よく見るから、特にさ」
「……あたしは……嫌じゃないから」
「え……」
愛香は潤んだ瞳で、俺を見つめてきた。ずっと見てきているから、そんなこと当然だとわかっているはずなのに、俺は何な故ぜか、胸が高鳴るのを感じていた。
「慧え理り那なさん、巨乳属性ラージバストを試しに使ってみませんか!?　慧理那さんなら余裕で使えると思いますよ!!」
トゥアールがラッコみたいな姿勢で、愛香と俺の間を割るように長テーブルの上を滑ってきた。
「何なのよあんたは────────────────ッ!!」
「こっちの台詞せりふです！　愛香さんが頬ほお染めて乙女台詞言うなんて、ティラノサウルスがバレンタインチョコ渡してくるようなものなんですよ！　身の程を知ってください!!」
「そうねえ、よおく知ったわ─」
部室がジュラ紀にタイムスリップしてしまったようで、恐竜の叫びと悲鳴がこだましている。

気がつくと、慧理那は俺と愛香の方をじっと見ていた。
「やっぱり、観み束つか君と津つ辺べさんは、幼おさな馴染なじみなんですわね。多くを語らなくても通じ合っているようで……羨うらやましいですわ」
まあ、ツインテールを見ればだいたいの感情は把握できるから

な。

　それでも、愛香の行動は突拍子もないことばかりで、予想が外れる時が多いのだが。

「そ、そうかな……？」

　珍しくしどろもどろになっている愛香。

　這ほう々ほうの体ていのトゥアールは反対に怒りをみなぎらせ、立ち上がってテーブルを叩たたいた。

「正気ですか慧ぇ理り那なさん!?　幼おさな馴染なじみなんて、かませ犬ヒロインの宇宙代表ですよ!?　ただでさえ『何となくフッても後腐れない感』ナンバー１のカテゴリな上に、愛あい香かさんの幼馴染ポテンシャルなんて輪をかけてカスみたいなものなんですから。悪いことは言いませんから、憧あこがれるのはやめておいた方がいいです!!」

「何となく殴っても後腐れない感ナンバー１のトゥアールさん、こっちいらっしゃ～い」

「やめてください！　私、そんな安い女じゃありませ……まだＨＰ回復してなあああああああああああああ!!」

　ガッ、と足首を掴つかまれ、ズルズルと床を引き摺ずられていくトゥアール。

　モンスターパニック映画の醍だい醐ご味み。怪物と、無力な人間の対比が生み出す恐怖だ。

　例のアクション俳優は、果たしてどれだけこの役を作り込めるか。

　部室の隅でモンスターに捕食される一般人を、慧理那はじっと見つめていた。

　さっきから、慧理那のツインテールが少し不機嫌になっている。もう二人の喧けん嘩かは見慣れたものと思っていたが、違うのだろう

か。
　突如立ち上がり、両手をメガホンのように口に当てて叫ぶ慧理那。
「――津っ辺べさんって、胸が小さいですわね！」
「……」
「……」
　予期せぬハプニングに、折り重なっていた愛香とトゥアールは、目を丸くして慧理那の方に向き直った。
　あれ、今度は喜んでいるように見えるぞ!?　何だ何だ、今日の慧理那のツインテールは、随分ころころと表情が変わるな。
「あの、津辺さん……怒らないんですの？」
　いつまで経っても愛香が微動だにしないのを見て、慧理那はおそるおそると口を開いた。
「いや、だって……」
　愛香は会長の胸元に視線を向ける。
　やがて、微かすかな笑みを垣間見せた。
　何て直視しがたい自尊心なんだ……！
　だだっこのように身体からだを揺すり、慧理那は二人の元に歩み寄った。
「わたくしも、津辺さんに叩たたいて欲しいのですわ！」
「ぅええっ!?」
　さすがに、「うん、わかったわ」とノーモーションで慧理那の鼻先にワンパンを繰り出すようなことはなく、愛香は悲鳴のような驚き声を上げ、軽く尻しり餅もちをついた。
「津辺さんとトゥアールさん、とても仲良く見えますもの……。わたくしも仲間として、そんなやりとりができるようになりたいんですの」

　なるほど。慧(え)理(り)那(な)には、二人のあれが仲間の通過儀礼のように見えるわけか……。

「代わってもらえるものなら代わってもらいたいぐらいですけど！　さすがにそれはできません！　ヒーロー番組でよく注意していませんか!?　これは鍛えた超人だから大丈夫なのであって、よい子は真(ま)似(ね)をしないでね、と!!」

「そうよ、会長じゃ顎(あご)から上が全部吹っ飛んで無くなっちゃうわよ!?」

「お前は普段どんな力でトゥアールを殴ってんだよ!!」

　流れるような俺たち三人の会話を聞いて、慧理那はさらに、「う～」と唸(うな)りだした。

「大丈夫ですわ！　ヒーローは変身する前であっても、何トンも威力がある怪物の攻撃を食(く)らっても怪(け)我(が)一つしませんもの！　テイルイエローに変身できるようなった今、わたくしもきっと耐えられるはずですわ!!」

　確かにヒーロー番組では、普通なら受け止めた腕ごと身体(からだ)がミンチになるような力で殴られても平気だし、ダイヤモンドをも斬り裂くと説明されている剣で斬りつけられた金網や壁が、真新しいままだったりする。不文律ってやつだ。

　だけど、現実は非情なんだ慧理那……。

「さあ津(つ)辺(べ)さん、左のほっぺにどんとこいですわ！」

「ご、ごめんさすがに……」

　いくら愛(あい)香(か)でも、無抵抗の常人に殺人パンチはできないようだ。

　慧理那は、ぷいっとそっぽをむいた。

「わかりました。いいですわ。つーん」

「やだかわいいっ……じゅーん」

　意味不明な効果音を語尾につけ、トゥアールが慧理那の子供っぽくて可愛かわいい仕草にときめいている。
　だが、愛香に断られたことで、なんとその矛先を俺に向けてきた。
「わたくし、観み束つか君に叩たたいてもらいますわっ」
「ええっ!?」
「お願いしますわっ」
　またもや、目を閉じて俺の目の前に無防備に立つ慧理那。
「……う～ん……。じゃ、じゃあ……」
　しかしここでごねても、いつまでも慧理那は納得しないだろう。
　俺は充分に手加減をして、慧理那のおでこをぺしっ、と叩いた。
「貴様ァァァァお嬢様に何をするかあああああああああああああ!!」
　二つ並んだ長テーブルを倒し、下から桜さくら川がわ先生が飛び出してきた。
　テーブルの下でずっと体育座りして隠れていたのは部室に来た時から気づいていたが、あえて誰だれも触れずに放置していたのだ。五分ぐらい前から、ぷるぷると震ふるえていた。
「おのれ、女に免疫のない安あん牌ぱいと思っていればとんだ肉食獣！　やはりお前は、私が矯正してやらねばならんようだな、観み束つか！　結婚という名の更正レッスンの始まりだ!!」
「今のは明らかに、慧え理り那なの護衛として飛び出したわけじゃないでしょ!?」
　出ていくタイミング逃のがして途方に暮れてたら、いいきっかけがあって喜んだだろう。
「いいから受け取れ!!」
　押しつけられた婚こん姻いん届とどけは、愛あい香かがインターセプトして

破り捨てる。
　このエコ時代に、いったい週に何枚の紙が無駄に消費されていくのか……。地球に生い茂る木々に、俺は心の中でそっと頭を下げる。
「……観束君に……叩たたかれちゃいましたわ」
　おでこを押さえ、うふふ、と上品に笑う会長。
　笑顔は高貴なのだが……その、また何か、息が荒いような……。
「もっと叩いて欲しいですわ」
「いや、勘弁してくれ……さっきのだってかなりの勇気がいったんだぞ」
「そこを何とか……はぁ、はぁ……」
　困った。理事長が慧理那の生活態度を気にしていると、桜さくら川がわ先生に相談されたばかりだというのに、慧理那は俺たちに染まっていく一方だ。
　年中馬ば鹿かをやっていても差し当たって日常生活に弊害のない俺たちと、生徒会室とツインテール部室でスイッチを切り替えなければいけない慧理那では、負担が違いすぎるだろう。
　慧理那は息を荒らげたまま俺をじっと見つめている。
　助け船を求めるようにトゥアールを見ると、机を戻してパソコンで作業を再開していた。
　しめた、何かの設計なら、慧理那が興味を持ってくれるはず！
「え、慧理那、トゥアールがさっきから何か設計してるぞ、きっと新しい道具じゃないかな、見せてもらったらどうだ？」
「本当ですのっ？」
　尻尾しっぽを振る犬のように可愛かわいらしくトゥアールの隣に寄っていく慧理那。
　ほっと胸をなで下ろしていると──

「トゥアールさん、何を作ってらっしゃるの？」
「エロゲーです!!」
　泥舟よりひどい、進んで自沈する助け船に慧理那を乗せたことを、俺は激しく後悔する。
「……えろ食げ？　食べ物でそのようなものが……？」
　慧理那は、朝あさ食げや昼ひる食げのようなものと勘違いしているようだった。
「……あ、あんた何よこれ!!」
　当然すかさずチェックに行った愛香が、パソコンのモニターを見て顔を真っ赤にしていた。
「私のＣＧですが？」
「私って、これ……は、はだ……」
「おやあ愛あい香かさん、ただのゲームですよお、何を照れてるんですかあ？」
　桜さくら川がわ先生も後ろから覗のぞき込み、おお、と声を上げている。
　さすがに男の俺は混ざれないだろう……。こういう時、少し困る。
「しかも無駄に上う手まいのが腹立つっ……何で絵まで自分で描いてんのよあんた!!」
「私ぐらい女子力が高いと、自分で自分のＣＧの原画から彩色までこなします。もちろんシナリオも音楽もディレクターも全部私です！　攻略ヒロインも私だけです！　最後にはねっぷり情感込めてボイスも収録しますよ!!　私が!!」
「そんな女子力がこの世にあってたまるか――――――――――――ッ」
　愛香はツインテールを振り乱し、トゥアールを机の上にメンコの

ように叩たたきつけた。
　相変わらず最近の女の子の流行は全くわからん。自分で自分のそういうものを作るものなのだろうか……。
　あと、近ちか頃ごろトゥアールが愛香の技に慣れて、妙に俺からパンツが見える位置に調整しながら技を食くらっているように見えるのだが、気のせいだと強く思いたい。

「ト、トゥアールさん、何な故ぜこんないかがわしいものを……」


MAX!

　さすがに部室でエロゲーは、生徒会長の指導が入る。
「私の裸はいかがわしくありません！　慧理那さんだって脱ぐのに、何故私は駄目なんです‼」
「わたくしは全裸ではありませんわっ」
　……二人のこういう会話を聞いていると、絶対にイコールで結べないはずの二人が、どんどん同じ領域にシフトしてきているのを痛感する。
　だが、俺が黙っている間に、話はとんでもない方向へ向かっていた。
「これは、総二様のためのゲームです」
「……………………今なんて」
　絶句する俺の方に振り向いて、トゥアールはわかってます、とばかりに無言で頷いた。
　え、何が⁉　何を⁉
「総二様は、変身すると女の子になってしまいます。これは、想像以上に精神に負担がかかることなのです。そこでこうしてエロゲーをプレイして、女の子の身体に慣れる！　テイルレッドにとって、女の子に慣れることこそ、もっとも重要な特訓なんです！　実物の前にエロゲー、実物に慣れても別腹でエロゲーです‼」
「慣れ……」
　またもや虚無の思考時間か？
　……でも最近俺、普通に女の子に変身することに慣れて来ちゃってるんだよな……。精神に負担がかかってる気配なんてこれっぽっちもない。
　昨日も部屋で一人、ツインテールにしながらテレビを見たら面白いかな、と思って意味もなく変身してしまった。
　アルティメギルは別に現れなくていいが、テイルレッドには……

ツインテールには定期的になりたいのだ。

　やばいかな。

　慧理那は、納得できない、とトゥアールに食くってかかっていた。

「で、でも！　女性に慣れることが裸を見ることだなんて、短絡的すぎますわ！」

「何故です⁉　服を着た女性なんて、普段から見ているじゃないですか」

「でもでもっ……か、仮にも神聖な学まなび舎やで、みだりにこんな……！　年とし頃ごろの男の子に悪影響ですわ‼」

「それが駄目なんです‼」

「ひうっ……」

　白衣をマントアクションのように大げさに翻ひるがえし、トゥアールの怪演がヒートアップする。

「男性が思春期に女性の身体に興味を持つのは当然のこと。決して罪などではありません。それを周囲が悪し様に非難する浅慮こそが、罪なのです！　世のため人のため戦っている総二様に、無用な罪の意識を抱かせてしまうのです‼」

「そ、それは……」

「男が女の裸を見ることが罪なら、その裸そのものに変わってしまうことは、どれほどの大罪になるのですか‼」

　俺は別に女の子に変わっているわけじゃなくて、ツインテールに変わっているのだと、自分なりに納得してるつもりだったんだが……知らず知らずのうちに、トゥアールの言うように精神に負担がかかっているんだろうか。

「ホンットそうよ！　きっとそう！　テイルレッドのせいで、男としておかしくなってきてんのよ‼」

何(な)故(ぜ)か、急に愛(あい)香(か)もトゥアールを援護し始める。

「もちろん、私たちは学生。校内に不要なものを持ち込んではいけないという大原則だけを捉えれば、生徒会長である慧(え)理(り)那(な)さんの注意は正しいです。でも、ここはツインテール部。ツインテイルズの活動のため、ひいては地球の平和のため、エロゲーの一つや二つ、目を瞑(つぶ)ってくれませんか。いいですか慧理那さん！　地球の平和のため！　エロゲーが必要なんです!!」

ＮＧワードは、その人の好む事象とセットにして言うことで違和感を薄める。洗脳の常(じょう)套(とう)手段だ。

「地球のため……」

案の定、慧理那は見る見る勢いを失っていった。

「……それとも慧理那さん……男の子がエッチなことに興味を持つのはやだー、とか子供っぽいことを考えちゃうんですか～？」

「なっ！　し、失礼な！　わたくしだって、そういうことはちゃんと理解しています!!」

「ですよね～、同級生の私たちならともかく、年上の！　お姉さんの！　慧理那さんが、お子様みたいに騒いだりはしませんよね～」

「当然ですわ！　年長者ですもの!!」

トゥアールが不必要に煽(あお)るせいで、慧理那はすっかり冷静さを失ってしまっている。

「ですから慧理那さん、総(そう)二(じ)様の特訓の時だけは申し訳ないですが席を外していただけませんか。私たちも、世界のためとはいえ生徒会長に校則違反を堂々と見(み)逃(のが)して欲しいというのは、ムシがいいとわかっています」

女の子の裸に慣れることが、俺の特訓……。

本当に女の子の裸に慣れれば、俺のツインテールはさらなる次元へと進化するのだろうか？

　慧理那は首を振り、トゥアールに真っ向から反論した。

「いいえ、この部室ではわたくしは生徒会長である前に、テイルイエロー・神(しん)堂(どう)慧理那ですわ。高みの見物などできません、わたくしも観(み)束(つか)君の特訓に協力しますわ!!」

　──当然、生活態度のことで以前注意をしていた桜(さくら)川(がわ)先生が黙っているわけがない。

「貴様っ……さっきから黙って聞いていれば、お嬢様に何たる侮辱を！　許せん！　この婚(こん)姻(いん)届(とどけ)に判を押させてやろう!!」

　怒りをトゥアールに向けながらも、婚姻届を俺に差し出してくる。心と身体(からだ)を切り離して行動できる、この道のプロだった。

「俺、何回婚姻届もらえばいいんだ!?　その度にきっぱり断ってるでしょう!?」

「人の心とは移ろうもの。婚姻もまた、然(しか)り」

　強い。母は強し、と言うが、母になろうと願う女性もまた、ここまで強いのか。

「でも、尊(みこと)が一人の男性に二回以上求婚するのは、珍しいですわね」

「こいつ意志薄弱そうなので、ぐいぐい押せば最後には折れそうな気がして」

　自(みずか)ら鼓(こ)膜(まく)を突(つ)いてでも聞きたくないことを、しかと聞いてしまった……。

　特訓に協力すると宣言した慧(え)理(り)那(な)の決意は、固いようだった。

「わたくしも、えろげとやらを作りますわ!!」

「いや、さすがに慧理那さんだとタイトル前に『この作品に登場するのは全員一八歳以上です』と言い訳しても無理がありすぎますから……」

　トゥアールが、最後に残った良心を振り絞って慧理那を説得している。

「そうですねえ、慧理那さんが総そう二じ様にエロ本を渡して下されば、特訓も大きく進むと思うんですが……」

　――――一ひとつ欠片かけらも残ってなかった……。

「えろほんがあれば、観み束つか君の特訓に役立つんですのね!?」

「立たないぞ!?」

「それは困ります、何とかしましょう！　私に全部お任せください!!」

　涎よだれを垂らしながら俺に迫ってきたトゥアールを、愛あい香かが連続しすぎてげんなりした表情で引っ捕まえていく。

「ちょっとあんた、何恐ろしいこと言ってんのよ！　相手は会長なのよ!?」

「……いいですか、これは総二様にエロ本を読んでもらって、女の子の身体に興味を強めてもらう千載一遇のチャンスです」

「えぇ!?」

「私や愛香さんがエロ本を差し出しても、警戒してなかなか読んでくださらないかもしれません。けれど、憧あこがれの会長からのプレゼントなら、エロ本でも読まずにはいられないでしょう。総二様は、義理堅いですからね。とにかく、エロ本を読んでもらう──もっと言ってしまえば、女体を見てもらうことが大事なんです」

「むむ……」

「しかも……そうだ、そうですよ！　慧理那さんが周りからも目に見えてエロくなれば、縁談なんて全部吹っ飛びます！　家の風習を重んじる親御さんが、そんな娘を相手方に顔見せするはずがありません！　慧ぇ理り那なさんの窮きゅう地ちも救えて、全員万々歳な、完かん

璧ぺきな作戦です!!」

「何を相談してるんだ……？」
　部室の隅でひそひそと会話する二人も気になったが、それより、早速慧理那たち二人がショッピングの算段をつけ始めているのが不安だった。
「尊みこと……えろほんはどこで買えますの？　いつものヂャスコで買えまして？」
「いえ、おそらくショッピングモールのテナントでは、家族連れに配慮してそういう本の取り扱いはほとんどないでしょう。ここは、通販で購入してはいかがでしょう」
「いいえ駄目ですわ！　この手で直に購入して初めて、観み束つか君の特訓に誠心誠意助力できるのです!!」
「あ、あの、俺別にそんなの必要ないから……」
　やんわりと止めようとする間もなく、慧理那は胸の前で拳こぶしを握り、俺に言った。
「見守っていてください、観束君！　わたくし、えろほんを手に入れてみせますわ！　まだ新参者のわたくしがあなたたちと本当の仲間になるには、こうした小さなエピソードの積み重ねが重要なのです!!」
　会長の弾はじけるような笑顔と共に、ツインテールがふわりと舞う。
　断り、止めるのは簡単だ。だけど、このツインテールを否定することは、俺には出来ない……！　どうすればいいんだ!!
「尊。善は急げですわ！　さっそく、殿方のためになるえろほんを教えてください！　大人のあなたにしか頼れないのですわ!!」
「へっ!?　は、え、えーと…………お、おっぱいとか、いっぱい出

てるといいと思います……」
「そういう本なら普通、いっぱい出ているものと思っていましたが……違いますの？」
　二人のやりとりを見て、トゥアールが意味ありげに笑っている。
　何か、手のひらの上で踊らされているような気がするが、いいのだろうか……。

◇

「テスト明けの連休どうする？」
「俺、テイルレッドオンリーイベント行く」
「連休ったってお前、七二時間しかねーじゃん。録とり溜だめしたテイルレッドたんの映像消化するの、全然足りねーよ」
「どうすっかなー。ネットで、〝テイルレッドたんに斬られ隊〟のメンバー募集してんだよな～。よし、いっちょやってみっかな」
　酸欠になりそうな濃度の会話が、放課後の廊下に跋ばっ扈こしていた。総そう二じの苦悩が偲しのばれる。
　中間テストが迫っているというのに、今日も陽よう月げつ学園はほのぼの平和だ。
　そんな中、在籍するII□Ｃの教室で、慧え理り那なは自分の席に残り、物思いに耽ふけっている。
「かわいい……」
「きゃわゆい……」
「プリチーだわ……」
　慧理那のクラスメイトはほとんどが居残り、そんな彼女に釘くぎ付づけになっている。
　しかし、感想はもれなく幼な子を愛めでるものばかりだった。

既に下校したはずのクラスメイトたちも、あらためて廊下に並び、慧理那を見つめている。
今日は不可侵の生徒会室ではないため、ある意味オープンギャラリー状態だ。

「神(しん)堂(どう)さん、どうしたの？　溜(ため)息(いき)なんてついちゃって、悩み事？」
教室で、一人の女子が慧理那に近づいていった。
「はい。実は、親(しん)戚(せき)の男の子の誕生日に、えろほんを買ってあげることになったのですが……どういうものを買ってあげればいいか、わからなくて」

□□□□□□。

この陽月学園だけ、地球の自転から切り離されてしまったのではないか。
そう錯覚する程明確に、確かに実感できる長さ、時が止まった。
しっかりと考えたものだったのか、言い訳自体はするりと出てきたが、本当に隠さなければいけないものは全くボカしてもいないのがタマに傷か。
そして、時間の振り戻しのごとく、コンマ一秒のズレもなく、ギャラリーの全員が校舎を揺らすほどの絶叫を響かせた。
手近な女子クラスメイトたちは、地鳴りを響かせて慧理那の机の周りに殺到した。
「慧理那ちゃんっ、それは止めなきゃ駄目！」
「きっと慧理那ちゃんに似て可愛(かわい)い男の子だと思うけど、エロ本なんて見ていいはずがないよ‼」

「年上の人間がしっかり諭してあげないと!!」
「それは違いますわ」
　慧理那は、ピシャリと言い放った。
「男性が思春期に女性の身体からだに興味を持つのは当然のこと。決して罪などではありません。それを周囲が悪し様に非難する浅慮こそが、罪なのです」
　聖母を見た──。
　男子たちは無意識のうちに跪ひざまずいてしまいそうになっていた。
　自然と涙を零こぼす彼らの表情は、全てを赦ゆるされた罪人のように安らかだった。
　思春期の男子ならば等しく持つ、芽生え抑えられぬリビドーと、女性への背徳感のジレンマ。
　誰だれしも経験があるだろう。
　誰しもが感じたことがあるだろう。
　一人部屋にこもりいやらしい本に向き合う時、階下から聞こえてくる家族の談笑に感じる後ろめたさを。当然のことなのに、男ならば誰もがそうであるのに、しかし、白眼視されてしまうやるせなさを。
　仕方のないものと割り切るしかなかったそれらが全て、今、氷解したのだ。
　……その名言が、学園一の変人と評判の編入生からの受け売りだとも知らず。
「くうう、俺、この先どんな辛つらいことがあっても胸を張って生きていけるぜ……!!」
「ああ、慧え理り那な様に許してもらえたんだ、他の雑ザ娘コどもが何をほざこうが知ったこっちゃねえ!!」
　僕たちはエロくていいんだ。

雲を割り光が差し込み、天使の歌が聴こえる。
床に手をつき、夢破れた高校球児を思わせる熱き男泣きを見せる男子たち。心情は正反対といってよかったが。
「……ウザっ」
床に落ちたゴミを見るように彼らを一いち瞥べっし、女子たちは再び慧理那を潤んだ目で見つめ始めた。
今、自分たちは慧理那に窘たしなめられた……その事実が、逆に彼女たちを興奮させていた。
はあはあと息を荒らげている者までいる。
この学校は大丈夫だろうか。
「せっかくだから、皆さんにお聞きしていいでしょうか」
「えっ……!?」
「どんなものを買ってあげれば喜ぶかが分からないのです。大きなことを言っておいて恥ずかしながらわたくし、そういうものに疎くて……」
「それでいいのよ、慧理那は……そのままでいいのよ!!」
「しかしそれではみつ……ではなく、親しん戚せきの子が……」
取り巻きの少女たちは焦っているようだった。
愛すべき幼な子に、あまり汚れ知識を持って欲しくないと思っているのかもしれない。
そして皆弾はじかれたように男子の方を向き、
「こういうのは女の私たちが考えても詮無きこと！　男子に聞くのが一番よ!!」
「そうですわね、その通りですわ。あの、よろしければ、皆さんが普段どんなえろほんを読まれているか、教えて下さいませんか？」
楚そ々そとした所作で男子の方に向き直り、凄すさまじいことを言う慧え理り那な。

「「「ぅえぇええええええええええええええええええええええええええ!?」」」

　男子たちはユニゾンで絶叫した。

　この先どんな辛つらいことがあっても大丈夫、と言っていたが、今いきなり例外が訪れたのかもしれない。

「いや、それは、その」

「何というか、はは」

　しどろもどろになり、皆ちらちらと慧理那を伺う。

　慧理那の薄笑みは小こ馬ば鹿かにしたものではなく、彼女の優しさそのままに朗らかで、だからこそ余計辛い。

「い、いやあ、俺はせいぜいちょっとした水着グラビアを見たりはするだけで、そういうのはちょっと……」

　男子の一人がしれっと言うも、他の男子たちから烈火のごとく糾きゅう弾だんされる。

「嘘うそつくんじゃねえ！　てめえ、休み時間に美術の予習とかほざいてヌードデッサン集見てるだろ！　学校でそれなら家でなんてお察しじゃねーか!!」

　取っ組み合いの喧けん嘩かになりそうな男子たちに、慧理那はそっと歩み寄る。

「恥ずかしいかもしれませんが、どうかわたくしを助けると思って……駄目でしょうか？」

「ううっ……」

　俯うつむき加減に見つめられ、男子たちはじりじりと後退する。

　いっそ、儀式のために生きた人間の心臓が必要だから下さい、と言われる方がマシだ。

　自みずからの手で胸を穿うがち、絶命の瞬間まで笑ったままその心臓を差し出しただろうに。

「おおおおおおぉぉ俺は！」
　丸坊主の男子が、意を決したように声を張り上げる。
「俺は、もっぱら……漫画で……実写じゃなくて二次の方が好きなんだけど、頭身が小……」
　言い終えることも出来ず、その男は天上から差し込んだ光に包まれ、目を閉じた。
　あははうふふと賑にぎやかな笑い声を上げながら、小さな天使たちが舞い降り、彼の周囲を旋回し始める。
「いかん！　このままでは連れて行かれる!!」
「やめろ天使ー、見み逃のがしてやってくれえ!!　こいつはただ漢おとこであっただけだ!!」
　しかし慧理那は、頭の周囲にクエスチョンマークを浮かべるだけで、男一代決死の告白を活いかせそうにはなかった。
　奴やっだけを死なせるな、俺たちも続け、と男子が次々に性癖を吐露していく。
　そして、次々に力尽き、倒れていく。
　そんな身しん命めいを賭としたアドバイスにも、慧理那はただただ疑問符を浮かべるばかりだった。

　あの生徒会長が、エロ本を買おうとしている。
　どれだけ皆に愛される会長であっても、人の口に戸は立てられない。
　瞬く間に、噂うわさは校内中に広まっていったのだった。

◇

　日増しに露出の増える善いい沙すな闇あん子こ。部室でテレビをつけ、

彼女を見るのが日課になってきていたが……どうやら、目を引かれているのは、俺だけではないようだ。

　彼女の影響だろう、今日の愛香（あいか）は、赤いフレームの伊達（だて）眼鏡（めがね）をかけている。

　なるほど。眼鏡とツインテールは、なかなか合うものなんだな。

「浅はかですね～。私のような理系女子ならともかく、処刑女子の愛香さんが。プププ」

「そうか？　似合ってるじゃないか」

「ホ、ホント!?」

　素直な感想を言っただけなのだが、処刑モーションに入っていた愛香は、ぱあっと表情を明るくして、その動きを止めた。

「最近あんたそのアイドルよく見てるからさ、眼鏡もどうかなって……もらい物なんだけどね」

　逆に、含み笑いをしながら愛香を見ていたトゥアールが、血相を変えて立ち上がる。

「もらった!?　宇宙人からですか!?」

「どこまで脳がねじくれればそんな考えが浮かんでくんのよ!!」

　トゥアールはエア眼鏡を指でくいっと持ち上げ、難解な式の回答証明に入った。

「愛香さんにオシャレ眼鏡をプレゼントするなんて、『地球へ狩りをしに来た宇宙人が愛香さんの強さを讃（たた）えて勇者と認めて置き土産に残していった』と考えるのが妥当じゃないですか！　一分の隙（すき）もない、合理的な思考です!!」

「ごめんなさいねえお姉ちゃんからもらうって可能性が非合理みたいで!!」

「すいません間違えました愛香さん自身が狩猟民族でしたのあああああああああああ!!」

なんと、醜い争いなんだ……。

トゥアールも、たまには照れ隠ししないで愛香を誉めてあげればいいのになあ。

しかし、愛香がアイドルに影響されてオシャレなんて、俺でも初めて見たな。

それほど急激に、善沙闇子は世間への影響力を強めていっているのだ。

——何だろう。この感じ。

俺は違和感だけでなく、既視感まで覚え始めていた……。

◇

エメレメリアンは、己の好きなもののためには努力を惜しまない。

これは、嗜し好こうや趣味の心の力が結晶した生命体であることに起因するが、基本的に勤勉なことが彼らの美徳でもあるからだ。

「同志たちに先だって理解を求めようとしたのが、間違いであったか……」

オウルギルディの部屋には、売れ残ってイベント会場から搬出した同人誌のように、ダンボールが山積みになっている。

彼は仲間のリアクションの芳しく無さに嘆き、ポエムを配るのを諦めていた。

「ダークグラスパー様は作戦の一環として、着々と眼鏡属性グラスの拡散を成し遂げられておられるようだ……。さすがに首領様のお認めになった戦士、仕事が早い」

しかし、この程度で諦めるなら、一度失意の底へ落ちたオウルギ

ルディが、再び決起することはなかっただろう。
　自分に今一度火を灯ともしてくれた神詩ポエムに報いるため、彼は次の行動に出ることにした。
「ツインテールを奪うという至上命題さえ為せば、己の愛する道は許されるということ」
　リズムよく響く、優しい針縫ぬいの音。
　厚い布を繋つなぎ、身にまとう何かを、オウルギルディは作っているようだった。
「より多くの者にこの神詩ポエムを見せ、文学属性ブックを復権させてみせる……!!」
　命令を待たず、彼は、一世一代の行動に出る覚悟を決めていた――。

　一方、ダークグラスパーは自室で豪快に棚をひっくり返していた。
「メガ・ネ！　貴様、わらわのノートをどこへやった！」
「知らんわ、掃除した時いろいろ投げたかもしれへんなぁ。ちゃんと整理整頓せぇへんイースナちゃんが悪いんやからね!!」
「おかんか貴様ああああああああああああああああああ!!」
「ほら！　変身してるとすぐ悪い子になる！」
　甲高いが、ひどく年季を感じさせるメガ・ネプチューンの声。
　いつもの威厳など塵ちりと消え失せ、ダークグラスパーはおろおろと慌て始める。
「完全に捨てたのならよい！　しかし、よもや誰だれかの眼めにでも触れてみよ！　わらわの乙女の純情が転じた淫いん心しんの記録じゃ、ここの馬ば鹿かどもなど目にしただけで果ててしまうぞ！」
「それはないわ、絶対」

　ゴミ捨てが完璧(かんぺき)でなかったおかんのおかげで、一人の戦士を果てさせるどころか回春させてしまったが、それは彼女の知るところではなかった。

キャラクター名鑑 011

善沙闇子（いいすなあんこ）



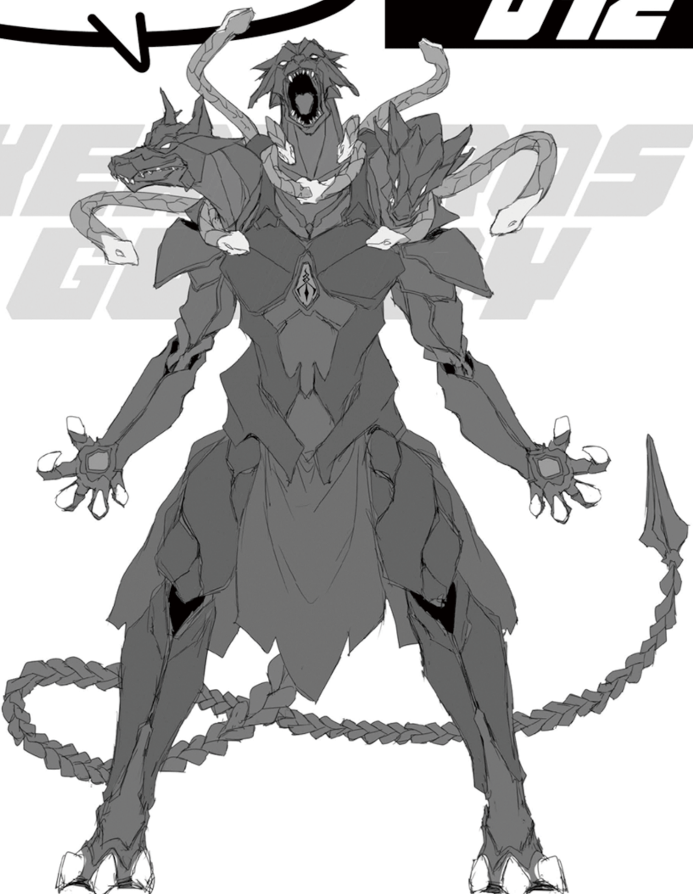
DATA

性別：女
年齢：12歳
誕生日：非公開
身長：150㎝
体重：43㎏
B71・W53・H74

彗星の如く現れた新人アイドル。猛烈な勢いで人気を獲得し、デビューからひと月ほどで大規模単独ライブを開くに至る。トレードマークは眼鏡で、定評のあるトークスキルもほぼ眼鏡の話題ばかり。「眼鏡を愛する者には至上の愛を、眼鏡を軽んじる者には非業の死を」と公言してはばからない。一体、彼女は何者なのだろうか……？

ケルベロスギルディ

キャラクター名鑑 012



DATA

身長：289㎝

体重：345㎏

属性力：三つ編み属性（トライブライド）

幹部エレメリアン。本人は隠居を望んでいたのだが、ダークグラスパーが総二たちの世界の侵攻指揮官に着任したことで無理矢理駆り出された。彼女とはこれまでにも何度かコンビを組み、その絶大なプロデュース力を如何なく発揮してきた。三体分離能力を持ち、戦闘力も高い。オネエな本性を部下や同僚に知られることを恐れているが、彼の武勇と一緒に伝聞され、バレバレである。

第三章　汝なんじ、ツインテールだから結婚せよ。

「夏服ですね――――――――っ！」

「そうね」

　６月。

　今日から陽よう月げつ学園も衣替えだ。

　ブレザーを脱ぎ、半袖そでシャツとなった素肌に、初夏の風が心地いい。

　そんなちょっとした風情を果たして感じているのかどうか、愛あい香かとトゥアールは正反対のテンションで通学路を歩いていた。

「つーかあんた、暑くないの？　年がら年中白衣羽は織おってて」

「全自動温度調整機能がついてますから、中は涼しいんですよ？　冬はあったかいですし、夏はヒンヤリです」

　そうまでして白衣を頑かたくなに着続ける理由は何なんだろうか……。

「やっぱり、若い女たるもの、肌は出せば出すほどいいですよね！　水着で登校してもいいかなってくらいなんですけどねー‼」

「ふーん」

「テンション低いですね愛香さーん！　わーい愛香さんの頭におっぱいのっけちゃえー」

「おのれが高すぎるんじゃアホオオオオオオオオオオオ‼」

　また始まった……と思った瞬間、俺は驚くべき光景を目にした。

　愛香の拳こぶしが空くうを切り、トゥアールは悠々と無防備な愛香の頭に胸をのせたのだ。

「な、何ですって……⁉　あんた、また何か発明道具使ったわ

ね!?」
「フッ……腰が入っていませんよ愛香さん。今までの愛香さんの攻撃に慣れた私に、そんな雑なパンチなど通用しません。もちろん、発明を使うまでもなく」
「ッ……!!」
　怒りで我われを忘れたわけでもないのに、愛香がフォームを乱した……!?
　そして、トゥアールはそれを見抜いたっていうのか!?
「教えましょう。愛香さんは、夏服で胸を張ることを極端に恐れているのです。汚れなき新雪のように広がる胸部が目立ってしまうから。今はもう、ブレザーの加護から解き放たれてしまっていますからね……」
　……ブレザーに、加ま護もられてたかなあ……。
「な、何憐あわれんだ目で見てんのよ！　ハンバーグにされたいの!?」
　愛あい香かが凄すごんでも、トゥアールは笑顔のままだ。
　何てこった、夏服にチェンジした途端、これほどの格差ができあがってしまうなんて！
　今の愛香は、ライオン相手に虚勢を張る子猫のように憐れだ……!!
「さあ総そう二じ様、どうです、私の夏服は!?」
「トゥアール、お前意地でも白衣脱がないんだな……」
　さあ、と言われても、トゥアールの見た目は全く変わっていない。
　さっき、肌を出せば出すほどいいとか言っていた気がするが、上から白衣を羽は織おっているので上半身がほぼ白一色になった以外、何も変わっていないのだ。

「んもう、よく見てください！　白衣の透過度が三倍上がって、お肌スケスケですよ!!」
「いや、脱げよ!!」
「えええええええええええええええええええええええええええマジですかやばい予想外すぎて心の準備がよしできたあああああああああああ!!」
　白衣を脱げと言っただけなのに、トゥアールは目を血走らせて雄お叫たけびを上げた。
　ホームランを見届け、出塁しようとするバッターが悠々と投げ捨てるバットのように、三倍透けているらしい白衣を投げ捨てるトゥアール。
「□□□□!!」
　半ば放心状態だった愛香はそれを見て覚かく醒せいした。
　白衣が地面に落ちる前に掴つかみ取って疾走し、驚いて振り返るトゥアールの顔面に巻き付ける。
「モゴ──!!」
　確かに透過度は高い。透け透けだ。
　ややもすれば忘れがちな、恐ろしいまでの美少女であるトゥアールの顔面が無惨に突っ張り、ストッキングをかぶった銀行強盗のようになってしまっている。
「いいわ、トゥアール。あたしは戦う。夏という忌いま々いましい季節とも、自分の胸ともね……」
「コキュ──ッ！　コキュ────────ッ!!」
　これ以上ないくらいダイレクトなトゥアールの訴えも聞かず、愛香は戦と友もに感謝の言葉を送った。
「あたしの拳こぶしが鈍ったのを戒めてくれたのには、感謝するわ」
「ケッチューサンソノードー!!」

　巨乳ラージ・貧乳属性スモールバストを備えた怪物たちとの戦いは、愛香を成長させたのだろうか。
　決然とした顔つきで、白衣で縛ったトゥアールを引き摺ずっていく愛香は、今度こそ、堂々と胸を張っていた。
　それでいいんだ、愛香。
　平らな胸は目立ってしまっても……ほら。
　ツインテールは、夏風に凜り々りしくそよいでいるぜ。

「お、おはようございます、観み束つか君。津つ辺べさん、トゥアールさん」
　校門の近くまで来たところで、慧え理り那なと会う。
「おはよう……って、えりっ……会長！　すごいクマだぞ!?」
　他の生徒の前なので、咄とっ嗟さに呼び捨てではなく会長と言い直す。
「ええ、インターネットで調べ物をしていて、少し寝るのが遅くなりましたわ」
　慧理那は、目の下を真っ黒にし、若干やつれていた。
「でも、家のパソコンではフィルターがかけられていて、どんなに検索方法を変えても、えろほんには辿たどり着けませんでしたの……」
　そういうことには厳しそうだもんな、慧理那の家。
「会長……言ってくれれば、そのぐらいあたしが調べたのに」
「ありがとうございます、津辺さん。でも、自分の力でやり遂げたいのですわ」
　不安そうに見つめる愛あい香かにも健けな気げに笑顔で返し、慧理那は欠伸あくびを手で隠した。
　慣れてしまったのか、捕獲された宇宙人でももう少し丁重な扱い

を受けるだろう、という状態で引き摺ずられているトゥアールには
ノータッチノールックだ。
「はっ……」
　俺は、慧理那目掛け走ってくる影に気づき、咄嗟に前に出た。
「ウー、ワンワン、キャンキャン!!」
「……きゃっ！」
　慧理那にしがみつかれ、俺も、ツインテールを庇かばうように腕で抱き込む。
　飼い主の手を振り切って走ってきたらしい大型犬が、慧理那に突っ込んできたのだ。
　そうだな、確かに野生動物ならば、本能の赴おもむくままに、このツインテールを求めてしまっても無理はない。俺は理性ある人類として、今の犬を反面教師としなければならないだろう。
「…………あ、ごめん」
　再び走り出した犬を見送った俺は、慧理那を抱きしめていたことに気づいて手を離すが、慧理那はしな垂れかかったまま離れようとしなかった。
「会長？」
「はぁ、はぁ……」
「会長、息荒いぞ!?」

「うがー何なのよあれ――――――――っ!!」
「うおっ、女生徒が電柱を砕き折らんばかりに蹴けっているぞー!!」
「やめてもらえますか愛香さん、普段そのキックを受けている身としては破壊力を具体的に見せられて我われに返りたくないんですやめてもらえますか!!」

　背後からコンクリートの砕けるような音が聞こえるが、俺には慧(え)理(り)那(な)が気掛かりだった。
「やっぱり、無理しているんだろ!?　エロ本なんて何でもいいよ、ちゃんと休んで!!」
　それでも慧理那は、俺を見上げ──
「昔は、動物に無(む)理(り)矢(や)理(り)首輪をつけるなんて可哀(かわい)想(そう)と思ったものですけれど……今なら、ワンちゃんの気持ちがわかります」
　──あの時と同じ、とろけた表情になった。
「ご主人様に首輪をつけられるって、何だか羨(うらや)ましいですわ……。わたくしもつけて欲──」
　固まった俺を見て正気に戻ったのか、ぱっと離れ、もじもじと手を擦(こす)り合わせる慧理那。
「や、やだ、わたくしったら……何を言っているのでしょう。忘れてくださいまし、観(み)束(つか)君」
「そうだな……言われなくても完全忘却スタンバイＯＫだったけど、許可が出たことだし遠慮なく忘れるよ……」
　不意に、視線を感じた。
　登校中の生徒たちが足を止め、俺たちをじっと見ている。というか、ほとんどが好奇心からではなく、憎しみのこもった睨(うら)み顔だ。
「あいつ、会長とやけに親しげだけど、何者だ!?」



「おかしいと思ってたけど……まさか、あの男子が慧え理り那なちゃんにエロ本を買えって吹き込んだんじゃ……!!」

　皆、つかず離れず、遠くからぶつぶつと怨えん嗟さの声だけを呟つぶやくので、かえって不気味だ。

　俺はツインテイルズの仲間として、慧理那と普通に接してきたつもりだった……けど。

「……ごめん、もしかして、俺と一緒に登校したら、迷惑だったんじゃ……」

「？　どうしてですの？」

　嘘うそ偽りのない、優しいツインテールを見て、俺も負い目が消えた。

　……そうだよな。そんな卑ひ屈くっに思う方が、慧理那への侮辱になる。

　テイルレッドになっている時のギャラリーの好意的な視線と相殺されて、プラマイゼロでちょうどいいだろう。

「おかしいですよ！　私はさらっと回想する程度の他愛たわいなさで流されたのに！　美少女の突然の転入、しかもクラスの男の子の家に同居しているという衝撃の告白！　総そう二じ様が男子に囲まれて嫉しっ妬とされて……悔しそうに歯は噛がみする愛あい香かさんをおかずにお昼を食べる……！　教室がパニックになる一大イベントだったはずなのに、すっごいスルーされたんですよ!?　練りに練ったシナリオが！　私のドリームスクールデイズが！　何な故ぜ、私以外の誰だれかで再現されているんですか!?　そこにいるべきなのは私なんですよ!!」

「厚かましいわねあんたでもないわよ！　こういう時にしか役に立たないんだから行きなさい！　脱ぐなりエロいこと言うなりして注意を引き付ければいいでしょ!!」

　トゥアールたちが何か叫んでいる……と思って後ろを見ると、さらに後ろで、恨めしそうにこちらを見る桜さくら川がわ先生の姿があった。
「……………………裏切りは許さないぞ、観み束つか……」
　一体何の誓いをしたのかまるで記憶にないが、雑踏に紛れ、なぜかその呟きだけは、耳元で言われたように強く響いたのだった。

　　　◇

　その日の昼休み、俺は一人、桜川先生に呼び出された。
　今朝の恨めしそうな目もそのままに、桜川先生はとんでもないことを言った。
「今日の放課後、お嬢様がエロ本を買いに行かれる。護衛を頼まれてくれんか、観束」
「ご、護衛？　構いませんけど……」
「校内中で聞き込みをして、ようやくエロ本の品揃えのいい書店を知ったそうだが、ついてこないで欲しいと言われてな。とりあえず、すぐ駆けつけられる距離から見ていてくれ」
　信用されるのはいいけど、お嬢様の護衛って、素人に務まるものなのか？　誘ゆう拐かい犯が急に現れたりしたら、変身しなきゃ対処できないぞ。
「俺が護衛をしてるあいだ、先生は何してるんですか？」
「私は部下のメイドと一緒に、近い縁談をちょっと妨害工作しなければならん」
　護衛を俺に任せざるを得ないほど、事態は切迫しているのか。
「大丈夫ですか？　暗躍してるのがバレたら、クビにされたりは……」

「フッ、その時はお前にもらってもらうさ」
　う、何かちょっとかっこいい……。
　桜さくら川がわ先生も慧え理り那なのために身体からだを張っているんだ。
　俺もせめて、エロ本を買って俺たちとの距離を縮めるという、慧理那の願いだけは叶かなえてやりたい。護衛役、仰せつかろう。
「……随分、お嬢様と仲がいいみたいだしな。お前が護衛に適役だろう。任せたぞ」
　何な故ぜかまた拗すねているように見える桜川先生は、そういえば、と手を叩たたいた。
「鉄砲玉として津つ辺べを借りていくぞ。もし荒事になったりしたら、私の部下が徒党を組むよりも役立ってくれるだろう」
　妨害工作じゃなく純粋な破壊工作特化でしか活躍できないと思うので、それはやめた方がいいと思う。

　念のため私服に着替え、目深に帽子をかぶった俺は、電柱から電柱へ、素人丸出しの身のこなしで渡り歩く。
　約束通り放課後、慧理那を尾行している。
　最近国語の授業中に気づいたのだが、「～している」って言葉、語感がよくて好きだ。
　細心の注意を払って後を尾つける。到着した目的地の書店は、年季の入った個人店だ。
　店内に入り、棚を一つ一つ丁てい寧ねいに見ている慧理那を見て、まずはほっと一息ついた。
　しかし、油断はできない。ドラマのように、黒塗りの車が突然店先に止まりはしないか心臓をバクバクさせながら、俺は慧理那の買い物が終わるのを固かた唾ずを呑のんで待った。
　桜川先生の方は、バレずに事を運べているだろうか……。

「でも、慧理那……俺のために、あそこまでしてくれているんだよな……」
　俺も恥ずかしがるのはやめて、慧理那がエロ本を買うのを見守ろう。

「……ん？　何だあれ？」
　慧理那のいる書店と道を挟んだ反対側の歩道で、ご当地ゆるキャラのような丸っこいフクロウの着ぐるみが、通行人に何かを配っていた。
「詩集だよ～とっても素敵な詩集だよ～現代人の聖典だよ～」
　詩集か。何でまた。
　特に気にせず慧理那の方へ向き直ろうとした俺は、とんでもないものを目撃した。
　通行人が途切れた瞬間、フクロウは着ぐるみの頭を外したのだが……中からさらに、フクロウの頭が現れたのだ!!
「――――エレメリアン!!」
　フクロウ頭は、誘ゆう蛾が灯とうに群がる虫のように、ふらふらと慧ぇ理り那なの方へと歩いて行く。
「おお、何という素晴らしき光景……。目に見えて才女なツインテールが、書店で真剣に本を選んでいるではないか!!」
　テイルブレスの効力で、その強力なツインテール属性を探知されることがなくなった慧理那が、今度はこうして偶然発見され、狙ねらわれるなんて……。
　この期に及んで、怒りは湧わかない。ただ、頭の中が驚くほど鮮明クリアーになっているのが分かる。
　俺は立て看板の後ろに身を躍らせると、ブレスを胸の前にかざした。

「……テイルオン……!!」
　変身し、一足飛びに背後からエレメリアンに掴つかみかかる。
「ぐあっ！」
　エレメリアンが持っていたカゴが落ち、中身が歩道にバラ撒まかれる。
　一瞬慧理那がこちらを振り返ったが……その前に、俺はエレメリアンと共に、路地裏へと転がり込んでいた。
「……テ、テイルレッド！　何な故ぜここに!!」
　慧理那が気のせいだと判断して再びエロ本を探し始めたのを見届け、俺は丸いフクロウの前へと歩み寄る。
「お前の相手はこの俺だ」
「ぬ、ぐ？」

「──慧理那がエロ本を買うのを、邪魔させはしない……!!」

　不意打ちを受けたダメージのせいだろうか。俺の言葉が聞こえてか聞こえないでか、エレメリアンは頭を押さえながらよろよろと立ち上がる。
「馬ば鹿かな……私は極限まで気配を殺し、木の葉の如ごとく移ろいながら事を運んでいた……それを即座に感知するとは、さすがはテイルレッド……恐るべき幼な子よ!!」
　買い被かぶられているようだが……俺がこいつを発見したのは偶然だ。
　だがそれは、慧理那を守るための必然だったのかもしれない。
　それに……今日の俺は、慧理那の護衛だからな。
「我わが名はオウルギルディ！　滅びゆく属性を守るため、再び戦場に馳せ参じた老兵!!　我が文学属性ブックの未来のため、この身が燃

え尽きるまで戦おう!!」

「滅びゆく属性を守るだと……!?　守るものがあるのは俺も同じだ!!」

　リボンを弾はじき、ブレイザーブレイドを出現させる。

　エロ本を買う少女を守るために、命を懸かけて戦う……。理解できない、と言われるかもしれない。

　だが、俺たちの戦いは、これでいい。

　元々、声援や名誉のために戦っているわけじゃないからな。

　誰だれの目にもつかない路地裏、廃はい墟きょ、人里離れた山間。

　スポットライトの下でも、フラッシュの瞬きの中でも、ギャラリーの声援の前でもない。

　こんな寂しく世界から切り取られた場所こそが、俺たちの戦いに相応ふさわしい。

「非日常に巻き込まれたことにさえ気づかず、日常を送り続ける……。俺は、そんな風にみんなの心を守りたいんだ!!」

　だから……安心してエロ本を買ってくれ、慧え理り那な!!

「ならば、その思いの強さが勝敗を分かとう!!」

　オウルギルディは三メートルほど飛び上がり、肩にあるバズーカのような砲塔を手で動かして俺に照準を合わせた。

　発射された弾丸をブレイザーブレイドで斬り落とすが、弾丸は大きく餅もち状に伸びて腕を絡からめ取り、壁に凝着した。速乾性の接着剤のようなものだ。

「くっ……鳥のくせにトリモチかよ!!」

　ものすごい粘着力だが、貼はり付けられたのがブロック塀で幸いだった。

　俺は力尽くでブロック塀を砕き、トリモチでくっついた箇所ごと引き抜いた。

「ぬう、ダイナミックな幼女よ!!」
　腕にブロックを引っ付けたままオウルギルディに斬りかかるが、横膨ぶくれな体型に似合わない素早い動きで上昇回避される。
「テイルレッドよ！　分かってはくれぬか！　世界には、ただ滅びを待つだけの悲しき属性が数多く存在する！　私たちは、それを守りたいのだ！　今ならばわかる！　ダークグラスパー様もまた、同じ思いでこの世界へ参られたのだと!!」
「結局は奪うくせによく言うぜ！　滅ぶだって!?　人間の本離れでも憂いてんのか!?」
「いいや違う！　質の問題だ！　どの世界でも同じなのだ！　科学の進歩と共に、利便の発達と共に、消えゆくものがある！　純なる文学を愛する心も、その一つなのだ!!」
　急降下し、足の鋭いかぎ爪づめで攻撃してくる。
　俺はブレイドで斬り払い、再び空へと逃げたオウルギルディを見上げた。
「質……？」
「元来文学とは、無限の想像力を養う母であったはず！　文字に秘められた広大な世界を描き、自身も世界と一体となる……それが文学なのだ!!　それを愛する者が美しいのだ!!」
　ホッピングのように、俺を蹴けりつけ、その反動で宙に舞い戻り、間髪容れず攻撃してくるオウルギルディ。その面には、必死さがみなぎっていた。
「それがどうだ！　今や小説と言えば、肌色の多い少女が大写しになったものばかり……これを文学と呼べるのか!!」
「誰だれだって、絵があった方が見やすいだろうが！　俺なんて、パッケージにツインテールの描いてある漫画か小説ばっかり読んでるぞ!!」

「それはテイルレッド、お前がまだ幼いからよ。子供が文学に触れる入り口としての、絵画の有用性は否定せぬ！　だが、それだけでは豊かな想像力が育はぐくまれぬのだ！　いつしかお前も、文字を通して頭に見えるツインテールの素晴らしさを知るだろう!!」
　俺の背後に回ると、オウルギルディはトリモチを背中に目掛け発射した。
　回避しようとした瞬間、まるで鳥のフンのように垂直に落とされたトリモチとの挟み撃ちになり、俺は首から下を繭まゆのように固められてしまった。
「フッ……これが年寄りの戦い方よ。熱く、前に出るだけでは戦いには勝てぬぞ!!」
「いつにも増して、押しつけがましい敵だぜ！」
　属性の講釈の次は、戦い方にまでダメ出しかよ。悪いが、簀す巻まきならもう飽きてんだ！

「俺は想像するより、この目で直じかにツインテールが見てえんだよおおおおおおおおおお!!」
　猛たける心と共に、全身から炎を噴き上げ、絡からみついているトリモチを全て蒸発させた。
「うおおっ!?」
「何が本当の文学だ！　それを決めるのはお前じゃない！　この世界に住む人々だ！　そんなに想像で全部済ませたいなら、文字じゃなく白紙でも見つめてやがれ!!」
　身体からだから火炎をほとばしらせたまま、上空のオウルギルディに向けブレイザーブレイドを構える。
「完全解放ブレイクレリーズ!!」
　オーラピラーを投げつけ、すばしっこい鳥を鳥かごに閉じこめ

る。
「グランドブレイザ――――――――――ッ!!」
「うおあああああああああああああ！」
　伸長したブレイザーブレイドに斬りつけられ、オウルギルディが落下する。
「お前がいろいろとこだわりがあるのはよおくわかった！　けど俺が心に描くのも、育んできた想像力も！　全てはツインテールだ！　ツインテールが、俺の文学だ!!」
「さ、さすがだテイルレッド……そうまで断じられては是ぜ非ひもない！　私の負けだ……!!」
　いくら路地裏っていっても、これだけバカスカやってりゃ、そろそろ人も集まってくるだろう。
　目立たないように、通りの様子を窺う。
　慧ぇ理り那なは、ちょうど書店から出て来るところだった。
「……エロ本は、ちゃんと買えたかな……？」
「!?　い、今……何と」
「エロ本だ。あの子は、エロ本を買いに来たんだ」
　焼け焦げた身体からだで息も絶え絶えのオウルギルディは、羽根を撒まき散らしながら絶叫した。
「エ……エロ本だとおおおおおおおおおお!?」
「だから、最初からそう言ってるじゃないか」
「馬ば鹿かな……あれほど聡そう明めいさを宿したツインテールを持つ少女が、日も高いうちから堂々とエロ本を買うなどと！」
「言っただろ。お前の理想を押しつけるな、ってな。ま、理想に関しちゃ俺も人のことは言えないけどな……」
　こんなツインテールが好き、あんなツインテールが好き、という理想は、いくつもある。

こいつの場合、その理想の押しつけが、ちょっと暴走気味だったってことだ。

「テ……テイルレッドよ！　よく憶おぼえておけ！　私が死ぬのではない!!」

オウルギルディは、全身をスパークさせながら両腕を掲げ、天を仰いだ。

「文学が死んだのだァ――――――――――――ッ!!」

今いま際わの際に壮絶な言葉を残し、オウルギルディは爆散した――。

属性玉エレメーラオーブ・文学属性ブックを回収し、変身を解除する。

歩道に落ちていた、あいつが配っていた本を拾い上げた。

コピーした紙を製本した、簡単な冊子だった。

「聖典とか言って配ってやがったな……。何が書いてあるんだ？」

何気ない好奇心から、ページを捲めくる。

「…………………………………………………何だこりゃ」

最初は、幼児が書いた作文かと思った。

しかし、この墨汁が和紙にじわじわとにじんでいくようなどす黒い怨おん念ねん……とても子供のそれではない。つい最近、これと似た雰囲気を持つ少女を一人知ったが、関係ないと思いたい。

「オウルギルディ……。これが、お前の愛した文学なのか……？」

空虚な風が心に吹いた。

生きている限り、何かを愛し、そしてそのために戦う。あいつも、自分の愛に殉じたのだと信じたい。

「やっぱり、観み束つか君ですわ」

「うおわっと！　え、慧え理り那な、偶然だなぁ、こんなところで」

文学を飛び越え哲学に思いを馳せていた俺は、慧理那が俺の姿を

見つけて近づいてきていたことに、まったく気づかなかった。いけない、護衛メインのほうを疎おろそかにしてしまっては。
「ちょうどよかったですわ。実は、あなたに謝らなければいけないことがありますの」
　慧え理り那なは悲しげに俯うつむき、ツインテールを震ふるわせた。
「……えろほん、買えませんでしたわ。一八歳以上でなければ買えないと、知りませんでしたの」
「え」
　当たり前といえば当たり前な結末に、俺は一気に脱力したのだった。

◇

「面めん目ぼくありませんわ……」
　次の日、部室に来て早々慧理那はみんなの前で頭を下げた。
　慌てて頭を上げてもらうが、慧理那は納得していないようだった。
「わたくし……守られてばかりで、その次は力をただ与えてもらっただけですわ。皆さんに何も恩返しが出来ていません。だからせめて、と思ったのに……不ふ甲が斐いないですわ」
　俺はそっと、慧理那のツインテールを手の平で掬すくい上げた。
「慧理那。俺たちはもう十分、慧理那のことを認めてるよ。それでも距離を感じているなら、ツインテールを思い出して。これがいつも、俺たちを繋つないでくれてるだろ？」
「……み、観み束つか君……」
「会長────────────っ!!」
　俺を押しのけるようにして、愛あい香かが会長に抱きついた。

「つ、津っ辺べさん!?」
「ワタシタチ、トモダチ！　ナカヨシ!!」
　野性に返りすぎたのかと心配してしまうほど、コミュニケーションがカタコトになってしまっていた。
「そーじにばっかり頼らなくてもいいからね！　あたしだっているんだから！」
「ありがとうございます、津辺さん！」
　そしてトゥアールは、白衣のポケットから箱を取り出し、慧理那に手渡した。
「これは……？」
「トゥアルフォン。私たちの連絡端末です。慧理那さんの分ができましたので、お渡しします。これを、仲間の証あかしとして受け取っていただけますね？」
「トゥアールさん……！　皆さん、ありがとうございます!!」
　慧理那はエロ本を買えなかったけど、その努力が、俺たちの絆きずなを深めてくれた。
　一件落着、ってところかな。
　桜さくら川がわ先生が、物欲しげな眼めでトゥアールを見ていた。
「おいトゥアール、私の分も作ってくれよ」
「尊みことさんの分が何な故ぜ必要なんですか!?」
「仲間外れにするなよ、顧問だろ!?　年取ると些さ細さいなことで孤独感感じて辛つらいんだぞ!?」
　どんどん寂しがり気質な本性が明らかになってきた桜さくら川がわ先生を余よ所そに、慧え理り那なは噛かみ締めるように大切に抱きしめていた箱をやっとで開封し、中から端末を取り出した。
「わたくしたちの、仲間の証あかし──」
　慧理那は万感の思いをこめるようにゆっくりと、トゥアルフォン

の起動ボタンを押す。

『――――津っ辺べさんって、胸が小さいですわね！』

　設定されていたデフォルトの起動音で、全てが台無しになった。

◇

　先日の衣替えに加え、来週から中間テストなのもあり、一時限目は全校集会。
　壇上で凛り々りしく演説する慧理那の勇姿ツインテールを見られると思うと、段取り悪く長々続く教師たちの注意事項も、全く苦にならない。

「さて、衣替えの時期ともなれば、結婚したいと思う者も出てくることだろう。どうだ、ここに婚こん姻いん届とどけがあるが」
「メイド長、そろそろ……！　慧理那様のご講話のお時間が！」
「いや、そろそろってまだ十秒も喋しゃべってないだろう！　あ、こら離せお前ら、私はまだ――」

　部下のメイドさんたち数人に引き摺ずられて、桜川先生が袖そでに引っ込んでいく。
　気持ちも新たに節度ある学園生活を、と注意があった直後、節度を大気圏外まで遠投したスピーチを教師が行うという不祥事もあったが、それも些細なことだ。
　いよいよ慧理那の番になり、周囲の空気も変わる。今日はやけにざわめきが大きいな……と思った直後、俺は心臓が止まるほどの衝

撃に襲われた。
「ッ……な……あ……」

　会長が……
　慧理那が……!!
　ツインテールじゃ……なくなってる――――。

　まさかこの前、自分がエレメリアンに狙(ねら)われたことに気づいていたのか!?
　ツインテイルズになっても変身前に狙われるなら、変身前には解(ほど)いてしまえ、って思ったのか!?
　いつ如(い)何(か)なる時も美しくなびいていたあの高貴なツインテールが、解かれ、下ろされ、普通のストレートロングになってしまっている。
「あ、あの……何か、おかしいでしょうか？」
　慧(え)理(り)那(な)が、照れくさそうに手の平で髪を掬(すく)い上げる。
「そ、んな……」
　大勢の生徒の只(ただ)中(なか)だということも忘れ、俺は床に力無く膝(ひざ)をついてしまった。
　何があったんだ。
　トゥアルフォンを受け取って……俺たち、また一つ、絆(ツインテール)を深められたと思っていたのに……!!
　あれだけ何度も怪物に狙われれば、当然、いつでもこの可能性はあった。
　それでも、と思っていた。
　慧理那のように、強く正しい心を持った人なら、決して怪物の脅しになど屈しないと。

　だが、それは俺の傲ごう慢まんだった。身勝手な思い上がりだったんだ。
「くそおおおおお……！　俺は、俺は大切な髪ひ型とを守れなかった……!!」
　俺は、振り上げた両の拳こぶしを、床に叩たたきつけた。



よく磨かれた板張りの床には、当然傷一つつかない。
これが、俺なんだ。変身しなければ、仮(かり)初(そ)めのツインテールにならなければ、あまりにも無力な存在。何の取り柄もない、普通の男子高校生なんだ。
それでも俺は、自分がツインテールになれたと信じていた。
せめて心だけは、ツインテールを名乗るにふさわしい男になれたと思っていた。
それがどうだ！
ツインテールを守れなくて、何がツインテールだ!!
「おい、観(み)束(つか)がまたおかしなことになってるぞ」
「会長の髪型が変わったからじゃないか？　なんか、いよいよツインテール好きをこじらせて、ツインテール部を作ったって噂(うわさ)だし」
音が聞こえない……。世界から、色も、音も、何もかもが失われてしまったようだ。

「慧(え)理(り)那(な)」

喉(のど)自慢が、腹から振り絞った声よりも遥(はる)かに通る、穏やかなその美声を耳にしたその瞬間。
危うくで全てを虚無に溶かされ、抜け殻(がら)になる直前だった俺の全身は、強大なツインテールの気配に貫かれていた。
ほとばしる電気に筋肉を強引に操られたように、自分でも驚くほどの速さで立ち上がる。
会長の立つ壇上に、見知らぬ和服の美女が、苛(か)烈(れつ)なまでの迫力をまとって登壇していく。
だが、彼女に見覚えがなくても、彼女のツインテールには見覚え

があった。
　──高貴なる、天上のツインテールを。
「下がりなさい、慧理那。今のあなたに、生徒の長(おさ)として説する資格などありません」
「お母様！」
　会長の母、それはつまり……
　神(しん)堂(どう)慧(え)夢(む)──陽(よう)月(げつ)学園理事長、その人だ。
　彼女は、会長をそのまま大人にしたような、圧倒的な風格を漂わせている。
　そのツインテールまでもが、昨日までの会長に生き写しだ。

「理事長、ツインテールにしてる～。テイルレッドの影響かな？」
「意外とかわいーとこあるんだね！」
「うーむ、あのギャップがたまらん……」
　周りでは理事長を初めて見た一年女子がざわめき、男子がときめいているが、的外れな意見ばかりだった。
　ツインテイルズの影響でツインテールにした……⁉
　──違う！
　みんなには分からないのか！
　あれは、昨日今日したような、付け焼き刃のツインテールじゃない……！
　幾年月を共に生きた、理事長の伴(はん)侶(りょ)だ。
　例えば。ピラミッドを写真越しに見たところで、そこに秘めた年月を感じ取れはしない。
　しかし、実際に間近で見て、手に触れた時。積み上げられた石の重みが。数が。大きさが。遥(はる)か彼方に置き去られたはずの歴史を呼び起こし、魂を揺さぶる。

　理事長のツインテールは……ピラミッドなんだ。
　誇り高く、ツインテールとしての自負と共に歩んできた生涯。
　積み上げられたピラミッドの石のように、蓄積された世界の記憶。
「すごい……!!」
　網もう膜まくを通して、理事長の人生を俺は知る。
　やはり、ツインテールはツインテールに勇気を与える。
　勇ブレ気イブじゃない、勇気ツインテールなんだ!!
　俺も……俺のツインテールも、慧え理り那なに再び勇気を与えられないだろうか。
　この場で変身は出来ない……だけど、慧理那に届くように、ツインテールへの思いを高めることは出来るはずだ!!
「はあああああ……!!」
　俺は静かに闘気をみなぎらせ、ツインテールを思い描いた。いつか、生身の姿でも、ドラグギルディのようにツインテールを創り出すことが出来るだろうか……。
　すすり泣きの声が聞こえ後ろを見ると、愛あい香かも肩を震ふるわせ、頬ほおに涙を伝わせていた。
　そうか……流石さすがだな、愛香。お前にも見えたんだな、あの悠久の時と空きが。
　ああ、もちろんお前のツインテールも、慧理那に勇気を与えられるはずさ！
「あたしが……あたしがもっとしっかりしてれば、そーじはあそこまでの変態には……」
「愛香、どうしたの愛香!?」

　咎とがめるように厳しい視線を送る理事長を、しかし、慧理那は

真っ向から見据えていた。

　その近寄りがたい凄そう然ぜんとした空気に、生徒も、教師も皆一様に押し黙っている。

「何な故ぜ、ツインテールを解ほどいたのです、慧理那」

「わたくしは、何度も怪物に狙ねらわれています。ツインテイルズに迷惑をかけないためですわ」

「それらしいことを！　母の目は節穴ではありませんよ、慧理那!!」

　がなり立てているわけでもないのに、ビリビリと空気が震えるのを感じた。

「お母様……」

「百歩譲って、怪物の脅威に怯おびえツインテールをやめるのならば……母として、娘の安全を願うのは当然。多くは言いません。しかし慧え理り那な……あなたがツインテールをやめたのは、そんな理由ではないはず。つい先日までの気勢はどうしたのです！　ツインテールを守り戦う少女と、それを心の限り応援したいと願ったあなたに心打たれ、母は支援すると決めたのですよ!!」

　そうだ。陽よう月げつ学園では、ツインテイルズへの応援名目ならかなり自由な部活でも許可される。それは、ほかならぬ理事長が、ツインテイルズを支援すると宣言したからだ。

「家の事情を皆様の前でお話するわけにはいきません。お母様、二人っきりで話がしたいですわ」

「いいでしょう。……皆様、不肖の娘が失礼を致しました。どうか、よき夏を過ごして下さいましね」

　一転して朗らかな笑みを浮かべると、理事長は壇を下りていった。

　軽くスピーチを終えると、慧理那も足早に去って行く。

　他の家の親子のことに口を挟む権利なんて、俺にはない。
　けど、理事長が慧理那のツインテールを不肖だと断じたことに、俺は静かな怒りを覚えていた。たとえ。理事長自身のツインテールが素晴らしかったとしてもだ。
　そして、もどかしかった。
　慧理那のツインテールの真価を、あの厳しい母が知らないことが。

　　◇

　運良く次の時間が体育なのがよかった。
　桜さくら川がわ先生は何な故ぜか男女ともにゲートボールをやらせて自習にし、俺、愛あい香か、トゥアールの三人と一緒にツインテール部の部室にやって来た。
「さっきのあれ、何があったんです？　慧理那の縁談の妨害は、失敗したんですか!?」
「いや、一昨日おとといのあれはな。密偵に調査させたら相手がロリコンだった。奥様に報告するだけで済んだので、円満に破談になったよ」
　よかった、鉄砲玉が任務を完遂しなくて。
「しかし、慧理那様がエロ本を買いたがってアドバイスを求めているのが奥様の耳にも入ってしまったようだ。半信半疑だったらしいが、一昨日の慧理那様のパソコンでの検索履歴を見られてしまってな」
「うわあ……」
　愛香が頭を押さえる。
　検索履歴を見られるなんて、頭の中を公開範囲制限なしで開放し

てるのと同じだからな。

「私にも責任はありますし、よかったら理事長が慧理那さんと同じ年(とし)頃(ごろ)にエロ本を見たことがないかどうか調べる嘘(うそ)発見器、お作りしましょうか？」

　トゥアールの恐ろしすぎる提案を桜(さくら)川(がわ)先生はやんわりと断り、続けた。

「いや、奥様は怒っていないのだ。少なくとも、その件に関してはな」

　予想外の言葉に、三人で一斉に桜川先生を見る。

「……え？」

「むしろ、喜んでおられた。ヒーロー番組ばかり見て性に目覚める気配の全く無かった娘が、やっと興味を持ち始めた、と」

「そのぐらいの理解はあるのに、何でパソコンに閲覧制限(フィルター)かけてるんだ!?」

「あれは、お館様……父君、神(しん)堂(どう)栄(えい)華(が)様の希望だ。これがまた、子煩(ぼん)悩(のう)がスーツを着ているような方でな……」

　いや、でもそれは当然だろう。男親なら、あらゆるものからあのツインテールを守りたいと思うようになるはずだ。

　不可解なのは、さっきの体育館でのやりとりだ。

「じゃ、じゃあさっきあんなに怒ってたのは……」

「慧(え)理(り)那(な)お嬢様が反抗期になって、ツインテールを解(ほど)いてしまったからだろう。神堂家では、親の顔面にグーパンするより、意味もなくツインテールを解く方が罪が重いのだ」

「慧理那が言ってた家訓でツインテールにしているって話、あれ、本当だったのか!?」

　桜川先生はその事実を俺が知っていることに意外そうな顔をしながらも、はっきりと頷(うなず)いた。

何て厳かな家系だ……。強要することの是ぜ非ひは部外者の俺がとやかく言うことではないが、事実、あんなにもツインテールを愛する娘さんが育っているんだ。

厳しい中にも、確かな優しさのある教育だったのだろう。

「縁談話は私たちが水際で食くい止めていたつもりだったが、慧理那様はかなり前から悩んでおられたようだ。それで昨日、奥様がエロ本の話を持ち出してな。性に興味が湧わいたのなら、結婚して子供を作ればよい、と。それで慧理那様も我慢できなくなったようだ……」

ツインテールを重んじる家柄にとって、ツインテールを解くことは一番の非行だ。

あの真ま面じ目めな慧理那が親への当てつけでそうするほど、我慢できなかったんだろう。

そんなにも、悩んでいたなんて……。

「あの時俺が……慧理那の相談を、しっかり受けていたら……！」

俺は、有う耶や無む耶やになってしまった早朝の電話のことを、今になって悔やんだ。

「今、二人は理事長室にいるんだよな」

ここでぼやぼやしていては、手遅れになるかもしれない。

俺たちは、校舎の反対側にある理事長室へと走った。

授業中だけあって、廊下は物音一つない。

特別を絵に描いたような、舞踏会場の入り口を思わせる豪華な扉をあつらえた部屋。

理事長室には、近くに来たのさえ初めてだ。

四人それぞれ壁に身を寄せ、中の様子を伺う。

いかにも頑丈そうな扉を挟んでなお、二人の激しい言い合いは漏

もれ聞こえてきた。
『わたくしの態度が悪いから結婚を早めるなど！　相手方にも失礼ですわ！　わたくしは今すぐ結婚する気など、全くありません!!』
『あれも駄目これも駄目が、通ると思いますか！　あなたが母と約束したのは、就任してから二年間、しっかりと生徒会長の任を務め上げること！　学生の本分を全うするからこそ、掟おきてを反ほ故ごにしたのです！　それを何です、今の体たらくは!!』
『それは、だから……やることがあるのですわ……』
　ツインテイルズのことだけは、歯切れがよくない。ここが弱みなんだ。そこを突かれると分が悪い。
『それに、性交に興味が出てきたのなら、丁度いいではありませんか』
『なっ……！　ひどいですわお母様、わたくしのことをそんな風に見ていましたの!?』
『他にどう見ろというのです!!』
　……そりゃまあ、エロ本探して延々検索して、その履歴を見られたんだからな……。
『いいから素直に母のいうことを聞きなさい！　結婚は絶対！　断じて覆くつがえしはしません!!　ツインテールを解ほどいたのは許されざることですが、母は少し安あん堵どしています。今のあなたの魂なき未熟なツインテールでは、御先祖様に顔向けができません!!』
　ああ。
　それだけは、聞き逃のがせなかった。
「三人とも、絶対に入ってこないでくれ。刃向かうのは、俺一人でいい」
　愛あい香かたち三人を厳重に制止し、俺は覚悟を決めた。
「そーじ、あんたまさか！」

「いいな、絶対にだぞ!!」

　刃向かうどころか、他よ人その家の事情にまで首を突っ込むんだ。

　怒りを買って、退学にさせられてしまうかもしれない。

　それでも……我慢できない!!

　俺は両手で突き倒すように理事長室のドアを開ける。

　討ち入りでもするかのような決死の覚悟で、中に踏み込んだ。

「――慧え理り那な!!」

「誰だれです、ノックもせずに!!」

　二人は、机を挟んで向かい合い座っていた。

　慧理那の目にうっすらと涙が浮かんでいるのを見て、俺は拳こぶしを握り締める。

「一年の観み束つか総そう二じです。娘さんのツインテールのことで話があります!!」

「ほう!?」

　無礼を承知で殴り込んではみたが、意外にも理事長は話に耳を傾けてくれた。

「すみません。さっきの話、聞いてしまいました。理事長が慧え理り那なのツインテールを未熟だと言ったことが、どうしても納得できなくて」

　俺の方も理事長の方も見ようとせず俯うつむく慧理那は、相変わらず髪を下ろしたままだ。

　なんて痛々しい……。やり場のない怒りと悲しみを、ただツインテールにぶつけただけじゃないか！

「……慧理那、お前らしくもない。自分の感情をツインテールにぶつけるなんて」

「観束君……。前に話しましたでしょう、神しん堂どうの女がツインテールにするのは、家訓だと……こうすることが、一番の意思表示

なのですわ」
　すまない。あの時は冗談半分で聞いたその掟おきてが……どれだけ重いものか、今、わかった。
「慧理那。彼は、家の事情を話すほどに信頼している人なのですね？」
「あっ、そ、それは……」
　しまった、と口を手で塞ふさぐ慧理那。既に遅かった。
「ふむ」
　値踏みするような視線。
　以前部室で、慧理那にも同じように見られことがあったが、迫力が全然違う。
　鋭い上に、粘度もある……百戦錬磨の大人の眼光だ。
「ですが、あなたに言われるまでもありません」
　理事長は立ち上がり、さらに強く俺の目を視線で射抜いてきた。
　こんなにも理知的な人を相手に、今から格闘技の試合でもするかのような視殺戦を繰り広げている。背は俺の方が高いのに、見下ろされている錯覚さえ覚える。
「無論、親ならば娘のツインテールは誰だれよりもよく見よく知っています。わたくしが未熟と言ったならば、慧理那のツインテールは未熟なのです‼」
　それは──いくら親だろうと、傲ごう慢まんってものだ。
「違う‼」
「むっ」
　たとえ血を分けた肉親だろうと、わからない領域ツインテールがある！
「俺は……慧理那のツインテールを、あなたよりも知っています！」
「な、何と……⁉」

「誰より慧理那のツインテールを見ているというのなら、このひと月でどれだけ輝きを増したかよくわかっていたはずだ！　だけどあなたは、些さ細さいな生活態度ばかりに目がいって、娘さんの本当の成長を見てあげなかった!!　口先だけじゃないか!!」
　親心を思えば。
　娘の生活態度を憂い、躾しつけをするのは当たり前かもしれない。けど、理事長が叱しっ責せきしたのは慧え理り那なのツインテールだ。
「理事長、あなたは慧理那のツインテールのことを、これっぽっちも理解しちゃいない!!」
　俺の叫びに、理事長は一歩後あと退ずさる。
　慧理那のツインテールは、万人に誇りこそすれ、咎とがめられる要素なんてどこにもないんだ!!
「今、慧理那はとても大切なことをしています。確かに、そのために学業や生徒会の活動は少し疎おろそかになるかもしれません。けど、それは慧理那の人生の中でも、本当に何よりかけがえのないものになると断言できる!!」
「観み束つか君……」
　慧理那をテイルイエローにしたいと願ったのは俺だ。
　しかし、自分でやり遂げると宣し、俺たちとの絆きずなのためにエロ本まで自力で買おうとした慧理那を見て、何の後ろめたさもなくなった。
　俺に出来るのは……友達として応援し、仲間として支えることだけだ。
「だから今は、少しだけ目を瞑つぶってくれませんか。慧理那ならきっと、それすら自分のものにして、またいつものすごい生徒会長に戻るはずですから」
　理事長は、ずっと無言のままだ。

勝手なことを、と怒り心頭になっていても無理はない。

でも、俺はちゃんと言いたいことを言った。

この先どんな辛辣（しんらつ）な言葉をかけられ、処分を受けようと、後悔はない。

「慧理那」

理事長は慧理那に声をかけ……嫋（たお）やかな微笑（ほほえ）みを浮かべた。

体育館で生徒たちに向けた社交辞令の笑顔ではない。母の笑顔だ。

「すでに大和男子（やまとおのこ）は絶えて久しいと思っていましたが……知らぬばかりでいるものですね」

「み、観束君が？」

「そうです。ツインテールを愛する心……男性として一番大切なものを、彼は持っているのですよ」

理事長は、その微笑みを俺にも向けてくれた。

わかってもらえたんだ……。

俺の心に宿るツインテールが。そして、その思いを乗せた言葉が。

「この、全身からほとばしるようなツインテールへの愛……。歴代の神堂（しんどう）の婿（むこ）の中にも、彼ほどの快男児はいなかったでしょう」

「慧理那のお父さんたちも……ツインテールを好きだっていうんですか？」

「無論。神堂の女は代々、ツインテールを愛する男性を夫に迎えてきましたから」

何だって!?

「ただ、ツインテールを好きと言うだけなら誰（だれ）にもできます。事

実、母があなたたちと同じ年の頃(ころ)、口先だけでツインテールを好きだと吹き散らし言い寄ってくる男性は、星の数ほどいました。だからこそ、分かるのです。見えるのです。一片の曇り無くツインテールを愛する、澄み切った心が」

　理事長の後ろに、黄金に輝くツインテールの家紋が浮かんで見えた。

　何てこった……啖(たん)呵(か)を切ったはいいが、相手はここまで脈々と受け継がれてきたツインテールの一族だったなんて!!

　いや、弱気になるな。家柄が何だ！　歴史が何だ!!

　俺だって、この星で最強のツインテールなんだ!!

「なるほど。慧(え)理(り)那(な)、貴女(あなた)が憤慨するのも無理はありません」

「お母様……」

　理事長は慧理那の前に立ち、その肩にそっと手を置いた。

「彼ほどの素晴らしい殿方を知らず、雑多な見合い話などけしかけた、この母が愚かでした」

　俺は、心の中で指を鳴らした。相談された見合い話の件も、上(う)手(ま)く収まってくれたようだ。　これで、万事解決だな。

「一応、ツインテールが好きかどうかは充分に調べさせた相手たちでした。ですが、聞けば聞くほどにその他に難がある者ばかり。母も悩んでいたところ。渡りに船とはこのことですわ」

　――――だが、考えが甘かった。

「必ずや、彼と添い遂げなさい」

　耳を疑うような言葉に、俺はニワトリのように口を菱(ひし)形(がた)半開きにして固まった。

「娘をよろしくお願いします、観み束つか君。あなたなら、慧理那のツインテールをしかと愛してくれるでしょう」
「えええええええええええええええええええええ!?」
　慧理那も驚いて叫んだが、俺の絶叫がそれを掻かき消してしまった。
　いや、確かに慧理那のツインテールは尊敬してるけど……え!?
　な、何かすごくヤバイ方に話がいってないか、これ!?
「性急すぎますわ!!」
「いいえ、母は彼のことを気に入りました。彼にしなさい、慧理那。それ以外は許しません。どうしてもというのなら、すぐにまた縁談を集めます」
　ツインテールで語り合い、分かり合ったおかげで、認めてもらえたのはいいが……予想以上に気に入られてしまった。
「そ、そんなあ!!」
「彼は先ほど、あなたが大きな何かを為そうとしていると言いましたね。未来の夫がそう言うのならば、信じられます。他が疎おろそかになること、目を瞑つぶりましょう」
　う……。
　ここは嘘うそでも話を合わせておけば、話が丸く収まるだろうか。
　慧え理り那なも同じことを思ったのか、俺の方をちらちらと見てくる。というか、また何か息が荒い。
　……駄目だぞ、お母さんの前であの顔をしたら。
「……あの、観み束つか君さえよければ、わたくし……」

「ちょ――――――――――――――――っと待ったあ!!」
　慧理那の言葉を遮さえぎり、トゥアールが理事長室に入って来た。
「馬ば鹿か！　トゥアール、今だけはこらえろ！　台無しにするつも

りか!!」

　桜さくら川がわ先生の制止も聞かず、トゥアールが乱入してきた。

　トゥアールらしからぬ馬力で、ラグビーのように腰にしがみついている桜川先生をものともしていない。目も、恐ろしいほどに血走っている。

「今こらえたら次に桜舞う季節に慧理那さんの腹ボテＥＮＤで左下にＦｉｎとかついちゃいますよ！　私は慧理那さんに恨まれても、ここは出ます!!」

「何者です、騒々しい!!」

　理事長は顔に険を寄せ、闖ちん入にゅう者しゃを糾きゅう弾だんした。

「私の名はトゥアール、総そう二じ様の婚約者です！　慧理那さんとは友達ですが、ライバルでもあります!!　その婚約、待ってもらいましょう!!」

　だから何でそんな意味のない嘘をつくんだトゥアール、桜川先生に毒されたのか!?

　それとも……とりあえず婚約者のふりをして、この結婚話を御破算にしようってのか。

　っていうか俺、どの道誰だれかと結婚するフリしないとこの場が収まらないのか!?

「ほほう、すでに妾めかけ持ちとは、侮あなどれない。構いません、側室など何人いてもそれは男の甲か斐い性しょう。慧理那、貴女あなたが一番であればよいのです」

　慧理那は理事長の着物の裾すそを掴つかみ、縋すがるように言った。

「み、皆さん大切な友達ですわ……!!　一番も二番もありません!!」

　白衣を翻ひるがえし、自分を親指で指し示して堂々と胸を張るトゥアール。

「妾!?　このビジュアルをしかと見て言って下さい、妾に収まるポ

テンシャルですか！」
「慧理那に比べれば、地上の如い何かなる女とて書き割りも同然ですわ!!」
　この人、もしかしてすごい親バカなんじゃ……。
「奥様！」
　大人としての責を感じたのだろうか。桜さくら川がわ先生が、真剣な眼まな差ざしで理事長に相対する。
「……妾めかけでもいいので、私も観み束つかと結婚させて下さい……うへへ」
　責ではなく、籍に便乗しようという魂胆なだけだった。
「許しましょう、尊みこと。あなたも、慧え理り那なのために我わが身を顧みずいろいろとしてくれていたようですしね」
　バレてるじゃないか、先生……。
　でも、理事長が理解のある人でよかった。暗躍の件は不問だろう。
　理解がありすぎて、かなりのピンチになってしまったが……。
「……そーじ……」
　理事長の視線の先を見ると、愛あい香かが所在なさげに立っていた。
　トゥアールにツッコむでもなく、自分で何か主張するでもなく、唇くちびるを尖とがらせている。
　一瞬俺の方を見たかと思えば、またそっぽを向いてしまった。
　理事長が、慧理那に何か耳打ちしている。
「……慧理那。順列などない友達だと言いましたね。しかし彼女にだけは用心なさい」
「津つ辺べさんが、ですの……？」
「殿方に尽くすため、極めに極めたツインテール……。神しん堂どうの

女でさえ、婚こん姻いんを経てようやく到達するほどの領域へ、あの少女はすでに辿たどり着いていますわ」

　俯うつむく慧理那を残し、今度は俺の方へと歩み寄る理事長。

「それにしても……観束……観束？」

　理事長は先ほどと打って変わって子供のような思案顔で俺を見つめ、やがて頭を振った。

「フフ、わたくしとしたことが、未いまだあの男性への対抗意識が……そしてあの方への未練が捨て切れていなかったようですわ」

　ずっと厳しく吊つり上がっていた目が、その瞬間、僅わずかにゆるんだように見えた。

「……そんなはずがありませんわ。あの方は、子を産んだら命め天て男おや有ある帝てい滅めつ人とといった、厳かな名前をつけると常々言っていましたもの。あなたは……優しい名前ですものね」

　――繋つながってはいけない因縁が繋がっていくのを感じて、俺は戸惑いを憶おぼえる。

　考え過ぎだといいのだが。いや、きっとこの世代では、トレンドな名前だったんだ。そうに違いない。

　一難去ってまた一難。

　全ての問題が万事解決、となるのは、まだ当分先のようだ。

◇

　数日後。授業が終わるとすぐ、トゥアールがエレメリアンの反応をキャッチした。

　部室から基地へと移動トランスポートし、俺と愛あい香かだけで先に出撃する。

生徒会会議のある慧ぇ理り那なは、終わり次第合流する予定だ。
「あそこか⁉」
「……そーみたいね」
ビルからビルへ、俺たち二人は風を切って跳躍する。
場所は他県のイベントホールだ。
こういう場所は人が多くて危険なのも去ることながら、目立つし、みんなすぐ写真を撮ったりするので、俺たちにもリスクが大きい。被害を最小限に抑え、瞬時の決着が大前提だ。
それにしても──
「愛香、気分でも悪いのか？」
並んで飛び跳ねながら、テイルブルーを気にかける。
どうもここ数日、元気がない。
「割りとね。最近」
「無理するなよ？　今は慧理那もいるんだから」
「……だからよ」
責任感が強い愛香は、口でどんなに嫌いやがっても、戦いには率先して参加しようとする。
愛香なりに、慧理那のことを気遣ってるのかな……？
「ねえ、そーじ。もし会長が乗り気だったら、あんたは……」
愛香が躊躇ためらいがちに何かを言おうとしたので、気になって振り向くが──

「ＣＤの初回特典の三つ編み券よ～！　購入者全員もれなく三つ編みにしてあげるっ‼」

眼下から聞こえてきた暴言にバランスを崩し、俺と愛香は、頭から地面に突き刺さった。

「何、ツインテールが空から降ってくるとは……この世界、そこまで飽和しておるのか!?」
　こいつさっき、キャラが……？　いや、気のせいか。
　立ち上がりざまに蹴けりを入れ、エレメリアンを吹き飛ばすブルー。
「ぬぐぐっ、その上蹴ってくるとは、つくづくバラエティー豊かなツインテールよ!!」
　俺も何とか立ち上がり、相手を見ると、吹き飛ばされながらも両腕でガードし、ダメージはさほど負っていないようだった。
「あんたらはホント……悩みがなくて人生楽しそーよね!!」
　胸絡がらみの敵じゃなさそうなのに、今日のブルーは何かやたらイライラしてるな。
「……そうとも限らぬぞ」
肩口から生えた三つの首。六つの目が、一斉に俺たちを見る。
　その頭部の一つ一つを鋭く彩る巨大な牙きば。ナイフを一指一指に埋め込んだような、禍まが々まがしい爪つめ。
　地獄の番犬を現世に具現したような、凶悪な風ふう貌ぼうのエレメリアンだった。
「このプレッシャー……幹部エレメリアンか……！　最近とんと現れなくなったと思ったが、やっぱり戦力を立て直してただけか!!」
「我わが名はケルベロスギルディ。貴様がリヴァイアギルディを文字通り血祭りに上げたと同胞を震ふるえ上がらせた鬼神、テイルブルーだな。名乗りもせずに蹴けってくるとは……胸の薄さは常識の薄さということか」
「あんだとゴルアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア!!」
「落ち着けブルー！　ほら、地面に落ちたからツインテールが乱れ

てるぞ!!」

　俺は手て櫛ぐしで梳すいて、ブルーのツインテールを整えた。

「あ……ありがと」

　地獄の番犬に顔負けせぬようにと鬼の形相になっていた愛あい香かの表情が、見る見る和らいでいく。やはり、ツインテールの乱れは心の乱れに繋つながるのだ。

『愛香さん！　何戦闘中に女のツラになってるんですかいかがわしい！　見てください、周りの惨状を!!』

　何な故ぜかトゥアールが怒って通信してきたので周りを見ると、女性が大勢、地面にへたり込んでいた。見渡せば、イベントホールの入り口から駐車スペースに満遍なく、それは続いている。



「なっ……何だこりゃ!?」

「助けてください……うっ……うっ……気づいたら、無(む)理(り)矢(や)理(り)三つ編みに……三つ編み券なんて入ってなかったのに……」

　皆、髪の長さにかかわらず、三つ編みにされてしまっている。

「むう、何(な)故(ぜ)拒むか。むしろ、我(わ)が絶技にてお主たちの髪は輝きを得たのだぞ」

　突出して痛々しいのは、ベーシックなツインテール……耳の上に結び目がある普通のスタイルのツインテールを無理矢理三つ編みにされてしまったと思(おぼ)しき女の子だ。

　逆しの字を描いて垂れ下がり、お正月のしめ縄のようになってしまっている。

「どうせまたおかしな機械でも使って、無理矢理三つ編みにしたんでしょ。それを探してブッ壊せば、みんな元に戻るんじゃない？」

　ブルーは早速リボンを叩(たた)き、ウェイブランスを出現させて戦闘態勢を取った。

「無粋な！　機械になど頼るは、二流の仕事！　私はこの二本の腕だけで髪を編む！　螺(ら)旋(せん)を導く！　それが我が属性、三つ編み属性(トライブライド)の誇りよ!!」

　珍しいな……。ツインテール奪取が最優先事項のこいつらが、別の髪型にこだわるなんて。

　それよりも、反応をキャッチしてから俺たちが現場に到着するまで、五分もかかっていないはずだ。

　たったそれだけの間に、こいつは何十人もの女性を三つ編みにしたっていうのか……!?

「相変わらずハタ迷惑な奴(やっ)らだぜ……！　せっかくのツインテールまで無理矢理変えやがって！」

「テイルレッドよ、視野が狭いな。三つ編みは、ツインテールの朋

ほう友ゆうと呼べる存在なのだぞ!!」
「そういうお前は、ずいぶんと視野が広そうな頭してやがんな!!」
　俺もブレイザーブレイドを抜き、ブルーと二人で挟み込むようにして対たい峙じした。
　戦闘員アルティロイドがまばらに女の子たちを囲んでいるせいで、思うように避難できていない。
　厄介な状況だ。
　ケルベロスギルディは、テイルブルーを頭から足までじっくりと見ると、業界人じみた非情な宣告を下した。
「……残念だがテイルブルーよ、お前はこの私の腕をもってしてもプロデュースの施ほどこしようがない。特に胸のオーラの無さがアイドルとして致命的だ。ノーフューチャーなのだ」
「完全解放ブレイクレリーズ！」
　周囲に大勢の人がいるというのに、ブルーはいきなり武装を完全解放ブレイクレリーズした。
「落ち着けブル───ッ!!」
「……何を熱くなっているの？　私は冷静よ、とてもね……」
「あわわ、あわわわ」
　冷静という言葉を犬にでも食わせたらしくマグマのような怒りをたぎらせ、ブルーはケルベロスギルディをオーラピラーで拘バイ束ンドした。
「犬ッコロ……あんたもノーフューチャーになったわよ……!!」
　本当に計算した上で放ったのかはわからないが、放ったオーラピラーの弾道は針の穴を通すような精密さで、被害に遭った女の子一人にも擦かすり傷一つ負わせていない。
「エグゼキュートウェイブ!!」
　強烈な槍やりの一撃がケルベロスギルディを貫く。

「やったか!?」
　だが、巻き上がった土煙が晴れる頃ころ、何事もなかったかのようにケルベロスギルディが姿を現した。
「嘘うそっ!?　直撃したのに!?」
「人質を取っているのも同じだというのに、躊ちゅう躇ちょなく攻撃してくるとは……やはり、皆の読みは正しかったようだ。テイルブルーは冷徹な戦士、目の前の敵を倒すための犠牲は厭いとわない、とな」
　簡単にそうできる状況でも、今までこいつらが人質を取ることなんてなかったが……今後の保険としても、テイルブルーをそんなキャラだと誤解してくれていた方が、都合はいい。
「いいわ、無事ならくたばるまでいくらでもブチかましてやるわよ……」
「そもそも、私はお前たちと争う理由がない。矛ほこを収めるがよい」
「あたしの槍に、理由なんていらないのよ!!」
　だから何で今日のブルーは、そんなに好戦的なんだ……。
　その時俺は、やっとケルベロスギルディに起こった異変に気づいた。
「!?　待て、お前……その首は!?」
「フ、気づいたか……」
　不敵な笑みを浮かべる顔――頭は、中央の一つだけ。
　その後ろから、同じ姿のエレメリアンが、もう一体姿を現した。
　さらによく見ると、二体の後ろで、傷だらけの三体目が大の字に倒れている。
　その全てが、頭が一つなこと以外は、ケルベロスギルディと全く同じ風ふう貌ぼうだ。

「な……!!」
「三つ編みへの愛より生まれた私は、三つの命を編んだ存在。故ゆえに、無敵なのだ」
　やがて、エグゼキュートウェイブの直撃を受けたであろう、地面に倒れていた三体目も、むくりと起き上がった。
　三体は単細胞生物のようにつぷりと溶け合って交じり、再び三つ首のケルベロスギルディに再生した。
　一瞬で分離して、直撃したのは一体だけだった……？　しかも、もう一度合体したら、ダメージが消えている!?　こいつの力は、一体……。

「……三体に分離できるのがご自慢のようですが、わたくしたちツインテイルズが三人いるということも、お忘れなく」
　突如、建物の陰から、ヴォルティックブラスターを構えたテイルイエローが姿を現した。
　多分、ちょっと前に着いてタイミングを計っていたんだと思う。
『だからツインテイルズは四人なんですよ!?　せっかく着いたこと通信で教えないでおいてあげたのに、ひどいじゃないですか!!』
「す、すみなせんわ、つい……売り言葉に買い言葉というか、即興の台詞せりふなので……」
　トゥアールとのやりとりはもはや恒例だが、できれば今回は、俺たちだけに任せて欲しいのだが……。
「あっ、ちじょだ、ちじょー！　お母さんが言ってたー!!」
　ヒーローの心を挫くじく、幼な子の残酷な声援。耐えろ、イエロー。
　場所が場所だけに、先日のように大暴走されたらとてつもない被害者が出てしまうからな。

「テイルイエロー……なるほど、貴様はなかなかの素材マテリアルだ。しかし、その作りものの胸がいただけぬ。生きのままの素材を光らすが、私たちの仕事だというのに……」

「なっ……！　こ、これは変身の賜たまものですわっ!!」

　ケルベロスギルディにさっそく品定めされ、イエローが反発する。

　ブルーは神妙な顔つきになり、逆に敵を賞賛した。

「……口だけじゃないようね……。レッド、あいつ観察眼もかなりのものだわ。強敵ね」

「何でお前は、イエローにだけいつも対抗意識を燃やすんだ……」

　トゥアールのように常に胸が大きい女の子と違って、変身前は自分よりも小さいのに（身長差からいって当然なのだが）、変身後はグラマラスになる慧え理り那なの存在が、愛あい香かにとっては憧あこがれと嫉しっ妬との板挟みなのだろう。今日はなんか苛いら立だっているようだしな。

「イエロー、まだ大勢の人が残っているんだ、迂う闊かつに撃つなよ！」

　とりあえず俺は、真っ先にそこを注意しておいた。この警告が素直に聞き入れてもらえるなら、前回もあのようにはならなかったのだが……。

「ええ、わかっていますわ！　相手が幹部クラスなら、今こそこのとっておきの属性玉エレメーラオーブを使うべきです!!」

「まさか……ちょっと、やめてよ！」

　内蔵武装が多いイエローは今まで使う機会がなかった属性玉変換機構エレメリーションだが、虎こ視し眈たん々たんと機会を伺っていたらしく、ここぞとばかりに左腕を掲げた。

　今まで散々愛香に、使うな、捨てろ、と言われ続けてきた、あの

属性力エレメーラだ。

「属性玉エレメーラオーブ──巨乳属性ラージバスト!!」

　イエローの左腕が発光し始めた瞬間。
「駄目って言ってんでしょ！　これ以上大きくなったら千ち切ぎるわよ!!」
　属性力エレメーラに拒絶された自分と違い、かつて夢描いた巨乳属性ラージバストの効果がイエローに発動してはならないと、ブルーが全速力で飛びかかる。
「……え？」
　ブルーの腕がイエローの肩に掛かる寸前。空間に飲まれるように、ぐにゃりと沈み込んだ。
　フライパン大の小さな光るトランポリンが、両者の間に浮かんでいるように見えた。
　そして、とてつもない反発力で、ブルーが一気に跳ね飛ばされる。
「キャ──────────────────ッ!?」
　球場越えの特大ホームラン。
　古典的な漫画表現よろしく、ブルーは空の彼方へと吹っ飛んでいき、小さな光の点となって消えた。
「ブルーッ！」
　なんて力だ。いくらブルーの腕力といっても、あそこまで飛ばすには、何倍にも増幅して跳ね返しているはずだ。あれが、巨乳属性ラージバストの効果なのか……!?
「同士討ちとは愚かな。好都合だ、私は次の準備があるのでな……」

　ケルベロスギルディは軽やかに跳躍し、光のゲートの中に消えていった。

　女性の周りにいた戦闘員アルティロイドたちも、いつの間にかいなくなっている。

　これだけ多くの人から、属性力エレメーラを奪われずに守れたのは、とりあえず喜ぶべきことだろう。

　しかし、何な故ぜだ？

　そもそもあいつはどうして、この会場に現れたんだ……？

　ひとまずほっとしながら周囲を確認すると、今日行われる予定だったはずのイベントのポスターが目についた。

　女性アーティスト、アイドルの音楽イベントだ。

　その中に、見知った名前があることに気づく。

　出演者の中には……新人アイドル、善いい沙すな闇あん子この名前が連ねられていた。

　　　◇

「す、すみません津つ辺べさん……まさかあんなことになるなんて……」

「もういいわ。でも、これで会長もわかってくれたでしょう。胸の力は、悲劇しかもたらさないのよ……」

　命からがら帰還した愛あい香かに何度も何度も謝る慧え理り那なと共に、俺たちは帰路を歩いていた。

　テイルブルーがいきなり割り込んでしまったからああなっただけで、俺にはかなり有用な能力だったように見えたが……。

　途中で慧理那を心配した桜さくら川がわ先生が合流し、家の近くでは

愛香の醜しゅう態たいを生で見ようと出迎えたトゥアールも加わり、五人で自宅の喫茶店に入った。
　店中の客の目が、次々に俺たちに向いた。
　な、何だ、こんな濃い人たちに注目されるような…………人間だったか、みんな。
「すまん！　俺と友達になってくれ!!」
「いや俺だ!!」
「ぶぁかもぉん……わ、わしじゃぁ……」
「何だぁ───!?」
　年齢層問わず、何な故ぜか男性客のほとんどが俺に群がってきた。
　誰だれもが振り返るような美少女のトゥアールや愛香たちなら分かるが、何故俺に!?
　全てを理解した表情で、母さんが親指を立てた。
「みんな『モテモテの主人公を羨うらやむ親友ポジション』になろうっていう願望よ。主役になることを諦めた、人生の先輩たちのささやかな願い、叶かなえてあげて、総そうちゃん」
　……いささか以上にお年を召した親友もいらっしゃるが……よくわからないけど、母さんが学生の頃ころ父さんとやってたって言う、シチュエーション限定のごっこ遊びか？
　だいたいモテモテなのはテイルレッドで、俺自身はそんなガラじゃないだろ……。
　会釈交じりに笑顔でさらりとかわし、俺たちは店の奥の基地へのエレベーターに急いだ。
　途中から母さんが、電車ごっこのように腕を振りながら後ろにピッタリとくっついてきていた。
「店を見てろ───────ッ!!」
「ああ、大丈夫大丈夫。最近はもうみんな自分で淹いれて自分で飲

んで自分でお金置いて帰っていくから、楽なのよ」
　道楽経営も、極めればここまで何もしなくてよくなるのか。
「もう店じゃなくて、セルフのダベり場じゃねーか!!」
「それにさっきのエレメリアンとの戦いを見て、気になるところがあったから」
　やべーよもうトイレ行くぐらいの気軽さで基地と店往復してるよどうすればいいんだよこの人俺のお母さん。
「素敵ですわっ……部室から直で来るより、やっぱりこうして喫茶店の奥から基地に向かうのが、情緒があってときめきますわ!!」
　慧理那は、エレベーターで基地に向かう途中、しきりにそんな感想を漏もらしていた。
　そういえば、最初に来た時は行きは気絶していたからな……。
　でも、回数こなしすぎてそんな情緒とは無縁になってしまった肉親が、俺の隣にいるんだよな……。

◇

　コンソールルームのモニターで、今日の戦闘の記録が再生された。
「やっぱり、三体に分身してるな。これがあいつの能力か？」
　フレームの限界まで映像を分解してようやく、ケルベロスギルディがブルーのエグゼキュートウェイブを防いだカラクリが明らかになった。
「ブルーのオーラピラーで拘バイ束ンドされる直前、三体に分離して回避。直撃を受けたのは一体だけです。しかも、再合体した際に、一体が重傷を負った分のダメージを取り込んでいる様子はありません」

「こりゃ面倒な敵だな……」

　そういえば、敵の倒し方について会議をするなんて、これが初めてだ。今までは、相手がどれだけ強くてもほぼ各個撃破の力押しで何とか勝ててきた。

「偶然……じゃない気がする。ダークグラスパーっていう指揮官がついた後だからな。三体分離の能力も、ツインテイルズに合わせて選出したって考えるのが自然じゃないか？」

「さすが観(み)束(つか)君！　素晴らしい着眼点ですわ！」

　慧(え)理(り)那(な)に誉められて少し照れくさくなったが、愛(あい)香(か)が逆にジト目で睨(にら)んできた。何でリアクションが正反対なんだ。

　トゥアールがスクリーンを必死に指差し、慧理那の注意を向けようとする。

「慧理那さん、ほらほら！　テイルレッド、女の子にもみくちゃにされてますよ！　あー、あの子なんてほら、自分の制服の中に手ー突っ込ませてすぐに逃げていきましたよ、業(わざ)師(し)ですね!!」

　そこまでは映し続けないで欲しかった、戦闘後に女生徒に殺到された映像が克明に映し出されていた。あれをおそらくは明日以降のニュースで何度も見ることになるかと思うと、また気が滅入る。

「？　とても人気があって、羨(うらや)ましいですわ。わたくしも早く、人々に認められるヒーローになりたいものです」

　しかし慧理那はそんな白昼の不祥事を前に、憧(どう)憬(けい)で目を輝かせていた。

「……むむむ、ヒーロー信仰にマイナスな映像でも揺らがないなんて、手(て)強(ごわ)い……」

　トゥアールが爪(つめ)を噛(か)み、何かぼそぼそと呟(つぶや)いている。

「あんたはいい加減抵抗しなさいよ、なすがままでそろそろ取り返しがつかないところまで来始めてるわよ!!」

「愛あい香かさんの方が怒ってどうするんですかいつも通りですね!!」

　作戦会議の体を為していたのは最初だけで、あっという間に皆好き勝手なことを言い始めて脱線してしまう。

　対とい面めんに座っている桜さくら川がわ先生は特にやることがないからか、書類にペンを走らせている。学校の仕事だろうか？

　……よく見るまでもなく、婚こん姻いん届とどけだった。

　芸能人が長年書き慣れたサインレベルの速さで、妻の欄に自分の名前を楷書で記していく。

　ここまで婚姻届を極める前に、もっと様々な道があったのではないだろうか。

　ただの高校生の俺はあまりにも無力で、かける言葉を持たなかった。

　一方、母さんはサブウィンドウで表示されたままのケルベロスギルディを見て、うーん、と唸うなっている。

　悪の女幹部コスの母さんは、残念なことに今のような思案顔が絵になってしまう。

「ケルベロス……どっかで聞いたことあるのよねぇ……」

「そりゃ俺だって知ってるよ」

　亡者を喰くらう怪物と伝えられる、伝説・神話上の生物だ。

「そうじゃなく、うーん……あ！」

　母さんは頭の上に電球が灯ともるのが見えるようなわかりやすいリアクションで、ポン、と手を叩たたいた。

「そうだそうだ、母さん高校生の頃ころ、後輩の女の子を犬にして飼ってた時期があったのね？」

「ファミレストーク感覚でとんでもないこと言ってんじゃねえええええええええええええええええええええええ!!」

　次から次に記憶のトレジャー発掘して来やがって、若い頃どんだ

け大冒険を繰り広げてたんだよ!!
「やあね総そうちゃん、犬って言っても下げ僕ぼくのことよ？」
「そのまんまじゃねーか!!」
「だから、私というマスターに忠誠を誓ったかわいいいワンちゃんよ。それで、その子すんごいドＭでねぇ……地獄の番犬にちなんでケルベロスって呼んでたのよ」
　何な故ぜだ、一言一句逃のがさず聞いているはずなのに、文脈が全く繋つながっていない……!!
「ちなみに母さんはその頃、真なる闇の女王オブスキュリイ＝レイヌを名乗って、神魔超越神たる父さんと休み時間の度に死闘を繰り広げていたんだけど」
「言うぁぁぁぁ聞きたくねぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇ親父おやじの遺影ミキサーにかけそうだぁぁぁぁぁぁぁ!!」
　ていうか親父は神も魔も超越して何でまた神に戻ってんだよ!!
「その子、高校卒業してすぐ結婚して、子宝に恵まれたと聞くけど……今、どうしてるかしら。結構いいところのお嬢さんだったみたいだけど、ドＭだったおかげで距離感なく接していたのよね」
　ドＭの後輩を飼うって最強最長の距離感だと思うが、そんな形の友情ってアリなのか？
「……ん？」
　こめかみがピリっとした。何だ、この胸騒ぎは。
　……卒業後すぐ懐妊……なら、十九歳……？　で子供を産んだ、母さんの後輩──。
　年齢の簡単な逆算と、掘り起こされるように不意に思い出した、先日の理事長の発言。
　背中が冷や汗のウォータースライダーのようになってしまっている。

「え、えっと母さん。何だっけ、その人すんごいドＭ……って言った？」
「そうなのよ、首輪つけてー、って言われたり。下げ僕ぼく感が増すと思って母さんもついついつけちゃった、若かったわぁ～」
　――――世と代きを超えて、俺も同じことをお願いされた……!!
　俺は頭を抱え、テーブルに突っ伏した。
　そんなに直感が冴さえる方ではないというのに、何な故ぜ、こんなにもカッチリと頭の中でピースが填はまってしまったのか。
　俺の面白命名秘話を知っていた理事長――思い過ごしであって欲しかった。
　とんでもないニアミスで、理事長も母さんも慧ぇ理り那なも、誰だれも気づいていない。俺だけが、この針の筵むしろのような親子二代の因縁を知ってしまった。
　これを慧理那に知られるわけにはいかない。墓場まで持っていくんだ。
　親の秘められた過去を知って絶望するのは、俺だけで十分だ！
　慧理那のツインテールを、絶望に染めさせはしない!!

「トゥアールさん、このモニター、わたくしも操作してみてよろしくて？」
「いいですけど、そのＹっていうファイルにはアクセスしないで下さいね？　最高機密ですので」
　当の慧理那は、トゥアールに設備の操作方法を教えてもらっていた。
　トゥアールも、慧理那には弱いんだよな。前のめりに機械のこと知りたがるから。
　知的好奇心に満ちた慧理那のツインテールを見て、俺は不思議な

胸の暖かさを感じた。

　親が血ち反へ吐どものの過去を持つ共通項にばかり目がいってしまったが、よく考えれば、因縁、と言うより、親子二代の縁でもあるんだよな。

　出会うべくして出会った、っていう考えもできるんだろうか。

「人工衛星……〝ようじょ〟？　これがエレメリアンの出現をキャッチするんですの？」

「地表全てをカバーするためにサブ三基含め全四基ありますが、基本的にはこのメインでまかなっています。総そう二じ様たちに会う前に、こっそり打ち上げたんです」

　すごい会話だ。

「何なのよその撃墜したくなるような名前は……」

　空から俺たちを見守る、トゥアールの分身のこれ以上ないストレートなネーミングに、愛あい香かはすっかり呆あきれ顔になっていた。

　……そもそも、人工衛星を許可も取らずに打ち上げていいんだろうか？　……なんて、今さらだよな。この基地だって、本来だったら建築基準法ガン無視の深度まで掘削してるし。

「それでですねお母さん。わたくし神しん堂どう家警護主任兼メイド長桜さくら川がわ尊みこととしましてはやはり、お嬢様のことで総二君には返しても返しきれない恩があるわけで。ここはやはり、婚こん姻いんを以もって、一生をかけて恩を返すべきではないかとの結論に達しました」

　婚姻届のストックができたのか、桜川先生は母さんと談笑していた。

　メイド服と悪の女幹部コスが隣り合って会話している、地味にす

ごい絵だ。

　母さんも、年が近いからか、桜川先生には年相応の接し方をしていた。

「メイドさんはすごく嬉うれしいし、お姉さんキャラも必要だと思うんですけど、……一五歳の息子むすこと結婚を前提につき合うには、もうあと四、五歳若……あ、いえ、何でもないです」

　……若干の気遣いが年相応なだけで、他はそうでもなかったようだ。

　桜川先生は母さんの腕を掴つかみ、必死に縋すがり付いた。

「あなたが！　あなたがあと四年観み束つかを早く産んで下さればこんなことには!!」

「さすがに今の愛香ちゃんと同じ年で妊娠はちょっと……ねえ？　愛香ちゃん。その過程まででギリギリよね愛香ちゃん？　愛香ちゃん愛香ちゃん」

「何であたしにふるんですかおばさん!?」

　結婚とか妊娠とか、大人の女の人の会話って感じだなあ。

　ただでさえ男一人で肩身が狭いのに、交ざりづらい会話が展開されると実に困る。

　参観日の帰り一緒に歩いている途中で、ばったり会った知り合いの親同士で会話を始めてしまった時のような、妙な居心地の悪さというか。

「あの、すみませんトゥアールさん、変なところを押してしまって……最初の画面に戻れなくなりましたわ」

「あ――――ちょっと！　だからそのファイルは駄目ですって！」

　トゥアールの慌てる声が気になって、スクリーンに視線を移した瞬間。

『きゃははははは』
『わーいわーい』

　追いかけっこをしながら通学路を走る、赤いランドセルを背負った二人の少女。
　偶然映り込んだ映像ではなく、明らかに彼女たちを被写体としたベストアングルだ。
　もはや、盗み撮りなんて慎つつましやかなものではなく、即通報レベルの接写だった。
　誰も知らぬ超科学が、宇宙から穢けがれを知らぬ笑顔を狙ねらう。人々の平和と豊かな生活のため開発された素晴らしい技術が、血生臭い戦争の道具に転用されるような無情を感じる。
　さらに、簡易編集された映像が次々に再生される。そのいずれもが、小さい女の子を衛星で撮った悪魔の書だった。
　それまでの喧噪が嘘うそのようにピタリと止やみ、全員の視線がトゥアールに集中する。
「……さて皆さん。ケルベロスギルディについて、話し合いを再開しましょう。トリッキーな力を使うとはいえ幹部クラス。強敵です」
「それよりもっと危険な奴やつがここにいたようね」
　愛あい香かが得意の回転投げでトゥアールを床に叩たたきつける。
　床につくまでの最高回転数が、じわじわと更新されていっているのが恐ろしい。
「大宇宙に汚らわしい盗撮ツール打ち上げてんじゃないわよこの犯罪者が!!」
　愛香は突然変身し、その瞳に決死の覚悟をたたえてスクリーンの

映像を見つめた。
「テイルギアは宇宙空間でも大丈夫なんだったわよね？　髪紐属性リボンで宇宙まで飛んでいって、あの衛星撃墜してくるわ!!」
　まずい。正確な位置なんてわからないだろうし、めんどくさがって目につく衛星全部破壊しかねないぞ。明日から天気予報中止の危機だ。
「いいんですか愛香さん！　あの衛星はサポートの要かなめ！　あれを破壊しては、エレメリアンの出現の察知も、位置の特定もできなくなりますよ!!」
「あんたねえ……!!」
「フハハハハハハ！　地球の平和のため、ちょっとお茶目な盗み見ぐらいは見み逃のがしてもらいましょう!!」
　ブルーは両手でトゥアールの腰を掴つかみ、にっこりと笑った。
「なら、手出しできない衛星の分もあんたに償ってもらいましょうか」
「あああああああああああこうなることはわかっていたはずなのに歴史は繰り返される!!」
　愛香宇宙ステーションから、一基の衛星がカウントダウンも無しで即座に発射された。
　大気圏突破には十分な初速を出していたと思われるが、惜しくも天井という物理の壁に阻はばまれてしまった。
　人々の期待と願い虚むなしく、白衣をまとった衛星は、宇宙へ旅立つことはなかったのだ。

◇

　話し合いが終わった後、愛あい香かは地下基地のトゥアールの自室

に招待されていた。

「相談って何よ」

　意外とスッキリとまとめられていて、その中に女の子っぽい小物やインテリアがアクセントになっている、可愛かわいらしい部屋だった。

　愛香の思い描く科学者の部屋といえば、分厚い本や紙束が散乱し、いたる所にアイディアを記した付ふ箋せんが貼はってあるのだが、おそらくこれは男受けのいい部屋を演出したのだろう、と愛香は確信していた。

「慧ぇ理ゅ那なさんのことです」

　トゥアールはクッションに腰を下ろし、愛香にも同じクッションを差し出した。

「この手作りクッション、私のおっぱいと同じ感触なんです」

　愛香はクッションをブン投げ、床に正座をした。

　それは、トゥアールではなく自分の胸の感触を足に受け入れる、誇り高き貧乳の克こっ己き心しんだった。

「会長のこと？」

「少しは焦ってください！　総そう二じ様の童貞争奪戦において、目下最強の敵は慧理那さんなんですよ！」

「……焦ってるわよ。見りゃわかるでしょ。あのツインテール以外のことには世界一鈍いそーじにまで気づかれるんだから、よっぽどよ」

　出撃の際、総二に自分の不調を見抜かれてしまっていた。

　最近の自分の余裕の無さを自覚し、項うな垂だれる愛香。

「あと一応、あの年増も自暴自棄になったらどんな手段に訴えてくるかもわかりませんから注意しておきましょう。そうなったら、愛香さんでも力で止められるかどうか」

「確かに、桜さくら川がわ先生は強いけど……。あの人は結婚っていう呪のろいに取り憑つかれているだけで、恋愛にこだわってるようには見えないんだけど……」

　トゥアールは、なるほど確かに、と失礼極まりない納得をした。

「まさか、親公認で結婚話なんて……。未み春はるおばさんもそういうノリ喜びそうだから、反対しないだろうし……会長もまんざらじゃなさそうだし、どうすればいいのよ」

「そう、このままでは総二様の童貞が慧理那さんに略奪されてしまいます。ああいう純粋培養のお嬢様こそ、一度快楽を味わってしまうと深みにはまるんです」

　脊せき髄ずい反射で反論しようとした愛香だったが、すぐに口を噤つぐんだ。

「確かに会長、たまにエッチな顔してるもんね……」

「すでに慧理那さんは精神的快楽では総二様に調教されているも同然なんですから、あとはほんのちょっとのきっかけですぐにベッドインですよ!?　最後の一枚はあなたが脱衣パージして、が決め台詞ぜりふになりますよ!?」

　アホか、と一いっ蹴しゅうできないのが、今の慧え理り那なの現状だった。

　それは、愛あい香かも痛感していることだろう。

「いいんですか!?　総そう二じ様の童貞が、慧理那さんに奪われても！　私は嫌いやです！　他の女をちょっと味見するくらいなら目くじらは立てませんが、童貞は、童貞だけは絶対に私が奪わなければならないんです!!」

「童貞童貞うっさいわね!!」

　無造作に繰り出された愛香のパンチを、トゥアールはクッションを盾にして防いだ。

「フッ……またもやパンチにキレがありませんね愛香さん、動揺している証拠です」
「うぐぐ……」
　迷いのある拳こぶしでは、トゥアールのおっぱいは貫けない。
　愛香は二重の無力感に打ちひしがれ、再び頭こうべを垂れた。
「いい加減、危機感を持ちましょう。このままじゃよくてハーレムルートですよ……確証はありませんが、何か私、愛香さんとセットのエロシーンで済まされそうな気がするんです」
「だからよく分からない喩たとえはやめてよ、あたしだって色々こんがらがってるんだから……。だいたい、最終的に会長がツインテイルズになるのを認めたのは、あんたでしょ!!」
「慧理那さんは小っちゃくて可愛かわいいんですよ！　素直だし優しいですし！　ただ、ちょっとドMで被虐願望が強くて、総二様の童貞にもっとも近い位置にいることが問題なんです！　だから苦悩しているんです!!」
　テイルイエローへの変身が、総二と慧理那を結びつける最大のきっかけとなった。
　もし、あの時、テイルブレスを渡すのを止めていたら——。
「あたしだって苦悩してるわ！　相手があんたならともかく、ホントにいい人だし……テイルブルーのこと、初めて褒ほめてくれた人だし……悲しませたくない……」
　たったそれだけのことでも。
　愛香にとっては、挫くじけずに戦いを続けられた大きな恩でもあった。
「会長にとって、そーじはテイルレッドに変身してなくてもヒーローなんだよね。親に無む理り矢や理り結婚させられそうになっているところを助けてくれるなんてさ。少女漫画の世界じゃん……」

だからこそ、慧理那と恋敵になることが、愛香にとってはこれまで経験したことのない大きな苦悩だった。
トゥアールは愛香の隣に寄り添うと、耳元に口を近づけ、優しく囁ささやいた。
「愛香さん。ケルベロスギルディとの戦いが終わったら、私と一緒に、総二様に夜よ這ばいしませんか？」
顔を真っ赤にして飛とび退のく愛香。壁に投げつけてバウンドして戻ってきたクッションに、背中から埋まってしまう。
「正気!?　いつもあたしがそれを防いでるんじゃない!!」
「でも、愛あい香かさんだけでそんな大胆な行動は取れないでしょう？　私たちのアドバンテージは、物理的距離です。いつでも夜よ這ばいできる、それが慧え理り那なさんにはない強みじゃないですか」
「でも……」
愛香の反論が弱いのを見て、トゥアールは邪悪な微笑ほほえみを浮かべた。
（クク……。チョロい女ですね、せいぜい私が総そう二じ様の童貞を奪うための手て駒ごまとして存分に働いてもらいましょう）
愛香は、表情一つ変えずにトゥアールの肩を叩たたいた。
「トゥアール……。口には出してないけど、〝せいぜい私が総二様の童貞を奪うための手駒として存分に働いてもらいましょう〟、って顔してイラっとしたから殴るわ」
「何ですかこのエスパー蛮ばん族ぞくは!?　人を殴り続けてとうとうシックスセンスに目覚めぁああああああああああああああ!!」
この戦いが終わったら、夜這いする。
そんなピュアな乙女の死亡フラグを回収させずに粉砕する。
それはきっと、愛香のトゥアールへの友情なのだろう。
死亡フラグが消えた代わりに、現在進行形リアルタイムのデッドアクシ

デントに見舞われてしまうのが、女の友情の儚はかなさだろうか。

◇

「…………遅い」

着古したジャージで自室のソファに寝転がりながら、イースナはぼそりと呟つぶやいた。

「んー？　何がー？」

メガ・ネプチューンはライブ映像をチェックしながら、気け怠だるげに返す。

「も、もっと、早く、ファンがドカンと増えるはずなのに……今回は、遅い」

作戦の進みの遅さに、イースナは苛いら立だちを覚え始めていた。

「さすがにツインテールが愛されてる世界は手て強ごわいんやなぁ」

「それもそうだけど、この世界……眼鏡めがねが、かなり蔑ないがしろにされてる……。眼鏡の魅力を浸透させることが、まず一手間……。でも、それだけじゃない……」

何かが違う。この世界には、異質な何かが根ざしている。

イースナは、むくりと起き上がると、その眼鏡越しの昏くらい目で、ロボットを凝視した。

「メガ・ネ……預けておいたあれを出して……」

「あれ、て何や。まさか……アルバムか？　あんた、夢が叶かなうまでもうトゥアールはんの写真は見ないようにする、言うて封印したんとちゃうんか」

イースナは駄々っ子のように床をべしべしと叩たたき、催促する。

「だ、大丈夫……私は、トゥアールさんに巡り会えたんだから……頑張った自分に、ご褒ほう美び」

「こういう願掛けてなぁ、一回折れるとも一意味あらへんで」
　ネプチューンは以前と同じく右の腰をポン、と叩く。すると腹部から、引き出しのように箱がせり出してきた。
「しゃあない、好きなだけ見ぃや。頑張ったんは、ホンマのことやからな」
　出されたアルバムには、彼女が盗さ……もとい思い出として収めた、数多くの写真が飾られているのだろう。待ちきれないとばかりに勢いよくページを捲めくった彼女の笑顔が、すぐにまた元の暗い陰いん鬱うっさを取り戻していった。
「…………何、これ」
　飾られた写真は、そのどれもが奇妙なことになっていた。
　胸の隙すき間まを万全に使いこなし、凜りゝりしくテイルギアをまとう、かつてのテイルブルー……トゥアール。アルバムの全ページ、様々なアングルの写真で彩られている。

　──そのトゥアールが……全て、ツインテールを解ほどいていた。

「え、何かおかしいんか？」
　ネプチューンが横から写真を見て、不思議そうに首を傾げる。
「ど、どうして、トゥアールさんが……ツインテールじゃないの!?」
　総そう二じたちのよく知るそのトゥアールの姿こそ、イースナにとっては未知の存在だった。
　写真という小さな薄紙一枚に閉じこめられた、世界に匹敵する巨大な怪異。
　ツインテール属性によって作られ、ツインテール属性を持つものしかまとえないテイルギアを、ツインテールではない少女がまとっ

ている──。
　極限の矛む盾じゅんを内包したこの写真こそが、アルティメギルに支配され、全ての属性力エレメーラの消えた世界を体現した、物言わぬ語り部だった。
　何よりも恐ろしいのは……写真という、人がその記憶を形に変えられる数少ない手段にまで容赦無く干渉し、世界の条理を書き換えてしまう、属性力エレメーラという存在の強制力だ。
「トゥアールさん、ツインテール属性を、失ったんだ……!!」
「何やて!?」
　属性力エレメーラを巡る運命に身を委ゆだねた少女は、ほどなくその結論へと辿たどり着いた。
「で、でも、どうして……。テイルレッドは、ちゃんとツインテールだった……の、に……」
　イースナは、目を見開いてアルバムを床に落とした。
　そもそもの前提が、思い込みが、大きな間違っていたことに気づいて。
「待てども待てども、メールをくれないと思っていた。あんなにキレイになった私に、トゥアールさんが振り向いてくれないなんて、おかしいって思ってた」
「いや、トゥアールはんはくされロリコンやから、今のイースナちゃんは多分……」
「おっぱいも、トゥアールさんに匹敵するくらい、成長したのに……おかしいって思ってた!!」
「うん、おかしいやろ、盛りすぎやろ」
　メガ・ネの中立的な指摘にも耳を貸さず、イースナは震ふるえる指で眼鏡めがねのブリッジを押し上げ、激情のままにダークグラスパーへと変身した。

「テイルレッド――やつは、トゥアールではない……!!」

◇

　もはや、テレビだけではない。
　ネットを見れば、バナーに映り。道を歩けば、ポスターに写る。
　善(いい)沙(すな)闇(あん)子(こ)の露出は、笑えないレベルで度を越してきていた。
　もちろん、猛烈なプッシュを受けるアイドルがいないわけではない。
　しかし彼女の場合、あまりにも早すぎる。
　巨大な事務所が、リソースの全てをつぎ込んでバックアップしたとしても、ここまで強引にねじ込むなんて不可能だろう。
　俺が最初に抱いた違和感、不安はこれだったのだろうか。
「そもそもこの子、自分っていうより眼鏡ばかり目立たせてるように見えるな……」
　スポンサーは眼鏡販売店。トーク番組でも、ツカミからオチから全部眼鏡。
　本当に眼鏡が好きなんだという、芯の通ったスタンスが、露出の多さに嫌(いや)味(み)を感じさせない要因だろう。
　確かに、この子の熱心な訴えには、俺も心を動かされた。
　現に、彼女の影響で眼鏡をかける女の子は、急激に増え始めている。
　まるで、テイルレッドの軌跡をなぞるように。
　彼女の眼鏡は、世界へ拡散しているのだ。
　まるで――

「□□□□□□!!」
　瞬間、俺は弾はじかれたように立ち上がっていた。
「善沙闇子……この子は……!!」
　一体何な故ぜ、気づかなかったんだ。
　頭の中でこの考えが浮かんだ瞬間、今までの違和感が嘘うそのように晴れ、俺の中で、善沙闇子とダークグラスパーがあっさりとイコールで繋つながった。
　認識の書き換え……認識攪乱装置イマジンチャフか！
　俺が正体を思い浮かべたから、効果が消えたんだ!!
　強引な眼鏡めがねの拡散。属性の浸透じゃないか!!
「あいつは……自分自身で進めているのか!?　アルティメギルの、世界掌握の作戦を……!!」
　ドラグギルディが俺たちの世界でやろうとしたあの作戦……アルティメギルが幾多の世界を滅ぼそうとした手段を、イースナは自分自身の手で促進している。
　何てことはない。彼女は一部隊の作戦を単騎で遂行できる力があるからこそ、エレメリアンと共闘できていたんだ！　戦闘力だけではない、崇ア拝イ対ド象ルとしての力が!!
　眼鏡を守るために戦うという、彼女の言葉の真意が、ようやく理解できた。
　強引に眼鏡への愛を芽吹かせ、それを全て奪った時……ダークグラスパーの支配は、完成する。
　今ならまだ間に合う……止められる。

　俺の願いも虚むなしく、闇やみの戦士との戦いは避けられぬものとして、間近に迫っていた。

キャラクター名鑑 013

神堂慧夢（しんどうえむ）

EMU SHINDO



DATA

性別：女

年齢：35歳

誕生日：：7月6日

身長：159㎝

体重：50㎏

慧理那（えりな）の母で、陽月（ようげつ）学園理事長。生涯ツインテールが信条。親への反抗で勝手に編入した陽月学園で「ある人」と出会い、内なるドMを解放。当時の楽しかった思い出から、娘の慧理那にも自分と同じような三年間を送ってほしいと高等部より陽月学園に編入するよう取り計らった。神堂（しんどう）家の掟に従い18歳で結婚。残念ながら夫もドMだったため、仕方なく交互にドSを演じることで円満な夫婦生活を送っている。

第四章　死闘、光と闇やみのツインテール。

　俺は、芸能人やアイドルを夢中になって応援するという経験は、子供の頃ころから未いまだにない。当然、コンサートやライブになんて行ったこともない。

　そんな俺がアイドルのイベントに参加すると行ったのだから、愛あい香かはさぞ驚いただろう。

　確証があるまで誰だれにも話さない方がいいと思ったのもあるが、俺一人だけがアイドル善いい沙すな闇あん子この正体に気づいているという状況は、何か意味があると結論したのだ。

　初の野外ライブ……数万人規模のイベント。日中開催でも、当然の超満員。たった一か月足らずで、ここまでのし上がる……不可能ではないかもしれないが、異例中の異例だろう。

　当日券が比較的取りやすかったのも、余っていたのではなく、できるだけ多くの観客を集める必要があるのではないかと踏んだ。全て、俺の思い過ごしならば、それが一番いいが……。

　俺は興奮の坩るつ堝ぼに包まれる観客席の中で一人、ジレンマに顔を険しくしていた。

　ツインテールのアイドルは見ていて楽しい。しかしそれが敵では、素直に喜べない。

『コンタク～トも、レ～シィ～ックも、全宇宙から消し去～る♪』



振り付けの中に、眼鏡めがねとツインテールを強調するアクションが盛り込まれているのが興味深い。ツインテールはともかく眼鏡は男性でも気軽にかけられるからか、ファンのマストアイテムのようで、周りの男はほぼみんな眼鏡をかけていて、俺一人浮いてしまっている。

『め～がねめがね、なにもかもめがねになぁ～れ』

ウオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ……!!

怒号のような大歓声が巻き起こる。

何て電波ソングだ……！　あやうく洗脳されてしまいそうだ!!

イースナの眼鏡が、電波増幅器になっているのか……!?

幸い、ツインテールに守ま護もられている俺は周囲の興奮に呑のみ込まれず、一人冷静にパフォーマンスを見守っていた。

そういえば、ニュース番組の紹介で、

『四週連続リリースの第三弾は、眼鏡の切なさを唄うたった第一弾、素直になれない眼鏡が印象的な第二弾から一転、ポップで疾走感のあるナンバーに仕上がっています!!』

と説明されていたのが今の曲だ。

疾走っていうか、常識が失踪したナンバーだと思うが……。

会場の熱が最高潮に達した、その時だった。

「きゃ――――――――っ!?」

空から何かが降ってきて、善いい沙すな闇あん子このいるステージに直撃したのだ。

粉こな微み塵じんになった木材が、紙吹雪のように観客席に降り注ぐ。

演出か、とざわめき出す観客。しかしその正体は、ほどなく大スクリーンで白日の元に晒さらされた。

「エレメリアンだ！」

　いかに世間の危機感がお気楽状態でも、至近距離に怪物が現れれば、パニックになる。

　イースナがきゃーと媚(こ)び媚びな声を出しつつも全力のストライドでダッシュしたのも手伝って、観客は我(われ)先(さき)にと逃げ出し、ステージの周りはあっという間に無人になった。

　ここが広大な屋外ステージで助かった。退路に余裕が無ければ、怪(け)我(が)人がかなり出ていたかもしれない。俺も人の波にさりげなく乗りつつ、ステージを離れる。

「トゥアール！　ケルベロスギルディが現れた！　愛(あい)香(か)と慧(え)理(り)那(な)にも連絡してくれ!!」

　トゥアルフォンで急ぎ基地へ連絡する。

『こっちでも感知しています！　総(そう)二(じ)様、何(な)故(ぜ)その場所に現れると!?　初めからわかってらっしゃったんですか!?』

「悪い、独断専行だったな……あとで全部話すよ……。その必要もなく、今日ここで、戦うことになるかもしれないけどな……!!」

　隣を走っている三〇代ぐらいの男性が、心配そうにこちらを見つめてきた。

「君、気を確かに持ちなさい。延々とツインテール、と叫んでいたが……心配ない。テイルレッドは来てくれるさ」

　そういえば、周りには古代ツインテール語に聞こえるんだった……。一応そこは、「ツインテイルズが来てくれる」と言って欲しかったところだが。

　他の人の避難の邪魔にならないよう徐々に波から離れると、手(て)頃(ごろ)な大型看板の後ろに身を隠した。

「テイルオン！」

　俺は念のため周囲の目を確認し、変身する。

　敵があれだけのインパクトで現れれば、興味本位で遠巻きに見るギャラリーもいない。
　ここなら、遠慮なく戦える！
　ステージにぽつんと立つケルベロスギルディの前に立ち塞(ふさ)がる。
「現れたな、ケルベロスギルディ‼」
「今日は一層早い到着だな、テイルレッドよ……」
　あのアイドルがイースナ……ダークグラスパーだとすれば、ここからが作戦の肝だったはず。何とか食(く)い止めることはできたはずだ。
「残念だったな、これで手間暇(ひま)かけたダークグラスパーの作戦もオジャンってわけだ」
　ケルベロスギルディは三つの頭全てを垂れ、打ちひしがれている。
「確かに、私の作戦は失敗に終わったようだ。今日、ここに貴様が現れる前にな」
「お前の……？」
「最後の仕事と心血を注いだが、欲目をかきすぎたのだ。彼女のポテンシャルならば、眼鏡(めがね)だけでなく三つ編みも拡散してくれるだろうと夢を託し、プロデュースがぶれてしまった……。初めから、彼女の愛する眼鏡を最大限に引き出す演出に徹しなかった、私の落ち度だ」
　ケルベロスギルディは、一人の観客もいなくなった会場を、寂しげに見つめた。
「……ちょっと待て、まさか善(いい)沙(すな)闇(あん)子(こ)のプロデューサーって、お前だったのかよ⁉」
　そういえば善沙闇子も、途中で三つ編みに路線変更してたが……

この線は繋つながらなかった！

「プロデュースは完かん璧ぺきだった。一〇代女子のハートを掴つかむプロモーション、メディア露出。女性ファンの比率が圧倒的に高くなる計算だった。それが、今日のこの有様だ」

　確かに。蓋ふたを開けてみれば、おとこのこ動物園堂々オープンだったな。

「ダークグラスパー様に合わせる顔が無い……。この未熟者の腕を信じ、一分の狂いもなく要求に応えてくれた彼女の仕事を、私は台無しにしてしまった……」

　善沙闇子がダークグラスパーだという証言をついに得たものの、あまりに落ち込むケルベロスギルディへの同情が勝り、何ともいえない気分だった。

「で、でも、ダークグラスパーは眼鏡属性グラスなんだろ？　ほら、観客はみんな眼鏡かけてたぞ。充分拡散してるじゃないか」

　仕舞いには、俺は慰めの言葉までかけ始めていた。

「あのような、愛なき紛まがいの眼鏡めがねを見ても、ダークグラスパー様は喜ばないだろう」

「伊だ達て眼鏡じゃ駄目ってことか？　別にいいじゃないか……アクセサリーとしてでも」

「ではテイルレッドよ。ウィッグのツインテールで、嬉うれしいか？」

「ど、どうだろ、似合えばいいと思うけど……」

　髪が短い女の子が、ツインテールに触れるきっかけとしては、いいと思う。

「それでは、属性力エレメーラは育たないのだ……。一過性の移り気、紛いの心なのだからな……」

　一過性、か……。少し前は、俺もその可能性に怯おびえていたっ

け……。

「いつか大人になる日が必ず来る以上、限りある少女時代を無む碍げにしないで欲しいのだ。………………三つ編みは……三つ編みはね、少女を少女たらしめる聖なる髪型なのよ！　教科書に載せて指導を徹底しない、世界の教育が杜ず撰さんなの。嘆かわしいわっ!!」

　ケルベロスギルディは急にヒートアップし、くねくねしながら語り出した。

「この世界、もうツインテールの寡か占せん状態なのよ！　アルティメギルにとっては、それでもいいのかもしれないわ。でもね、それって刺激が足りないと思わない!?　ツインテールだけじゃなく、いろいろな髪型を楽しんでもいいと思うの!!」

「そ、そうかもな……」

「っはっ……！　ち、違うの、…………いや、違うのだ。これは、本当の私ではない……」

　キャラに気づいたのか、慌てて体裁を繕つくろうケルベロスギルディ。

　やっぱりこいつ、三つ編みに熱中してる時はこうなる……これが地なのかもな。

　俺も女に変身するからだろう、今のこいつの狼ろう狽ばいが、気持ちがわかってしまう。

「そんな、口調なんて気にすんなよ。無理に他のやつに合わせなくったっていいだろ？」

「そうもいかないのよ、肩書きができるとね……」

　俺は雰囲気に呑のまれ、いつの間にか体育座りしていたケルベロスギルディの隣で、同じく体育座りをして空を見上げてしまった。

「三つ編みは……このまま、世界から廃すたれてしまうのかしら……」

「まあ、その気持ちはわかるけどさ……。だけど、今は大人になってもツインテールになる人は多いし、三つ編みだってもう少し頑張れよ」
　レギュラー争いに負けてしまったスポーツ少年を励ます女子マネの気分で、俺は隣で頑張るアイツを応援した。
　いつの間にか、ケルベロスギルディが体育座りのまま俺を見つめていた。俺は照れくさくなり、鼻を掻かく。
　カラオケで流れる安っぽい青春映像みたいな構図だ。何だこれ。
「――――――――ユニットだわ」
「…………はい？」
　ケルベロスギルディはおもむろに立ち上がると、その豪腕で俺の肩を力強く掴つかんだ。
「そうよ、まだ逆転の目はあるわ！　あなたとダーちゃんがユニットを組めばいいのよ！　ああっ、何で気がつかなかったのかしら、すごくすごぉく三つ編み映えしそうなツインテールだわ!!」
「お前それ本末転倒じゃねーか!!」
「ちょっとだけ！　ちょっとだけ三つ編みにしてみましょ、きっと新しい世界が開けるわ!!」
「ふざけんな！　だいたいてめえ、よく考えりゃ人々の心を利用しようとしてたんだ、同情の余地なんてねーじゃねーか!!」
　くそっ、いつの間にかメチャクチャ感情移入しちまってた!!
「いいからアタシに任せてっ!!」

「そーいう悪質なスカウトはシカトしなさ――いッ!!」

「ぎゃ――っ!?」
「かまーお!!」

　ステージが空から降り注いできた衝撃波で爆裂し、俺もケルベロスギルディも叫び声とともに空高く舞い上げられる。
「……それでもしつこい時は、ブン殴ってでもきっちり拒否る。基本中の基本よ」
　世界基準から逸脱したアドバイスを俺にすると、ブルーが空から降り立った。
「もう、ブルーちゃんってば乱暴ね！　アルティメギルで二足歩行する獣って呼ばれてるだけあるわっ!!」
　センスの塊のような二つ名をいただき、テイルブルーは目を逆三角にして歯は噛がみした。
「もうあんたらの基地の場所教えなさいよ……生き残り全員血祭りにして、そんな二つ名嘘うそだったって証明してやるから!!」
　いや、逆に噂うわさが伝説になってしまうだろう、そんなことしたら。
『はっ……すみません総そう二じ様、テイルレッドが体育座りしてる絵があまりにも可愛かわいくて、トリップしてました……。ご心配なく、バッチリ録画しています!!』
　静かだと思ったら、トゥアールは完全に傍観者になってたのか。もう少し早く声をかけて、引き戻して欲しかった。あと、録画映像は消させてもらう。
「待ってくださいまし～」
　テイルイエローも、髪紐属性リボンを発動して飛んできたが、装備の重量のせいか、ブルーよりもかなり遅れての到着となった。
「ブ、ブルー……先行しすぎですわ、もうちょっと待って欲しいですわ！」
「……ごめん、すごいシュールな光景が見えたもんでつい」
　獲得した属性玉エレメーラオーブが一つでも、同時に複数人で使用は可能

なのか。
　すでにウェイブランスを構えていたブルーに続き、イエローもリボンを弾はじいてヴォルティックブラスターを出現させる。俺たちは、三人でケルベロスギルディに対たい峙じした。
「揃ったわね、ツインテイルズ。アタシも覚悟決めなくちゃ」
　ケルベロスギルディは、三対一というこの不利な状況で動じていない。
　それどころか、腹を据えたようにひどく落ち着き、俺たちを冷静に観察している。
「さあ、演出家の真骨頂、見せてあげるわぁ！　三つ編み属性トライブライドの神髄、た～っぷり味わいなさい!!」
　ケルベロスギルディの輪郭が小刻みにぶれ、二体、そして三体と予備動作もなくあっさりと分離した。
　首が一つずつになった、三体のケルベロスギルディが出現する。
「……それじゃただのドッグギルディじゃん……」
　ブルーの辛しん辣らつなツッコミに反論し、猛烈な勢いで突進してくる。
「お黙り！　あなたはオーディションで落選よっ!!」
　ドッグ……いや、ケルベロスギルディとの戦いが始まった。

「はあああああっ！」
　大上段からの斬り降ろしが、紙一重で避わされる。
　ほどなく、戦いは俺たちに優勢となった。
　考えてみれば、三体に分身するんだ。心の力である属性力エレメーラは完全な質量保存の法則が適用されないだろうとはいえ、全く同じ力を維持できるはずがない。
　それぞれ幹部エレメリアンを撃破した経験のある俺たち三人な

ら、平均よりやや劣る力の相手と互角以上に戦えるのも当然だ。
　しかし、あるいはその油断の誘発さえ、こいつの〝演出〟だったのかもしれない。
　直線上に並んだブルーとイエローを、前後から挟み撃つように蹴けり入れ、バランスを崩させるケルベロスギルディ。
　瞬間、その目が大きく見開かれた。
「気をつけろ、二人とも!!」
　しかし、忠告は今一歩のところで遅かった。
「奥義！　ツインテールの聖花輪フラワーリングよ!!」
　背中合わせに立っていたブルーとイエローのちょうど間を、滑るようにすり抜けていったケルベロスギルディ。
　その一瞬で、予想だにしない恐ろしい事態が、二人を襲っていた。
「な、何てことすんのよ！」
「痛いっ……ブルー！　無理に動かないで下さいまし!!」
　二人のツインテールがそれぞれ相手の房とで編み込まれ、固く緊縛されてしまったのだ。
　相手の状態を確認できない背中合わせで縛られたせいで、満足に動くことすらできずにいる。
　無理に動けば、相手のツインテールを強引に引っ張ってしまうからだ。
　こんな大技を狙ねらっていたなんて……何て奴やつだ!!
「ただの三つ編みじゃないわ、アタシの力を込めて編んでいるから簡単には解ほどけないわよ！　けれどあなたたちツインテールの戦士が、自分でツインテールを斬り落とすなんてできないでしょお!?　アタシの勝ちね!!」
　二人のツインテールが絡からみ合い、縄跳びの縄のように交互に揺

れている。

　思わず走っていって、あの輪っかの中に飛び込みたい衝動に駆られる。

「…………え、あ……」

　顔が熱くなって、頭がクラクラしてきた。

　な、何でだ、こんな時なのに、二人のツインテールを見てたらすごくドキドキしてきて……。

『えええええ!?　私のおっぱいはいつも軽くスルーなのに、そんなので欲情するんですか!?』

「このアホ――――――――ッ！　これ以上そいつに変な性癖植え付けるなあああああああああああ!!」



「痛い痛い、動かないでくださいまし、ブルー!!」
三人の叫びを聞いて、俺は我われに返った。
　見とれている場合じゃない。身体からだ中にきつく巻き付いた鎖くさりを引き千ち切ぎる思いで、二人の絡からみ合ったツインテールから目を逸そらした。
「これで形勢逆転、三対三じゃなくて、三対二……いーえ、一ねっ!!」
　三体のケルベロスギルディが、一斉に俺に襲いかかってくる。
　自分自身と息を合わせるなど、造作もない。コンビネーションと呼ぶのも烏お滸こがましい、当然の連携だ。
　縦横無尽に飛び跳ね、多角的な攻撃を仕掛けてくるケルベロスギルディに、俺は防戦一方になった。
「ブルー！　とりあえずわたくしにお任せください！　二人で闇やみ雲くもに動こうとするより、わたくしがアウトレンジからレッドを援護する方が効果は望めますわ!!」
「わ、わかった」
　横から襲いかかってきたケルベロスギルディの一体が、扇撃ちされた機銃掃射をまともに受け、もんどり打って倒れる。
「イエロー！　助かった!!」
　当初の役割分担通りの、絶妙な後方支援だ。この状況で、これは頼もしい。
「何とかご助力いたします！　目の前の一体にのみ集中なさってください！」
　バルカンを撃ち尽くし、右肩のアーマーを脱衣パージするイエロー。
　運悪く、それは至近距離からブルーの後頭部に直撃してしまった。

「いったー！　ちょっと、脱ぐの我慢してよイエロー‼」
「けれど、レッドの援護をしなければ！　そのためにはどうしても脱いでしまうのですわ‼」
「そこをイコールで結ばないで我慢しなさいって言ってんのよー！　もーいい！　あたしがやるわ‼　──髪紐属性リボン‼」
「お待ちください、ツインテールが引っ張られて……痛いですわっ！」
「うわ、ちょっと、バランスが…………──────っ‼」
　普段俺を運んでくれているのとは違って、髪に直接重しを括くくり付けて飛ぶようなものだ。
　当然体勢を維持できず、すぐに二人まとめて墜落してしまった。
「ブルー！」
　ケルベロスギルディは一旦三体で横並びに整列し、薄ら笑いを向けてきた。
「んふん、あの二人の三つ編みが気になって仕方なーい？　テイルレッドちゃん、あなたも三つ編みにしましょー⁉　アタシ、最高のアイドルにプロデュースしてあげる！」
「俺が気になってるのは絡み合っているツインテールだ。悪いけど、三つ編みじゃない！　それにこれ以上、アイドル扱いが大きくなっても困るんだよ‼」
　交差し結ばれ、輪を描く二人のツインテール。
　大宇宙に溶け込むような、雄大な母性を、俺はそのツインテールに見たのだ。
「遠慮しなくていいのよテイルレッドちゃん！　うふ、わかるわ、お洒落しゃれに興味が湧わくけど素直に言い出せない、微妙なお年とし頃ごろなのよね！　ツインテールもいいけれど、今日の気分はなんか三つ編み、そんな願いをアタシが叶かなえてあげちゃうっ‼」

「断る！　三つ編みが好きか嫌いかじゃない、俺はいつだってツインテールでいい!!」
「お洒落に背を向けるの!?」
「ルージュもファンデもシャドーもいらない！　お化粧なんて必要ない、俺のお洒落は唯一つ！　そう、ツインテールだ!!」
「んまあ、素晴らしーいフレーズだわ！　いただきよ！　４ｔｈシングルのＢサビに使ってもらっちゃいましょーお!!」
　編曲家としての顔も覗のぞかせるケルベロスギルディ。
　この短期間で四枚目のシングルまで完成させる多作ぶり、侮あなどれない奴やっだ。
「お前らはツインテールが一番の目的なんだろ!?　無理に三つ編みにする必要なんてないじゃないか!!」
　俺のツインテール属性を狙ねらっているはずのこいつが、何な故ぜ執しっ拗ように三つ編みを強要するんだ。
「……うふ、痛いところを突くのね。そうよ、それが、アタシが一度、戦いをやめた理由」
「何」
　またも哀愁を漂わせ、切々と語り出した。
「ツインテールと双そう璧へきを成す髪型の属性を持つ最強のエレメリアンは、存在そのものを危険視されちゃって、首領様直々に封印されちゃったって聞いたわ……」
「……ツインテールと……双璧……？」
「ツインテールを愛するアタシたちアルティメギルにとって、髪型の属性を持って生まれてきたエレメリアンは、存在そのものが禁忌なのよ」
　確かに……今まで戦ってきたエレメリアンの持つ属性は、その全てが、ツインテールと共存が可能だ。

リボンも、ウサ耳も、巨乳貧乳も、文学も。その他全てがだ。
引き立て、高め合いこそすれ、障害にはならない。
だが同じ髪型の属性では、干渉してしまい、相殺される。
最強の属性力（エレメーラ）、ツインテールを大前提としたこいつらの侵略の中では、髪型の属性持ちは日陰者になってしまうのも無理はない。
「どれだけ戦っても自分を満たせない……文字通りアタシは、心の支えを失ったのよ！」
ケルベロスギルディは口部に火球を練り上げ、俺に向け放ってきた。
「うわあ────っ!!」
三方向からの同時攻撃を防ぎきれず、俺は大きく吹き飛ばされ、微（かす）かに残っていたステージの残（ざん）骸（がい）に叩（たた）きつけられた。
『お二人とも、遊んでないで何とかレッドを援護してください！』
「だから、やろうとしてるわよ！」
未（いま）だその縛（いまし）めに苦戦しているイエローとブルー。
「属性玉（エレメーラオーブ）──文学属性（ブック）!!」
しかし、イエローが属性玉変換機構（エレメリーション）を発動させると、イエローの顔の前に、小さなスクリーンのようなものが形成された。
スクリーンには、簡素に描かれたケルベロスギルディの全体像に、無数の文字列が繋（つな）がれている。
「わかりましたわ、ケルベロスギルディの弱点が……!!」
「え!?」
「一体の時では、どんなに素早く攻撃しても瞬間分離してダメージを拡散されてしまう。三体に分離している間、間髪容れずに全てを攻撃し撃破する……これしかありませんわ！」
分離している間に間髪容れず倒す、つまり……。

「俺たち三人で、ピッタリ息を合わせろってことか……!!」

　二人を気にかけながら、ケルベロスギルディが追撃で放った火球を何とか避け、距離を取る。

「ちょっとすごいじゃない、こんな属性玉エレメーラオーブいつ手に入れたの!?」

　あれは……オウルギルディの属性玉エレメーラオーブか。さすがイエローは、こまめにテイルギアをチェックして、すでに情報を仕入れていたらしい。

「うおっ……と！」

　直線だけではなく、弧を描いて飛来する火球まで織り交ぜ始めた。ブレイドで間一髪弾はじく。

　剣や触手などの武器は持っていないが、多対一の状況では、奴やつのように距離を取って攻撃する方法を備えている方が厄介だ。

「だけど倒し方が分かってもどうすんのよ、レッドの援護だって満足にできないのよ!?」

　蟹かに歩きで俺とケルベロスギルディの間に割って入ってくる二人。

　しかしそれでは的になるだけだ。案の定、余裕で躱かわせる距離から放たれた火球に対処できず、二人は吹き飛ばされてしまった。

「ブルー！　イエロー!!」

　折り重なって倒れる二人が、何とか手と手を取って立ち上がる。

「ブ、ブルー！　こうなれば……今こそ、あの属性玉エレメーラオーブを使う時ですわ!!　今度は、わたくしたち二人で!!」

「……まさか……」

「ブルーが貧乳属性スモールバスト、わたくしが巨乳属性ラージバストを同時に発動し、この窮きゅう地ちを脱するのですわ!!」

「何よその割り振り!?　何でそうなったか基準をはっきりと言いな

さいよ!!」
「わたくしとブルーの胸の大きさ的に、それが正しいかと……」
「ホントにはっきり言いやがったわねキ――――――――ッ！　変身しなきゃ！　変身しなきゃギリギリあたしの方が！　あたしの方がおっきいのに!!」
「痛いですわ、ツインテールが、ツインテールが抜けてしまいますわ!!」
　ま、また喧嘩(けんか)し始めた！　二人が的にされないよう、俺は大きく距離を取ってケルベロスギルディの注意を引き付ける。
『愛香(あいか)さん！　慧理那(えりな)さんの言う通り貧乳属性(スモールバスト)を使ってください！　愛香さんなら使えるはずです！　というか愛香さん以外に使える人類はいません!!』
「嫌(いや)よ、効果もわからないのに！　持ち主みたいに身体(からだ)からウネウネ触手が出てきたらどーすんのよ!!」
『さすがにそこまでグロくはならないはずです、万一生えたとしてもせいぜい一本でしょう、後で特殊なプレイにお役立て下さい!!』
「絶対嫌――――――――――――ッ!!」

「ぐあっ！」
　集中砲火を浴び、ついに俺はブレイザーブレイドを手放して倒れてしまった。
　ケルベロスギルディは一体に戻って、三つの口から生み出した火球を特大の一弾にまとめ、練り上げてゆく。
「あなたも戦いを休んで、おねむしちゃいなさい。アタシがゆっくり三つ編みにしてあげるわ。次に目を覚ました時、新しいアナタデビューよ!!」
　万事休すか……！

放たれ、迫る火球を、俺は為す術すべ無く見つめているしかなかった。
「レッド!!」
ブルーとイエローは、ツインテールに負担がかからないように二人で手を組み合い、ダンスのようなステップで俺の前に躍り出た。
「危ない、離れろ!!」
しかしブルーは、観念したように左腕を突き出した。
「え、属性玉変換機構エレメリーション――」
〈貧乳属性スモールバスト〉
その先はどうしても自分でいうのが嫌だったのか、珍しく発動の補助電子音声ナビゲートボイスだけが聞こえた。
瞬間、俺たちの前に巨大な光こう膜まくが現れ、特大の火球を押しとどめる。
「強力な鉄壁の防御膜だわっ！　押し切れないいいいっ!!」
ケルベロスギルディがどれだけ力を込めても、光こう膜まくはビクともしない。
「……すごーい、使えるー」
白目を剥むいて新たな力を絶賛するブルー。
「属性玉エレメーラオーブ――巨乳属性ラージバスト!!」
続いて、イエローが元気よくはきはきと発動を宣言した。
遥はるか彼方まで広がる永久凍土のような絶対の平面にて火球を押しとどめていた光膜が、ハンモックのように大きくしなっていく。
「名付けて！　ほらブルー、せーの!!」

「「リフレクション・バースト!!」」

火球がケルベロスギルディ目掛け反射される。

　事前に打ち合わせもなく技名がハモったのは奇跡に近いが、テンションも表情も完全に真逆なのが涙を誘う。
　鉄壁の防御膜で防ぐだけでは終わらず、さらに極限の弾力を付加し、攻撃の威力を倍加させて跳ね返したのだ。
　巨乳属性ラージバストの効果の範囲の狭さを補った、まさに二人にしかできない合体技だ!!
「いやんっ、嘘うそぉ!!」
　予想外の反撃に、ケルベロスギルディの防御が遅れた。
　分離が間に合わず、僅わずかに技の直撃を受けたのだろう。支配力が失われて、ブルーとイエローの緊縛が解けた。
　たたらを踏みながらも、間髪容れず武器を構えるブルーと、躊躇ためらいもせず武装を全脱ぎするイエロー。
「今ですわっ！」
　俺は前転して落ちていたブレイドを拾い上げると、二人に遅れまいと目の前の一体を捕捉した。

「「「完全解放ブレイクレリーズ」」」

　空中で分離したばかりの三体には、迫るオーラピラーを防ぐ手立ては残っていない。
　展開したブレイドとランス、合体したユナイトウェポンから放たれた属性力エレメーラの球体が、今度こそ確実に、三体のケルベロスギルディを捕縛し、円柱の結界を作り上げた。

「グランドブレイザ────────────ッ!!」
「エグゼキュートウェ───────────ブ!!」
「ヴォルティックジャッジメント────────ッ!!」

　発動した三人の技が、寸分の狂いなく同時に三体を貫く。

　空中で身体からだ中から火花を散らしながら一体に戻り、ケルベロスギルディは力無く地面に落下した。

「やった……！」

　強力な特殊能力に加え、策も弄ろうしてくる強敵だった。

　俺たちは、何とか勝てたんだ。

「ステキよ、あなたたち……」

　最後の気力を振り絞って立ち上がるケルベロスギルディ。今までのどこか諦め半分だった表情は、影もなかった。

「アタシ、最後に……三つのツインテールが心を一つにした姿……本当の三つ編みを見ることができたのね……悔いなく……逝いけるわ……」

「ケルベロスギルディ……」

「でもねレッドちゃん、忘れないで……。消えゆく属性を、憂う者がいるって……」

　俺は、無言で頷うなずいた。

　わからないはずがないだろう。

　世界がこれほどにツインテールで溢あふれるまで、俺はいつも、そんな悲しみと戦っていたんだから……。

　爆散し、俺の元に飛んできた属性玉エレメーラオーブ・三つ編み属性トライブライドを回収する。

「あ、うううう……」

　気がつくと、ブルーは地面に横たわり、プルプルと震ふるえていた。

　イエローが慌てて抱き起こし、介抱している。

「ああっ、ブルー！　しっかり!!」
『フッ……拒んでいたモノを受け入れたせいで、身体が耐えられなかったのでしょう。放っておいてください慧え理り那なさん、そのうち愛あい香かさんも自分から喜んで欲しがるようになります』
　……貧乳の属性玉エレメーラオーブのことを言ってるんだよな……？　トゥアールは何な故ぜ、そんなに情感たっぷりにささやきかけてくるんだ。

「□□□□□□！」

　脊せき髄ずいを駆け上がる悪寒に衝つき動かされ、咄とっ嗟さに背後を振り向く。
　ステージがあった場所のずっと奥、敷地を隔へだてる金網の向こうから、こちらをじっと見ている人影があった。
　ゆうに三キロは離れている。テイルギアで視力が強化されていなければ、俺も気づかなかっただろう。
　だが、その視線は……射殺すかのように凄そう然ぜんと、俺を捉えて放さない。
　間違いない、あいつだ……！
「イエロー！　ブルーを頼むぞ！」
「どこへ行くんですの!?」
「すぐ戻る……ちょっと気になることがあるんだ!!」
　イースナは、俺たちの戦いをずっと見ていた……。
　ここで逃がすわけにはいかない。

　　　◇

俺が駆け出すと同時に、すぐに彼女も背を向けて歩き出した。

野外会場から程離れ、いよいよ草木が鬱うっ蒼そうと茂る山林に出た時……彼女は、静かに立ち尽くしていた。俺の方が、誘おびき出されたのか。

ケルベロスギルディとの戦いでも避難せず、こうして戦いを見ていた少女。

新鋭の人気急上昇中アイドル、善いい沙すな闇あん子こ。

フリフリのスカートをひらつかせながら、彼女は幽鬼のような足取りで俺に近付いてきた。

しかし、笑顔が消えたこと以上に決定的な何かで、彼女からはアイドルとしてのオーラが完全に消え去っていた。

「雰囲気……違いますか？　変身を、解除して、いますから……」

「じゃあ……善沙闇子はイースナじゃなく、ダークグラスパーに変身した状態だったのか!?」

「そうしないと、私、人前で笑えないから……」

まるで、変身した状態こそ本当の姿だと嘯うそぶくように。アイドルは、仮面を脱いでいた。

「私の正体に、気づいていたんですね……」

全てを確信し、負の感情をみなぎらせた瞳。

「……やっぱり……貴女あなたは、トゥアールさんじゃないんですね、テイルレッド」

「□□□□□□!!」

正体に気づいたのは、俺だけじゃなかったようだ。

いや……正体など問題ではない。下へ手たをすれば、俺が男であると知っても、意にも介さないだろう。

テイルレッドがトゥアールではないというその事実一点が、イースナにとっての全てなんだ。

「許しません……私の……私のトゥアールさんの属性玉エレメーラオーブを……大切なものを、あなたは無む理り矢や理り奪ったんですね!!」

『何かすごい素敵なフレーズですね、一応保存しておきましょう』

　嬉うれしそうに通信してくるトゥアール。当事者だろ、お前!?

「言ってる場合か、もう説得は通じそうにないぞ！」

　イースナは眼鏡めがねのブリッジを指で押し上げ、深く静かに、変身機構起動略語スタートアップワードを紡つむいだ。

　偽りの笑顔を人々に振りまくアイドルではなく。戦士へと、変身するために。

「グラス・オン……!!」

　テイルギアと全く同じだ。

　光が全身で爆裂していき、一瞬で鎧よろいを身にまとう。

　唯一つ違うのは、その光そのものだ。……赤も、青も、黄も。光は存在する。その三色の照明をどれか一つでも見たことがない人間など、まずいないだろう。

　だが……黒い光など、誰だれが見たことがあるだろうか。

　彼女がほとばしらせているのは、光のように輝く闇やみ。

　黒い属性力エレメーラ……完全なる、闇の力だ。

　ついにアイドルはヴェールを脱ぎ、ダークグラスパーとしての全ぜん貌ぼうを露あらわにした。

「わらわは、トゥアールを追い求め、こうして戦士になり、世界を渡った。貴様には説明の義務がある。答えるのじゃテイルレッド、何な故ぜ貴様がトゥアールのツインテール属性を持っている!!」

　戦いのデータを何度か見たような口ぶりだったが、仮面ツインテールが全てを明かしたドラグギルディとの戦いは記録されていないのか……。

「トゥアールは、自分の世界を守れなかった罪滅ぼしに、他の世界を守ろうとしてくれた。この世界で一番強いツインテール属性を持つ俺に……自分のツインテール属性で作ったテイルギアを託してくれたんだ!!」

　これ以上、説明のしようがない。そして、これで十分のはずだ。

「奪ったのではない、託された。そう言うのじゃな」

「そうだ」

　ダークグラスパーのツインテールが、僅わずかに鳴動する。まるで、俺のツインテールと共鳴するかのように……。

　今彼女は何を考え、俺をどう思っているんだ……。

「今度はお前に答えてもらうぞ。それだけトゥアールを慕っていたお前が……何故、アルティメギルに荷担する！　トゥアールが戦っていた相手じゃないか!!」

「そうじゃの。その前に……ケルベロスギルディを倒したのは見事じゃった。おかしな奴やつじゃったが、信念は本物であった。前線に赴おもむかせるため隠居から引っ張り出したわけではないというのに、先走りおって……。それは……わらわの役目だったのじゃ……」

　ケルベロスギルディが演出力ちからの及ばなさを悔やんでいたように、この子も、奴やつを……。

「三つ編み属性トライブライド……古めかしい髪型ゆえ、どの世界でも徐々に消えゆく、悲しい属性を持ったゆえに……見出だした希望から、目を逸そらせなんだか……」

「消えゆくだと!?　白々しい！　それこそ、無む理り矢や理り奪っているのはお前たちじゃないか!!」

「奪わずとも消える属性に、何の遠慮がいる？」

「何!?」

「わらわは眼鏡めがねを愛している。トゥアールと引き合わせてくれたツインテールにも感謝はしておるが、最も守りたいと願うのは眼鏡じゃ。……じゃが、眼鏡属性グラスは、エレメリアンから守るまでもなく、世界から消えつつある。理由はわかっていよう」

　文学属性ブックと同じか……。あるいは、三つ編み属性トライブライドとも。

　科学が発達すれば、視力の矯正法はさまざまに増える。眼鏡は、役目を終えてしまうんだ。

「貴様にもわかるはずじゃ、わらわの苦しみが！　愛するものが理解されず、やがては消えゆく無念さが！　コンタクトだレーシックだと、眼鏡の美しさを阻はばむ邪法が世にはびこる理不尽が!!　眼鏡を外せば美しい、眼鏡を外せば大人の女性になれるなどと、唾だ棄きすべき醜しゅう聞ぶんを吹聴する世への憎悪、わかるはずじゃ!!　テイルギアをまとえるだけのツインテール属性を持つ貴様が、このような思い、味わったことが無いはずがなかろう!!」

　──わかってしまう……。

　その通りだ。ツインテールも、大人になるために不要な要因ファクターとして切り捨てられる、悲しみを秘めた髪型だ。

「眼鏡属性グラスもまた、ツインテール属性と同じく強力な属性！　それはあるいは、この悲しみに起因しているのやも知れぬ！　似ておるのじゃ、ツインテールと眼鏡は!!」

　同じなのか。ツインテールと、眼鏡は。

　ダークグラスパーも、眼鏡を守るために戦っているというのか!!

「わらわがアルティメギルに与くみするための条件───それは、眼鏡属性グラスだけは奪わぬことじゃ」

「何だと……!?」

「たとえ世界の属性全てを奪い尽くしても、眼鏡だけは残す。眼鏡

だけは守る。奴らは一度も約束を違たがえておらぬ。事実、侵略された無数の世界でも、眼鏡だけは残っておるからの」
　イースナのシングルの歌詞を思い出して、ぞっとする。
「やっぱり……お前がアイドル活動をしていたのは!!」
　拡散していたんだ……眼鏡属性グラスを。しかし、奪うのではなく……逆に守るためだったなんて。
「アルティメギルの作戦を前倒ししているだけじゃ。本来何も知らず利用されるはずのツインテールの戦士が、積極的に手を貸している。ただ、それだけじゃ」
「ただそれだけ、だって!?」
　全ての趣味嗜し好こうが消滅した灰色の世界で、眼鏡めがねだけが残っていることに満足するなんて……この子は、眼鏡に取り憑っかれている……！　何が、この子をこうしてしまったんだ!!
「本気で言っているのか！　トゥアールやお前の世界ふるさとを滅ぼした作戦を……！　たった一人で戦い続けたトゥアールを踏みにじった卑劣な手段を、お前は自分で再現しているんだぞ!!」
　その言葉に、ダークグラスパーは僅わずかに動揺を見せた。
「お前なんかにトゥアールのツインテール属性は渡せない！　渡してたまるか!!」
　俯うつむき、拳こぶしを握り、再び顔を上げた時……ダークグラスパーは、氷のように冷たい眼光をぶつけてきた。
「よく吠ほえるわ。その卑劣な手段とやら、貴様も再現しておろうに」
「何!?」
「善いい沙すな闇あん子この台頭──急激に世界へ浸透してゆく眼鏡。それに違和感を覚え、わらわの正体を貴様だけが見破り、認識できたのは、この道筋、貴様にも覚えがあるからであろう？」

確かに、俺よりイースナと付き合いが深いはずのトゥアールは、何度善沙闇子を見ても、違和感を覚えているようには見えなかったが……。トゥアールなら認識を撹かく乱らんされても、憎むべきこの手段には真っ先に思い至るはずだ。どうして、俺だけが気づいた⁉

「わらわは、この方法で多くの世界を掌握してきた……。だが、この世界では、ほとんど効果がなかった。せいぜい雑多なアイドル止まり、わらわに心から心酔する下僕ファンが、ほとんどおらぬ。アルティメギル最強の演出家の力を借りてもじゃ。……何な故ぜじゃと思う」

俺ははっとして、自分のツインテールを見つめる。

「そうじゃ。もはやこの世界には、テイルレッドという最強の偶アイ像ドルが根を張っておる。わらわがどれだけ力を尽くしたとて、民衆の心は掌握できぬ。テイルレッドよ。貴様はもはや、この世界を支配しておるのじゃ。貴様もまた、支配者グラスパーなのじゃ!!」

「俺が、支配者──？」

「貴様とわらわ、何が違う。貴様もまた、ツインテール属性を強制的に世界に芽吹かせ、それで人々の心を縛る、異形の存在……奪うか押しつけるかの違いじゃ！　アルティメギルと何も変わらぬのじゃ!!」

確かに、テイルレッドに憧あこがれてしまった人は多い。学校だって世間だって、毎日お祭り騒ぎだ。けどそれは、俺の戦う目的の結果でしかない。

「いいや違う！　俺は奪いも押しつけもしない！　ただ、守るだけだ!!」

ツインテールを守る───その願いの、確かな結果なんだ!!

「……ほう。揺るがぬか……神となる覚悟はできておるようじゃな」

「何でそこまで大げさな話になるんだよ……。俺はツインテールが好きだ。それだけだ!!」

　木々の壁を意にも介さず全力疾走で突き破り、ブルーとイエローが駆けつけてきた。
「レッド！」
「フ、他の色も追いついてきたか。これ以上の問答は無駄のようじゃの……」
　ダークグラスパーは、底知れぬ存在感を放つ眼鏡めがねのブリッジを、再び指で押し上げた。
「面倒じゃ、三人まとめて葬ってくれる」

　ダークグラスパーの眼鏡が妖あやしく発光する。
「眼鏡よりの無限渾沌カオシツクインフイニツト！　ツインテイルズどもよ、属性力こころの闇やみの深ふ淵ちへと堕おちよ!!」
「何っ……何だこれは!?」
　放たれた光輪が∞の形を描き、俺たちの周囲を取り巻いていった。
「せめてもの情けじゃ……。終わることのない幸福に包まれ、消えてゆけ!!」
　意識が沈んでゆく。
「うわあああああああああああああああああああああああ!!」
　ブルーたちに手を差し伸べる間もなく、俺の意識が光に溶け込んで消えてゆく。
　世界が消える。生まれ変わる。
　斑模様マーブルに溶けた景色が、やがて、穏やかな日常を取り戻していった。

「……あれ……？」

　気がつくと俺は、アスファルトの地面に尻しり餅もちをついていた。

　いつもの空。いつもの通学路。いつもの……世界だ……。

　いつもの、って何だ？　世界は一つじゃないか。

　ふと、腕時計を見るように、何気なく右腕を見る。

　もちろん、何もない。

　何だ、この心の渇きは。

　胸にぽっかりと穴が開いてしまったような、奇妙な喪失感が去来する。

「早く早くー！」

「待ってよー！」

　ランドセルを背負った女の子が、友達と手を繋つないで目の前を走っていく。

　幼い無邪気さそのままに、揺れ踊るツインテールもまた、あどけなく輝いている。

　部活の朝練だろうか、ユニフォームを着て大きなバッグを背負った女子高生。

　歩道で談笑する主婦。

　バス停で、携帯を弄いじりながらバスを待つＯＬ。

　みんな、みんなみんな、ツインテールだ。

　世界は、ツインテールなんだ。

　何だ、何も失われていないじゃないか。

　こんな素晴らしい世界に、俺は何の不満があるっていうんだ？

「ちょっと、何で先に行っちゃうのよー！」

　幼おさな馴染なじみの愛あい香かが、息を切らして走ってきた。

　そうだ、俺は何で、いつも一緒の愛香を置いて家を出てしまったんだろう。
「ごめんごめん」
　うん。やっぱり、愛香のツインテールが一番だ。子供の頃ころからいつも見てきたんだ、世界がツインテールなら、その中心はきっと愛香なんだろう。
　俺は何気ない日常、何気ない幸せを噛かみしめながら、幼馴染と二人、通学路を歩いた。
　緩やかに、穏やかに流れていく時間。
　愛香と登校して、学校では慧え理り那なともお喋しゃべりをして。
　愛香と慧理那と一緒に家に帰ったら、トゥアールが出迎えてくれる。
　幸せな毎日だ。

「ね、そーじ、一緒にお風ふ呂ろ入ろっ」
　ソファーに座って一緒にテレビを見ていた愛香が、俺の肩に頭を乗せ、甘えた声を出してくる。
「あ、ずるいですよ愛香さん、私も一緒に入ります！」
「それならわたくしも……今日は、お泊まりをするとお母様に伝えてきましたの！」
　女の子三人に背中を押され、母さんに冷やかすような目で見送られ。俺は、バスルームへと向かった。
　あれ？
　こんなこと、あったっけ？
「何してんのそーじ！　早く脱いで脱いで！」
　それが当たり前であるかのように、愛香は躊躇ためらいなく服を脱ぎ、脱衣籠かごの中に入れていく。

　まあ、これが普通なら……俺も、恥ずかしがってちゃ駄目か。
「そーじったら、いつまで経っても恥ずかしがってるんだからっ」
　下着まで脱ぎ終わった愛香は、最後に、ツインテールに結んでいるリボンに手をかけた。
　そこで初めて、拭ぬぐいがたい違和感が俺の胸を鷲わし掴づかみにした。
　ここは……本当に、いつもの世界なんだよな？
「愛香さん！　すっかり一番さん気取りで、気に入らないですよ！　どうせ着衣でも全裸でも変わらない性的魅力セックスアピールしか持ち合わせていないくせに!!」
　いやいや。いつものトゥアールじゃないか。トゥアールは、こうだった。
　愛あい香かと他愛たわいのない喧けん嘩かをして、仲良くじゃれ合って。それを慧え理り那なが羨うらやましそうに見つめて……。
「そーいうあんたは、またツインテール解ほどいてるじゃない！」
「そうですわ、身だしなみがなっていなくてよ、トゥアールさん!!」
　おい。
　二人とも、何を言ってるんだ。
　だって、トゥアールは。トゥアールがツインテールにできないのは、俺たちの──。
　俺たちの、た、め……？
　こめかみを太針で注さされたような、鋭利な頭痛に襲われる。
「むー。それじゃあ、私もツインテールにしますから、見ててくださいね、総そう二じ様！」
　トゥアールは髪を束ねて掬すくうと、リボンを口に咥くわえ──

怒りに──包まれる。
とめどもなく溢あふれ出る激しい怒りで、俺の意識は覚かく醒せいした。

視界の全てが闇やみに染まっている。あまりに溶け合いすぎて、ついに黒になってしまった極彩色。人の心を、全ての色を内包し、やがて暗黒に終着した世界。
それが……カオシックインフィニットの全容か……!!
ここは依然として、戦場の只ただ中なかだ。
終わりなき幸福ツインテールなんて──どこにもない。
「────!? な、何じゃと……!!」
驚きょう愕がくの表情が、斑まだらの隙すき間まから垣間見える。
波状にうねる黒い大気が、俺とダークグラスパーを隔へだてている。
「チンケな幻覚だな」
「き、貴様……！」
「いや、それだけ俺が単純馬ば鹿かってことか。俺の心の深しん淵えんなんて、足がつくぐらい浅かったみたいだ。けどな……たとえ浅くたって、地平の果てまで広がってるだろうぜ……!!」
「飲み込まれなかったというのか!? ありえぬ！ 何な故ぜじゃ、何が貴様の心を揺さぶった！」
愚問だ。俺の心を揺さぶるもの。
──ツインテール以外にあるものか!!
「やっぱりお前なんかに、トゥアールのツインテール属性は渡さない」
確かにあの幻覚は……久々に、ツインテールで俺の心を揺さぶった。怒りでな。

「トゥアールが、ツインテールを結ぼうとしたんだ」
　初めて変身したあの日のように……全てをかなぐり捨てるほどの怒りで、俺の身体からだを包み込んだんだ。
「俺たちのために……自分の世界への罪滅ぼしのために、ツインテールを捨てたトゥアールが、笑顔でツインテールにしようとした！　たとえ幻覚でも……やってはいけないことをしたんだ、お前は!!」
『総そう二じ様……』
　通信で聞こえるトゥアールの声は、少しかすれていた。
　俺たちが闇やみに呑のみ込まれている間、ずっと、ずっと……声をかけ続けていてくれたのだろうか。
「…………それを。はは、貴様は……許せなかった！　仲間への侮辱が、貴様の心に火を点っけたというのか!!　ふはははははははは!!」
　ダークグラスパーは、俺の視線を真っ向から受け止め、高笑いを上げた。
「貴様の燃え盛る炎は、まさしく太陽」
　俺の前までゆっくりと歩み寄ると、その細指をそっと黒い膜にかけた。
「太陽の炎をそのツインテールに宿す幼女よ！　カオシックインフィニットから這はい上がってきたのは見事であった！　だが、それまでよ！」
　指が俺に触れることはない。
　火花を散らし、術者であるダークグラスパー自身の手をも容赦無く弾はじき飛ばした。
「一度発動すれば、カオシックインフィニットは相手を完全に呑み込むまで消えることはない！　しかし貴様は、〝世界〟を拒絶し

た！　その闇は、世界から切り離された無限の暗黒！　宇宙じゃ！　太陽がどれだけ猛たけり燃え盛ろうと、宇宙の暗黒から比すればまさしくちっぽけな点に過ぎぬ！　己の無力さを知れ！　テイルレッドよ!!」
　霧のように虚うつろで、シャボン玉のように儚はかないはずの闇膜が、決定的に俺たちの〝世界〟を隔へだてていた。
「ッ……うおおおおおおお……!!」
　俺は、あらん限りの力を振り絞り、広がる闇を拒絶する。
「無駄じゃ！　貴様は宇宙空間で一人孤独に、遥はるか彼方に見える地球を目指して手足を掻かいているに過ぎぬ！　半端に目覚めさえしなければ、その究極の絶望に囚とらわれることなどなかったものを!!」
　これが……こんなものが絶望だと？
　あの虚飾に塗まみれたツインテールこそ、地獄だった!!
「偽りのツインテールに心が飲み込まれることの方が、俺にとっては耐え難い絶望だ!!」
　トゥアールは言っていた。
　異世界とは、扉一枚で仕切られているような近所に在る存在なのだと。
　だったら、手を伸ばして届かないはずがない。
　俺が、ツインテールの待つ世界へ帰れないはずがない!!
「帰してもらうぞ！　ツインテール溢あふれる俺たちの世界へ!!」
　全身から、テイルギアからほとばしる炎。
　太陽じゃ足りないのなら、俺は、それ以上にこのツインテールを燃やす!!
「バ……バカな!?　亜空間そのものを燃やし尽くすというのか!?」
「ダークグラスパー！　お前がどんな強大な暗や闇みで呑のみ込もう

と、俺は必ず這はい上がる!!」
　無限の闇だろうが亜空間だろうが、そんなもの知ったことか！
　本物のツインテールがない世界になんて、用はない!!

「俺のツインテールは……」

　究極まで燃え上がった炎は、やがて巨大な光となる。
　周囲を支配した偽りの闇やみ、カオシックインフィニットが光の洗礼を受け、ことごとく砕け散っていく──。

「輝光ひかりだ……!!」

「ウ……ウオオオオオオ────ッ!!」
　カオシックインフィニットの崩壊と共に、光に翻ほん弄ろうされ吹き飛ばされるダークグラスパー。
　はたと気づいて後ろを振り返ると、何な故ぜかブルーとイエローが地面を転がってくねくねと悶もだえていた。
「待ってそーじ、明かりつけちゃや……！　む、胸が……目立つもん………………え？」
「だ、駄目ですわ……こんな夜でも、誰だれかが通りかかるかもしれませんのに、こんな格好でお散歩……………………あれ？」
　二人同時に正気に戻ると、がばっと起き上がり、周囲を見回して……わなわなと震ふるえ始めた。
「む、むうう……テイルレッド……これほどのツインテールとは……!!」
　よろよろと立ち上がるダークグラスパーに、ブルーとイエローが揃って殺到する。

「ちょっと！　まだ途中よ！　何勝手に中止してんのよ、幻覚でもいいから続き見せなさい！　も、もう少しだったのに……!!」
「あ、あの首輪はどこに行きましたの!?」
「何い!?　この女子おなごども、何なに故ゆえこれほどにつやつやしておる!?」
　その尋常ではない雰囲気に気け圧おされたのか、ダークグラスパーは大きくバックステップして距離を取った。
　俺の視線に気づいたのか、ブルーは両手で顔をかくし、後ろを向いてしまった。
「やっ……見ないで、ごめん、ホントごめん！」
「いや、何か変な幻覚見せられたんだろ？　俺もだから、あんま気にすんな」
　この反応を見れば、愛あい香かたちも似たような状況だったのかもしれない。
　何が幸せな世界だ。おそらく、かけられた相手の記憶を依より代しろに、こういうものなら喜ぶだろう、こうなれば嬉しいだろう、と身勝手に判断し構築されるのだろう。流れ作業に等しい、杜ず撰さんな幻覚だ。本当の願望は見抜けず、幸福を掲げながら心の琴線に触れる愚かさが、術者の皮相な想像力を露呈させている。
「も、もしかして……あたしが出てきたの？」
　何な故ぜかブルーは頬ほおを染め、ちらちらとこっちを見て両手の人差し指の指先をちょんちょんと合わせている。
「ああ。でも、風ふ呂ろ場ばでお前がツインテールを解ほどいたから……その時から、幻覚じゃないかって疑い始めたんだ」
「…………………………は？」
　何かおかしいことを言っただろうか？　ブルーはあんぐりと口を開け、ぶつぶつと独り言を始めた。

「嘘うそでしょ……あたし、あいつとお風呂入る時、ツインテールのままじゃなきゃ幻滅されちゃうの……!?」
『戦いの最中に何いやらしいこと考えてるんですかビッチッチが————っ!!』
　耳をつんざくトゥアールの通信さけびで、俺たち三人はダークグラスパーと相対する。
「闇やみを砕き散らしたあの瞬間、貴様のテイルギアが変化したように見えた……。この世界で最強の存在でありながら、貴様のツインテールは未いまだ進化し続けているのやも知れぬ」
　テイルギアが!?　自分では気づかなかったが……。今見回しても、変わった部分は見られない。奴やつの言う通り、火事場の馬ば鹿か力、一瞬の変化だったのだろう。
「ツインテイルズ……いや、テイルレッドよ！　貴様の力をいささか以上に侮あなどった……！」
　ダークグラスパーは、眼鏡めがねの縁ふちをなぞり、その手に巨大な処刑鎌デスサイズを出現させる。
「返礼に、我わが完全解放ブレイクレリーズを以もって決着としよう！　今度こそ完全なる闇を与えてくれるぞ!!　死という暗黒をな!!」
　マントを放り捨て、空中に浮遊していくダークグラスパー。
　背中に傘かさの骨のように扇状に広がっていたパーツが、鎌かまを持つ右腕へ力を一点集中するように展開し、起ち上がった。
　それに呼応するように、鎌が完全解放ブレイクレリーズされていく。
　柄えの部分がグリップ部を残して縮み、それを中心に刃やいばの部分が反対にも形成される。
　刃と刃を結ぶように黒い光線が繋つながれ、ダークグラスパーの身体からだよりも巨大な弓が完成。
　そして、発光した眼鏡めがねから飛び出した光が形を持ち、妖あやし

く黒光りする一条の矢となった。

「オーラピラーが来るぞ！　みんな、散れ!!」

「わらわにオーラピラーなど不要！　目の前全てを的とし、真なる闇やみを以もって完全粉砕する!!」

　片翼の堕だ天てん使しが、天を支配してゆく──。

　圧倒的なエネルギー量に、周囲の地面が抉えぐれ、持ち上がっていく。

　その現実離れした異質な様は、まさしく闇の化身が底知れぬ全容を解き放ったからに違いなかった。

「あれはやばいぞ……！」

「くっ……ど、どうしよ、あたし、もう身体に力入んないよ……」

「わたくしもですわ……。あ、あの幻覚、わたくしたちの残った体力も根こそぎ奪ってしまったようですわ」

　無理もない。二人はただでさえ合体技を使って、疲ひ弊へいしきっていたんだ。

（俺は──）

　強がりたいところだが、俺こそ、さっきの脱出で限界以上に力を振り絞ってしまっている。奴やつの全力の一撃を凌げるほど、体力は残っていない。

　そんな俺たちが、あいつの最後の一撃に対抗するには、どうすればいい!?

　左腕を見つめる。テイルギアをまとってから今まで一度も使ったことのない、この力……。

「三つの心を……編む……」

　俺は、ケルベロスギルディの最さい期ごの言葉を思い出し、呟つぶやいていた。

「皮肉なもんだな……。ツインテール以外の力を拒んでいた俺が、

一番最初に使う属性玉変換機構エレメリーションが……ツインテール以外の髪型だなんて」
　確信があった。
「俺には三つ編みは似合わないと思うけど……俺たちのことを認めてくれたんだ」
　この力はきっと、俺たち三人の力を一つに編んでくれると。
「ケルベロスギルディ……お前の力、使わせてもらうぞ!!」
　俺は左腕を構え、発動の補助電子音声ナビゲートボイスより先んじて叫んだ。
「属性玉エレメーラオーブ――三つ編み属性トライブライド!!」
　左腕から強烈な光がほとばしり、身体からだを凄すさまじい衝撃が襲う。
　さあ三つ編み属性トライブライドよ……俺たちの力を一つにしてくれ!!
　天空より俺たちを傲ごう然ぜんと見下ろすダークグラスパーへと、高々と手をかざす。
　俺の左腕から飛び出した光は、まずイエローへと降り注ぎ―
「きゃっ!?」
　再着衣リバースしたはずのテイルイエローのギアが、再び弾はじけ飛ぶように脱衣パージされ、ユナイトウェポンに合体してしまった。
「……そ、そんなに強引に脱がさなくても……」
　いつもは嬉うれしそうに脱いでいるのに、こんな時だけ恥ずかしそうに胸を抱きしめるイエロー。
　これが、三つ編み属性トライブライドの効果だっていうのか!?
「違う！　俺じゃないぞ!?」
　イエローは口くち許もとを手で隠し、眼めを細めて俺を見てくる。やめてくれ、そんな眼で見ないでくれ、今俺めっちゃ決め顔だったのに！　この一分間で口走った台詞せりふ一旦全部取り消したい!!

「はっ……！　そういうことだったのですわ……！」
「え？」
　呆(あっ)気(け)に取られる俺とブルーは、いつの間にか武器を握っていたのに気づいた。
　強制的に武器が出現させられている──!?
　だが、イエローは未(いま)だ戸惑う俺たちを、叱(しっ)咤(た)するように説明した。
「合体ですわ！　三人で合体ですわ!!」
「合体!?　そ……レッドと!?」
　何(な)故(ぜ)かやけにその単語に敏感に反応するブルー。
　確かに、予想だにしなかった言葉だ。俺は、弱々しくイエローに返した。
「ごめん、テイルギアからも〝説明〟が浮かんでこないし、何が何だか」
　こんなことしてる間に、ダークグラスパーは──。
　はぁぁぁ……と力を溜(た)め、律儀に発射直前の状態で構えたまま、静止して待ってくれている。
　やっぱりあいつはアルティメギルなんだなあ、と、妙なところで納得してしまった。
「いいから早くして下さいまし！　言う通りにしないとわたくしもっと脱ぎますわよ!!」
「わ、わかった、やるよ!!」
「今の、女から男への脅迫で合ってるのよね……!?」
　イエローの恐ろしい脅し文句に、俺とブルーは互いの武器をユナイトウェポンに近づける──瞬間。
　ランスがユナイトウェポンの下部パーツに、ブレイドが上部パーツに。

普段とは違う、縦だけでなく横にも展開した伸長変形をし、力強くジョイントされた。

ブレイザーブレイド、ウェイブランス、そしてヴォルティックブラスターとユナイトウェポン……三人の武器が、一つに合体したのだ。

「フュージョニックバスター！　完成ですわ!!」

「……ユナイトウェポンに俺たちの武器無(む)理(り)矢(や)理(り)くっつけただけのような気もするが……」

玩具(おもちゃ)で正規の合体に満足できず、自分で遊び方を模索し始めてゴチャゴチャ合体を試す子供のようだ……。

だが、溢(あふ)れみなぎる力は本物だ。

俺たち三人の力を一つに合わせ、砲口に極大の属性力(エレメーラ)が収束していく!!

「三体合体じゃと!?　おのれこしゃくな!!」

一時停止を解除したように、驚きの声を上げるダークグラスパー。

すまん……何かすまん。

先程までの怒りすら少し薄れるほど、その気遣いが申し訳なかった。

「レッドがこう！　トリガーを持つ！　そして、わたくしとブルーが左右からこうして！　横を持って、レッドの肩に手を置く!!」

何やら、持ち方や立ち位置について、イエローから指導が入る。

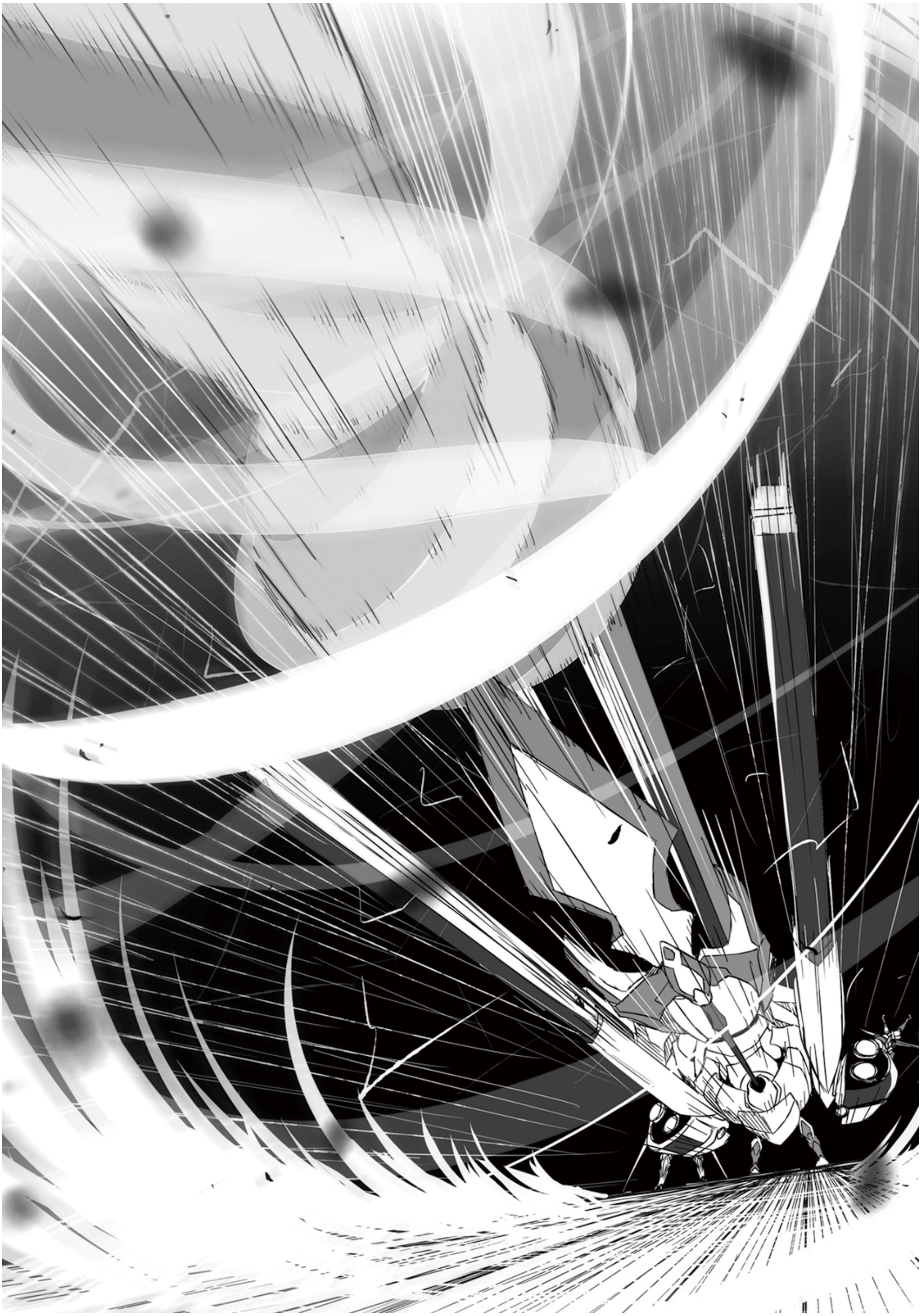
言われるがまま、俺たちは所定の位置につき、巨大砲を支えた。

「ファイヤー！　で発射ですわよ、せーの、フ」

「え」

俺は最初のファイヤーを発射の合図と勘違いし、トリガーを引いてしまった。

　猛烈な唸うなりを上げ、三色三重の螺ら旋せんの光線が発射される。
「受けよ、ダークネスバニッシャー…………何!?　早いのじゃああああああああああ!!」
　時既に遅し、ダークグラスパーは膨大な光に飲み込まれていた。
「フライングですわ――――――っ!!」
　イエローはツインテールをアンカーにして耐えたが、その域にまだ達していない俺とブルーは、津波の直撃を受けたように莫ばく大だいな衝撃に晒さらされ、苦く悶もんの声を漏もらした。



　それでもまだ俺は立ち位置が中心なので、巨大な砲体が風圧を軽減してくれたが……何の助けもないブルーに至っては、台風の中継でリポーターが持った傘かさのように、引っかかっているのがやっとの状態だ。

　踏ん張ってくれ、その体勢なら、空気抵抗は限りなくゼロのはずだ!!

「貴様ら、普通こうまで、お膳立てを整えて……やったら、正々堂々……中間でぶつかるように撃ち合いっこ………………のあああああああああああああああああ!!」

　目を灼ゃく爆光。

　周囲は光の津波に呑のまれ、翻ほん弄ろうされ、大気が鳴動した。

「ぐあっ……！」

　濛もう々もうと煙が立ちこめる中、地上に落下していくシルエットが見えた。

　ダークグラスパーを、倒したのか……!?

　今度こそ、完全に力を使い果たした。

　俺たち三人は、次々に膝ひざをつき、息を荒らげた。

　しかし、そんな俺たちとは対称的に、晴れていく煙の中浮かび上がるのは……両の足で立つ、少女の姿だった。

「あれをまともにくらって、無傷だっていうのか!?」

　慄りっ然ぜんとする俺の目の前で、露あらわになる全身像。

「…………ん？」

　ダークグラスパーは健在……ではなく、一糸纏まとわぬ姿で仁王立ちしていた。

「なっ!?」

　動揺する俺より先に、ブルーが目の前の全裸っ娘こに向けて叫んだ。

「何で全裸になってんのよおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお!!」
「それは、テイルレッドの願いだからですわ」
　イエローが、自信満々に濡ぬれ衣ぎぬ冤えん罪ざいの極みを口にする。
「……あんた……」
　ブルーに犯罪者を見るような目で見られ、俺は全力で首を振る。
「武装を解除して無力化すれば、戦う必要は無くなると思ったのですわよね？」
　今さらそんなフォローをされても、という気はするが、確かにダメージを与えずに武装解除させる、それは人間との戦いに悩んでいた俺が導き出した、一つの答えだったのかもしれない。
　あれ、じゃあ、やっぱり誤解じゃなく俺が裸にしたのか!?
『いやああああああああああああああやめなさいイースナ！　そんなギリギリ私のストライクゾーンから外れた貧相な裸見せるんじゃありません！　この変質者！　痴ち女じょ！　露出狂!!』
　トゥアールは何な故ぜ、突然自己紹介を始めたんだ!?
　……あ……イースナを糾きゅう弾だんしているのか。
　けど、よく見れば……いや、よく見てはいない、首から上だけだ……その前提でよく見れば、ダークグラスパーは変身を解除されたわけじゃない。
　おどおどとし、世界の何もかもを恨んでいるように暗い目をしていた、イースナとは違う。
「満まん身しん創そう痍いでの逆転じゃ、早出しは目を瞑つむろう。……見事な一撃じゃ。──と賞賛の言葉を送りたいところじゃが……フッ……わらわを裸にできても、眼鏡めがねまでは取れなんだか」
「いや、眼鏡だけ残って何になるってのよ！　前隠せヘンタイ!!」
　……裸にしたのは俺たちなのに、それは暴言だろう……。

「ダークグラスパーさん……あなたはそれほどまでに、眼鏡を……」
　横でイエローがやけにそわそわしていると思ったが……
「～～～～～っ……何か悔しいですわ……わ、わたくしも!!」
「脱ぐんじゃないわよこれ以上!!」
　不穏な言葉が聞こえてきたので、そっとしておく。
「眼鏡属性グラスを持つ者にとって、眼鏡とは心しんの臓に等しきものじゃ！　たとえ己が柔肌を晒さらそうと、決して眼鏡だけは外さぬ!!」
「くっ……敵ながら見事な心意気だ……！」
「あんたは目の前にすっ裸の女がいんのに、なんでそんなリアクションなのよ!!」
　待ってくれていた相手にまさかの不意打ちという、言い訳無用の蛮ばん行こうをしてしまった。
　後ろめたさをひた隠し、俺は、せめて顔面と眼光になけなしの正義ジャスティスをみなぎらせ、ダークグラスパーを睨にらみ返した。
「ダークグラスパー……いや、イースナ。お前はもう戦えない……。戦いは、終わりじゃないのか」
「いいや。わらわを無力化したいと願うのならば、お前はこの眼鏡をこそ外さねばならなかった！　だが、それが出来なかった！　それがわらわと今のお前たちとの、力の差じゃ!!」
『……などと意味不明なことをほざいていますが、今ダークグラスパーは無力です！　さあ愛あい香かさん、出番ですよ!!　性的じゃない方の18禁表現の開幕です!!』
　力尽きた俺たちと、武装が消滅したダークグラスパー。
　一見、条件は互角に思えるが、引きこもりだったというイースナが戦闘訓練を積んでいるはずがない。

　ブルーは俺の視線を遮さえぎるように前に出ると、肩を回した。

「Ｒ18はともかく……悪いけど、このままあんたを帰すわけにはいかないわ。拘束させてもらうわよ」

　ダークグラスパーは、不安などおくびにも出さず、迫り来るブルーではなくその後ろへと視線を向けた。

「ッ……な、何だ!?」

　遥はるか彼方から聞こえる、大気の咆ほう哮こう。

　耳をつんざく轟ごう音おんに驚き後ろを振り返ると、上空を、銀色の戦闘機が飛行していた。

　ステルス機にしては、あまりにも空力を無視したフォルム。

　大おお袈げ裟さなほどに所々が角張った奇妙な戦闘機は、左右の翼の先端にある砲口から光線を放ってブルーの眼前に着弾させ、弾幕を作り上げる。

「きゃっ!?」

　空力など、大気の妨害など、気に留とめることさえしない。

　地球の摂理にあえて逆らい、自みずからの力だけを頼みに超音速で飛ひ翔しょうする豪快な戦闘機は、ダークグラスパーの上空でホバリングすると、そのフォルムを劇的に変化させていった。

　翼が折り畳まれ、収納されていた各部が火花を上げて展開していく。

　最初は何か分からなかったそれらが、やがて、両手と両足を形作っているのだと悟った時、中央部からヘルメットをかぶった人間の頭のようなパーツが迫せり出てきた。

　ダークグラスパーの前に着地すると、無機質な銀に閉ざされた頭部に、双そう眸ぼうの光が灯ともる。

「……ロボット……!?」

　エレメリアンではない。

　近未来的な甲冑(かっちゅう)……テイルギアをさらに兵器として特化させた鎧(よろい)が、意志を持って歩いているような──人間型の戦闘兵器。
「健闘を讃(たた)え、紹介しよう。ツインテイルズよ」
　最後に、頭部の左右から逆三角のパーツがそれぞれ飛び出し、兵器はツインテールとして産声を上げた。

「彼女の名は、メガ・ネプチューン＝Ｍｋ．II」

　闇(やみ)の支配者を守るべく立ちはだかる、海を支配する神(ネプチューン)。
　しかしそのどこまでも無機質な純銀には、海王星(ネプチューン)こそがふさわしいのだと、名前の由来に気づく。太陽の温もりからもっとも隔(へだ)たれた、冷たく、寂しい惑(ほ)星(し)こそが……。
　ダークグラスパーは、そんな〝彼女〟を、誇らしげに手で指し示した。

「……わらわの、唯一の相棒(バディ)じゃ──」

エピローグ　鋼鉄のツインテール。

　なんてことだ……ここまできて、ここまで戦って、この上さらに増援だなんて。
　あのダークグラスパーが相棒とまで言う戦士。機械仕掛けだろうと、その戦闘力は折り紙付きだろう。
　俺はブルーの肩を掴つかんで、後ろに引き寄せた。
「……レッド？」
「イエローを連れて逃げろ。髪紐属性リボンを発動するぐらいの力は残っているな？」
「何言ってんのよ！　あんただけじゃ無理よ!!」
　反論するだろうとは思ってたが……こればっかりは譲れない。
　だが、ネプチューンと呼ばれたロボットは──

「初めまして～イースナちゃんがお世話になりました～」

　こともあろうに、俺たちにぺこぺこと頭を下げ始めた。
「ほんまごめんなぁ、この子友達おらんから、遊んでくれる子にはもう粘着質で。せやから友達無くすのになぁ～」
「余計なことは言わんでよいのじゃ！　おかんか貴様!!」
　特攻隊の覚悟で腹を括くくっていた俺も、ブルーもイエローも、ネプチューンの予想外のキャラクターを目の当たりにし、一様に固まってしまう。
「……」
「……」
「……」

やけに好意的なあいさつも気を削そがれたが……それ以上に、彼女の声は、ツインテール以外一つも女性らしさを感じさせない硬質で角張ったフォルムと裏腹に、幼いキャラの演技モードに徹したアイドル声優のように、甲高い声だったからだ。

ネプチューンは、手刀でイースナの頭をべしっ、と叩たたく。

「はしたないで！　年とし頃ごろの娘さんがなんやその格好は!!」

「馬ば鹿か者！　これは名誉の負傷じゃ！」

「しゃあないわ、今服とか持ってへんから……はいこれ、ＱＲコードのシールや！　胸とお股またに貼はっとき!!」

「わらわのアドレスではないか!!」

くっ……確かに信頼している相棒のようだ、息つく暇ひまもなく流れるような漫才を!?

何だこいつら、こんなボロボロの俺たち相手に、この上まだ油断でも誘おうってのか!?

「テイルレッドよ」

シールを貼はったダークグラスパーが、俺に近付いてくる。

「貴様を、我わが好敵手と認める。もう、トゥアールのことはとやかく言わん。受け継いだそのツインテール属性、極限まで使いこなしてみせよ」

「言われるまでもねえ」

「貴様も……わらわを好敵手と認めるか？」

「お前がツインテールを愛する限り……戦いは避けられないだろうからな」

胸と下腹部に文庫本くらいのサイズのシールを貼っているのがものすごいシュールだが、これなら何とか、無様に目を逸そらさずに済みそうだ。

「フッ、言うたであろう、ツインテール以上にわらわが愛するもの

は、眼鏡めがねじゃと」
　ダークグラスパーは、目線が下に下がらないよう苦慮する俺と裏腹に、まとわりつくような視線を投げかけてきた。
　もはや値踏みですらなく、全身を舐め回され味見をされるかのようで、鳥肌が立つ。
『ッ……いけません！　その目は……ダークグラスパーじゃありません、ストーキングを純愛とほざく厚顔無恥な犯罪者、イースナの目です！　危険です、逃げてください総そう二じ様！　もはやぬるい恋愛ゲームには出演ＮＧなエロゲ顔フェイス！　発情した雌メスのツラをしています!!』
　いや、普段よくこういう目で見られるから、言われるより先にダークグラスパーの目の変化に気づいたのだが……。たとえば、トゥアールとかから……。
「よく見ると貴様、幼な子のくせに凜り々りしい面構えをしておるのじゃ。表面上の愛らしさに隠された、秘めたる男らしさというか……な、何か、見ていると堪らんのう」
　ダークグラスパーは息を荒らげ、せっかく貼った股またのシールを剥はがし、俺に手渡してきた。
「何してんのよヘンタイ!?」
　ブルーの抗議も聞かず、人肌に温まったシールを、上から手を重ね指を折り握り込ませる。
「好敵手ならば、アドレスを交換するのは当然。このアドレスを登録したら、すぐにでも送ってくるがよい。二十四時間いつでも、二分以内に返信することを約束しよう」
　重たい。重たすぎる。今このシールぺいって捨てたら、ばっちいと思われたと勘違いして傷つけるだろうし、何より以前聞いた時より返信速度がパワーアップしている。ただただ重い。

「アドレス交換のついでじゃ、唇くちびるも交換しようぞ」
　眼鏡のレンズ越しに俺を見つめる、蠱こ惑わく的な瞳。
「……またかよ」
「またキスマークの型でも取る気？　ほんっとこいつらって……」
　唇くちびるの魚拓を取って喜ぶパピヨンギルディを思い出し、げんなりとしていた俺たちは、イースナが近づいてきてもなお、危機感を逸いっしていた。
　頬ほおに手を添えられ初めて、その冷たさに動揺し……そして。

　握手でもするようにあっさりと――イースナは、俺に唇を重ねた。

「「『ああああああああああああああああああああああああ!!』」」
　三人の絶叫が……ひどく遠く聞こえる。
　まるで、新幹線やエレベーターで耳じ閉へい感かんに苛さいなまれているように……。
　う、奪われた……。
　胸と股またにシールを貼はった全裸の女の子に、ファーストキス……。
　いや、格好は関係ないけど……こ、こんな急に……!?
「……見ておるのじゃろう。すまぬトゥアール……。ふしだらな女と罵ののしってくれても構わぬ！　わらわは、テイルレッドに心奪われてしまった……。わらわのことは、あきらめてくれ!!」
『えっ、何で私がフラれたみたいになってるんですか!?』
　心奪われた……!?　何を言ってるんだ!?

　──頑張るのよ、総そうちゃん！　父さんや母さんの果たせなかった夢を叶かなえてね！──

　なんで今、母さんの言葉を思い出すんだ……。
　俺は足腰立たなくなり、地面にへたり込んでしまった。
「っがあああああああああああああああああああああああああああああああああ!!」
　どこにそんな力が残っていたのか、ブルーはウェイブランスを取り出し、獣のような叫びを上げながらダークグラスパーに投とう擲てきした。
「危ないわっ！」
　ロボットとは思えない滑らかな動きで、ランスの穂先を真剣白刃取りするネプチューン。
「何を……何をしてんのよあんたあああああああああああああああああああああ!!」
　やばい、あの目……リヴァイアギルディをしばき倒した暴走状態だ!!

「ゆくぞメガ・ネ、今日のところは引き上げる。また会おうぞ、ツインテイルズ！　テイルレッドよ！」
「……うーん、ザ・悪役って感じの台詞せりふやわ、イースナちゃん……」
　ネプチューンの目が発光し、またもや駆動音を轟とどろかせて変形を始めた。
　だが、先程の巻き戻しにはならない。
　胴体の位置からシャフトと車輪がせり出し、折り畳んだ足からも同じように車輪が現れた。

　ネプチューンが変形したのは二輪駆動車……バイクだ。

　最後に俺に意味ありげな視線を送ると、ダークグラスパーは白い細足を振り上げ、ネプチューンの背にまたがった。

「ギャ――――せめて何か羽は織おってから乗りぃや――――!!」

「いらぬ！　この裸体はわらわの敗北の贖しょく罪ざい！　テイルレッドの視界から消えるその瞬間までこうして尻を晒さらして去ることが、敗者の責めじゃ!!」

「うちは勝負と関係あらへんわあああああああああサドルに直に感触が――――!!」

　アイドリングで大きく揺れる車体、その上に乗るダークグラスパーは、何な故ぜか頬ほおを赤くし始めた。

「……む、何じゃ、振動が………………な、何か、妙な気分に……」

「こらあか――――んヘンなモン芽生えさせる前に、発進!!」

　ブルーに飛びかかられる寸前、ダークグラスパーを乗せたネプチューンは急回転させたタイヤで地面を抉えぐり、走り去っていった。

「待てゴラアアアアアアアアアアアアアアアアアアア」

　ブルーの叫びが、虚むなしく空に吸い込まれていく。

「う、うう、み、観み束つか君が……敵の魔の手に……うう、あんまりですわ……」

『い、いえ、変身してたからギリギリセーフですよね!?　ね!?』

　イエローとトゥアールの声が、交互に響く。

　もう、何が何だか、サッパリだ。

　今すぐにでも、大の字に寝転んで寝てしまいたい。

　身体からだ中を包む倦けん怠たい感に抗あらがえず、俺は右腕に力を込めて変身解除した。

「……あ、れ……？」

　いつも通りやっても、変身が解除されない。

　少し焦りながらも入念に変身の解除を頭で念じると、ようやくでブレスが作動し、男の姿に戻ることができた。

　今まで以上に疲れていたからだろうか。最後の最後で、少し肝を冷やした。

　ともあれ一息つき、空を見上げる。

　歪ゆがんでしまっているとはいえ、あいつも、守りたいもののために戦うことを選んだんだ。

　その信念の強大さを、こうして俺たちは目の当たりにした。

　俺は、くしゃくしゃで多分もう読み取れないだろうＱＲコードを、固く握り締める。

　もっと、俺のツインテールを磨かなければ。この世界の、ツインテールを守るために──。

あとツインテールがき

　一巻で三〇〇を超え、もう二巻でそれはないだろうと思ったらまた三〇〇を超えてしまい、さすがにもう三巻になったら一〇〇ぐらいになるだろうと思ったらやはり三〇〇越え。

　（※ページ左上の小さな章題は含まず）

　このように「ツインテール」という単語の出現回数が他に類を見ないこの作品ですが、他に多い単語の一つに「エロゲー」があります。

　今回、制作途中で東京に行き、ファミレスで担当さんと原稿直しをしていたのですが、その時恐ろしいまでにエロゲーという言葉が乱舞していたのです。

　その時は僕も担当さんも二日で三時間くらいしか寝ていないという疲ひ労ろう困こん憊ぱいな状態だったので、僕もしばらくは意識していなかったのですが、担当さんが何十回目かの「エロゲー」と言った瞬間、狙ねらったようなジャストタイミングでウェイトレスさんが「コーヒーおかわりどうぞ」と真顔でポッドを差し出してきたのが面白すぎて、吐血紛まがいに「ごぶふお」と笑ってしまったあたりから、もう意識して仕方なくなりました。…………楽しい制作環境です。

　エロゲーと口にしたのを聞かれるだけでこのダメージなのですから、赤の他人の目の前でエロゲーをプレイするとかとんでもない奴です。そんな強敵の出現で加速するツインテール三巻、いかがだったでしょうか。（ここまで前置き）

　皆さんのご声援のおかげで三巻までこれました。いつも本当に励みになっています。

　ファンレターや感想で拝見する「こういう展開が見たい」は、だ

いたい僕もやりたいと思っているもののことが多いので、続刊すればきっとお目見えするはずです。

　毎回全力で突っ走りますので、引き続き応援よろしくお願いします!!

　謝辞です。

　帯のコメントを寄せていただいた逢(あい)空(そら)万(まん)太(た)先生。本当にありがとうございます！　逢空先生には水沢夢のＡＡを作ってもらったり、本当お世話になりっぱなしで……。一度、特撮について語り尽くしたいものです。

　担当の濱(はま)田(だ)さん、今回もすみませんでした。四巻はエロゲーと連呼しなくてもいい内容になります！　と、確約はできません!!

　そしてイラストの春(かす)日(が)さん。「メガ・ネプチューン。ジェットやバイクに変形するツインテール」というアホのようなプロットを渡しても途方に暮れず、こんなにも素晴らしいキャラを生み出していただき、ありがとうございます！

　今回も、完成と出版に携(たずさ)わって下さった全ての皆様に感謝とツインテールを!!

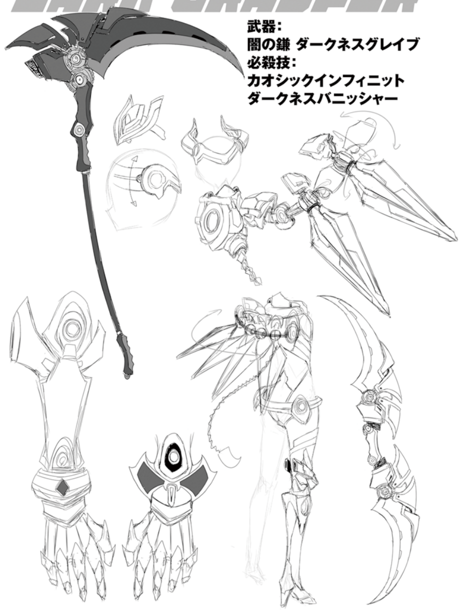
　このあと、またエレメリアンの募集が載っていますので、巻末設定資料と一緒にご覧になってください!!

水沢　夢

グラスギア設定資料 01

ダークグラスパー

DARK GRASPER



武器:
闇の鎌 ダークネスグレイブ
必殺技:
カオシックインフィニット
ダークネスバニッシャー



イースナが神眼鏡（ゴッドめがね）で変身した姿。全てを見通す神眼鏡の力をもって、トゥアールのテイルギアの構造のほとんどをコピーして完成した「グラスギア」。眼鏡（グラス）属性に加え、強力なツインテール属性も持ち、その相乗効果から凄まじい戦闘力を生み出す。なお、神眼鏡をもってしても解明できなかったテイルギアのブラックボックスは独自のアレンジで補強されており、真の力は未だ秘められたままである。

ぼくのかんがえたエレメリアンのコーナー

No.002 パピヨンギルティ



本編挿絵に登場!!

栃木県・T.Mさん(22歳)の作品

水沢夢の選んだポイント

今回から新たに昆虫のエレメリアンも加わりました。一巻から昆虫での応募はありましたが、それも含め、完成度の高かったこちらを選出しました。春日先生も、「ほぼリファインの必要がない」との太鼓判です。ありそうでなかった唇の属性も、ポイントです!

応募のポイント

エレメリアンの属性は物語に深く関わってくるため、あまりにもメジャーな属性は、逆に採用が難しい場合があります。ニッチな属性、面白い性格など、「これは他に誰も思いつかないだろう」というアイディアが思い浮かんだら、迷わずご応募ください!!



岡山県・K.Sさん(19歳)の作品

◀▼次点でこの二作品です。今回は文章で少し触れただけですが、後々戦いに参加するかも?(水沢)



兵庫県・孤立無職さん(29歳)の作品

応募方法

ハガキの表に住所・氏名・ペンネーム・年齢・電話番号を、裏にエレメリアンの名前とデザイン、属性力を書き、下記のあて先までお送りください。また、デザインのみ、属性力のみでの応募も可能です。

▶▶▶ 〒101-8001
東京都千代田区一ツ橋2-3-1 小学館
ガガガ編集部「ぼくのかんがえたエレメリアン」係

メールでのご応募の場合は、
データファイルを添付してこちらのアドレスまで。

▶▶▶ **sukisukitwintail@gmail.com**

なお、採用したエレメリアンの著作権は著者およびイラストレーターに帰属されます。また、応募していただいたハガキ、ファイルの返却は行っておりません。

水沢夢

Yume Mizusawa

北国在住のツインテール作家。相も変わらずツインテールへの愛を原動力に執筆しています。他の作家さんがよく言っている「喫茶店で執筆」に憧れ、何とかやってみたいと思うものの未だ実行できず。この三巻も自宅で完筆しました。

小学館ｅＢｏｏｋｓ
俺、ツインテールになります。３

２０１３年５月31日　電子書籍版発行

者　水沢夢

行人　佐上靖之

集人　野村敦司

集　濱田廣幸

行所　株式会社　小学館

〒１０１-８００１

東京都千代田区一ツ橋２-３-１

s-ebook@shogakukan.co.jp

本　２０１３年３月24日　初版第１刷発行

　ISBN978-4-09-451398-1